

年報

平成 20 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences
公立大学法人大分県立看護科学大学

評価は自己点検・評価から

自己点検・自己評価、認証評価、法人評価などさまざまな評価が義務づけられ、評価される側にも、評価する側にも「評価疲れ」の傾向さえ見受けられるのが現状ではないでしょうか。

己の行動に対して社会的な責任を果たしていくためには、自主的に評価を実施し、その結果をフィードバックしていくことが基本であり、認証評価も、法人評価も自己点検・自己評価がベースになっております。

本学では、平成10年の開学当初から、自己点検・評価、他者評価、外部評価、第三者評価を定期的に行ってまいりました。

年報の刊行を自己点検・評価の一つの方策として位置づけ、開学以来、毎年、継続して発刊してまいりました。平成19年からは、年報の印刷・製本を止め、インターネット上で、公表させていただくことにしております。

評価の基本は、自己点検・評価であり、年報の発刊を通して、研究、教育、地域貢献、大学運営に関して自らの点検・評価を、毎年、定期的に行い、教員個人および組織としての大学はそれぞれ1年間の足跡を振り返ることにより、それぞれの成長・進化につながると考えております。

本学は、法人化にあたり、単科大学として法人化する道を選択させていただきました。全国の公立大学の統合・法人化が並行して進められる中で、本学の選択がよかったかどうかの評価を行うまでには、もう少し期間が必要とされますが、単科大学としての特徴を最大限に活かした大学運営をしていきたいと考えております。今のような形の大学全体としての年報を、毎年発刊できるのも、単科大学であるからかもしれません。

「スケールメリット」が強調される中で、単科大学としての合理的な大学運営を模索し、存在感のある大学を目指してまいります。

昨年は、開学10周年を迎えました。新たな気持ちで、次の10年の大学としての足跡を築いていきたいと思っております。

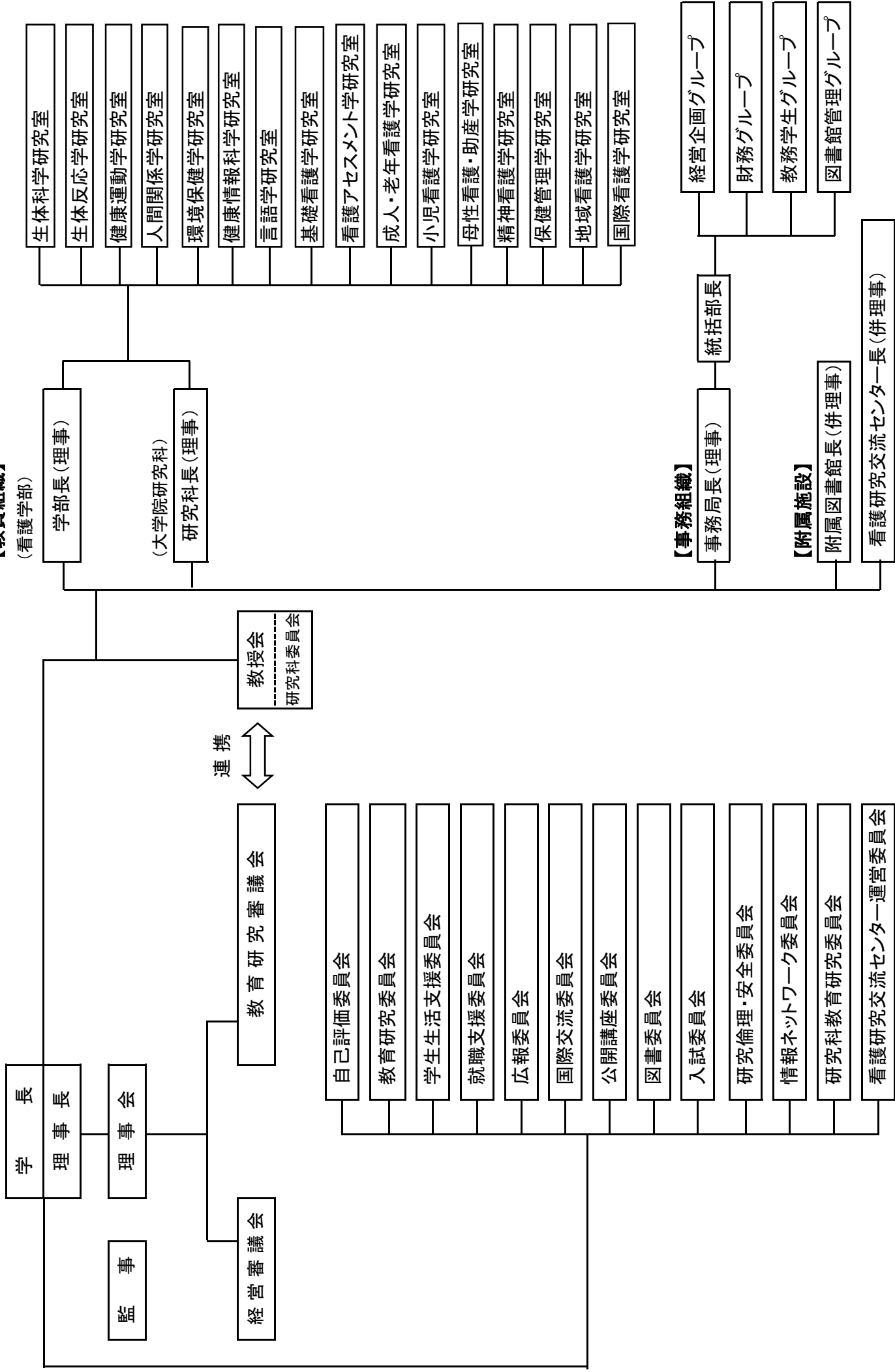
平成21年5月

学長 草間 朋子

も く じ

1.	委員会／ワーキンググループの活動	2
2.	学内行事の概要	24
3.	教育活動	30
4.	学内セミナー	104
5.	学内プロジェクト研究	105
6.	先端研究	107
7.	奨励研究	109
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	112
9.	業績	113
10.	地域貢献	124
11.	外部資金	135
12.	各種研究・研修派遣	137
13.	学外者の受入	140
14.	教職員名簿	141

大 学 組 織 図



1 委員会／ワーキンググループの活動

1-1 理事会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、石川 誠（以上、学内理事）、有田 眞、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

1-2 経営審議会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、石川 誠（以上、学内理事）、有田 眞、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）、古賀 和枝、佐藤 誠治、森 哲也、高山 龍五郎（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

1-3 教育研究審議会

委員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、石川 誠（事務局長）、三舟 求真（学外委員）、各研究室代表者、各委員会委員長

本委員会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は15回の教育研究審議会を開催し、各委員会の報告と中期目標・中期計画に関する事項、カリキュラム改正（新カリキュラム）に伴う学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告した。

1-4 教授会

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、各准教授、各講師

教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行うことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学、退学については教育研究審議会で審議し、教授会に報告することとしている。

本年度は7回の教授会を開催し、学部入試の可否判定、卒業判定及び学生の表彰（学長賞、優秀賞）などについて審議した。休学、復学、退学については教育研究審議会から報告を受けた。

1-5 研究科委員会

構成員 草間 朋子（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会の役割は、大学院の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行うことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学、退学については教育研究審議会で審議し、本委員会に報告することとしている。

本年度は6回の研究科委員会を開催し、大学院入試の可否判定、課程修了に関する事項、新専攻設置に関する事項などについて審議した。休学、復学、退学については教育研究審議会から報告を受けた。

1-6 自己評価委員会

構成員 菅野 公浩、吉田 成一、稲垣 敦、大賀 淳子、濱田 佳代子、後藤 一昭

FD活動

1) 平成21年度科学研究費補助金の申請について申請資格のある教員に情報を提供し、申請を促した。平成20年7月29日に科学研究費補助金を獲得している教員2名（人間科学、看護系）により、科学研究費補助金獲得についての方法等、及び事務方より科学研究費補助金獲得について事務的な講演が行われた。平成21年度科学研究費補助金の申請状況は、既に獲得している者や離退職者が決まっている者を除き、ほぼ全員が申請した（講習会参加者が44人、新規申請件数が42件）。2) FD講演会として、平成21年3月2日千葉大学看護学部教授の舟島なをみ氏を講師として招き、講演（テーマ「看護教育における授業評価」）を行った。3) 当委員会の委員のべ5名がFD研修会、大学評価に関する研修会等に出席した。4) 平成20年度の国内研修派遣教員の募集を行い、看護系教員6名を決定し、国内研修を行った。5) 新人教員教育制度について、前年度までの課題を踏まえて、新任看護系助手とそのサポートを担当する教員を選定した。また本制度の成文化を行った。看護系新任助手6名と自己評価委員会FD担当委員の参加で意見交換会を6月と12月に開催した。平成21年2月末にアンケートを実施してその結果を踏まえて今年度の活動を評価し、次年度の新任教職員研修プログラムを企画した。

授業評価

学生による教員の授業評価を講義を担当した全教員に対し行った。アンケート記入表の裏面に自由記述を書いてもらう事で、1枚のカードにした。前年試行した、看護学実習、健康科学実験、卒業研究および4年間の総合的な授業評価についても正式に導入し、学生による教員の授業評価を行った。また、看護学実習の授業評価法については、外部の学識経験者に評価を依頼し、アドバイスを得た。

アニュアルミーティング

平成20年度のアニュアルミーティングを3月6日に開催した。プロジェクト研究、先端研究、奨励研究の発表等、一研究室一演題以上の発表を行った（全18演題、内3題は3月23日に発表）。広報活動、学外者への対応については看護研究交流センターが行った。3月23日に3演題（3月6日未発表分）の発表を行った。

年報

平成19年度年報を6月23日学外HPに掲載した。また、平成20年度年報に関する説明会を7月29日に行った。説明会で用いた資料を学内Webに掲載し、教職員に周知した。委員会活動等、個人単位で入力内容を決定するのではなく、関係者から同意・承認を得る必要があることを周知した。平成20年度年報原稿は、平成19年度年報発行後より編集可能とし、年度内の原稿入稿完了を目指した。

今後の課題

- 1) 当委員会のメンバーがFDに関し、国内研修、講演会に参加する頻度を増やす。
- 2) 講師を招聘し、授業改善につながるFDの研修会、講演会を開催する頻度を増やす。
- 3) 授業評価システムの効率をはかるため、オンライン化の導入を検討する。授業評価システムのオンライン化を行っている施設に見学、研修に行き、検討する。
- 4) 平成22年度は、大学機関別認証評価の再審査（更新）があるため、大学機関別認証評価を既に受けた施設に見学、研修に行き、検討する。

1-7 教育研究委員会

構成員 市瀬 孝道、佐伯 圭一郎、甲斐 倫明、宮崎 文子、李 笑雨、藤内 美保、江藤 真紀、佐藤 俊実（事務局）、梅木 満長（事務局）

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。1)平成21年度学部生の助産学選考に関しては、ワーキンググループ（WG）が中心となって、口頭試問（実技含む）による選考を行い、4月の第2回教育審議会で承認を得た。2)本年度の国家試験対策に関しては、国試の補講は例年と同じく12月上旬に行い、模試については例年どおり国試直前まで実施、また国試終了直後に国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。3)卒業研究に関しては、3月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、指導・調整を行なった。また本年度から研究・倫理安全委員会と連携して調査研究フィールドが重複しないように調整した。例年どおり2つのサポートグループ（SG）を設置し、卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のサポートと、平成21年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎Ⅰの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。4)看護実習（第1段階～第5段階）に関しては、実習全体の日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施した。実習関連WGに関する活動内容は下記に記述した内容によって看護実習の充実を図った。5)本格運用となった大分大学との遠隔講義（単位互換科目）では「経済学入門」を後期より毎週水曜3限に15回にわたって行なった。また本学からは吉村准教授による「人間関係学」を遠隔講義によって大分大学に発信した。選択科目の「法学入門」ではe-ラーニング形式を取入れて行なったが、最後の8コマ目は県議による出前講義を行なった。6)平成20年度の保助看指定規則改正に伴い、カリキュラムの改正を行なった。実習の時期、期間等を見直すと共に、全授業科目について、科目の順序性、コマ数の見直し作業を行い、必要性のあるものは科目名、単位数、コマ数、開講時期等を変更し、学則別表を改正した。平成20年6月末に文部科学省に変更申請を行った。新カリキュラムについては平成21年度入学生から導入する。7)4年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、創立10周年記念総合人間学として全6回の講義を実施した。本講義は地域住民に対しても公開講義としているが、外部からの参加も多く見られた。8)正式施行となって2年目の進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し12月22日に実施した。再試験は平成21年2月23日に実施し全員合格した。9)研究予算関連では昨年に引き続きプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、プロジェクト研究については1件、先端研究2件と奨励研究6件を採択して大学の研究の推進を図った。10)短期海外派遣研究員に関しては、本年度も教員3名を海外の大学に派遣し、教員の研究の活性化を図った。11)平成20年度前期・後期の科目等履修生及び20年度の研究生の募集を行ったが、応募者はなかった。12)大分大学が主幹校となる戦略的大学連携支援事業の地域連携研究コンソーシアム大分では、県内大学・企業と連携を図り、本学では現在6テーマの研究が進められている。地域連携教育コンソーシアム大分の運営委員会が立ち上がった。13)教育研究委員会が担当する平成20年度計画に関しては、計画に従って遂行し、100%達成することができた。

来年度に向けて改善する点としては、卒業研究の優秀賞の決定法を見直すこと、学生の表彰の項目を増やすことを挙げている。また来年度新入生から新カリキュラムがスタートするが、カリキュラムに問題があれば随時改善して行きたいと考えている。

1) 国家試験対策WG

構成員 宮崎 文子、乾 つぶら、梅野 貴恵、小嶋 光明、定金 香里、高波 利恵、濱田 佳代子、
福田 広美、吉田 智子、梅木 満長

今年度の国家試験受験予定者は、看護師74名、保健師77名、助産師17名である。看護師、助産師不足の折から全国からの求人数は25,000人を超えた。これに応えるために、今年度も目標を高くし、保健師・助産師・看護師の合格率100%を目指した。教員、学生の対策委員は一丸となり役割分担をきめ9月より精力的に対策の計画を実施した。具体的には国家試験業者・学内模試、模試結果の分析による補講の実施、学習環境の整備、成績の振るわない学生への個人面接を2回実施した。また、卒論生所属研究室責任者の協力を得て、自己学習の意欲を引き出す努力も行った。今年度は国試WG会議を6回開催し国試対策計画はスムーズに遂行できた。結果として、4月26日実施の看護師必須問題では80%を超える正答率者が74名中6人であったが最終的には看護師の合格率は1人を除き全員が合格（合格率98.7%）した。保健師は100%、助産師は100%と合格率は、3職ともに全国平均を大幅に上回ることができた。

2) 実習関連WG

構成員 桜井 礼子、藤内 美保、大賀 淳子、小野 美喜、木下 結加里、関屋 伸子、田中 美樹、
松尾 恭子

1. 活動の概要

実習関連WGは、教育研究委員会のもと、看護系研究室からそれぞれ1名を選出し、月1回の定例会議を開催し主に実習に関連し以下の活動を行った。

1. 実習センター及び各領域の実習施設の実習環境の整備等
2. 実習に関連する文書等の見直し

実習ガイドブック/個人情報取り扱いに関するガイドライン/事故対応マニュアル等

3. 看護技術修得プログラム（第1段階～第3段階）の企画・運営・評価
4. 総合実習の企画・実施
5. 実習関連予算の管理
6. 看護技術修得確認シートの試用と改善

1. 実習センターの運営・管理および各実習施設の整備

実習センターの管理については、各段階の実習担当者との連携を図りながら、施設および物品の管理等を実施した。また各実習施設についても学生の実習環境の整備を行った。

2. 実習に関連する約束事等

1) 実習ガイドブックの作成

2008年度版の実習ガイドブックを、第4段階の地域実習のオリエンテーションに間に合うように、4月18日に完成、600部を印刷した。2009年度のガイドブックは2月に見直し、作成準備を行っている。

2) 個人情報取り扱いに関するガイドラインの見直し

2007年度に作成した個人情報の取り扱いに関するガイドラインの見直しを行った。

3) 事故対応マニュアルの見直し

事故対応マニュアルについては、実習中の事故に関しての取り扱いを、教員用のマニュアルとしてまとめたものである（学生用はガイドブック内）。今年度は、事故報告書の取扱について検討、学内での事故報告書の取扱について確認、事故内容については自己発生後すぐに教員に注意喚起するために情報をメールにて伝えることとした。また、アクシデントが起きた場合には、実習施設の求めがあれば事故報告書の提示を行うことを検討した。

3. 看護技術修得プログラム（総合看護学、技術チェック）の企画・実施

1) 第1段階：3年次対象 「4段階実習前技術チェック」

9月の1週目（9月1日～3日）に実施

今年度は、技術チェック項目（事例含む）とチェックリストの見直しを行い、血圧測定を必須技術として追加した。3年生88名がチェックを受け、1回目のチェックで不合格となった学生は13名であった。必須技術の「血圧測定」は1名のみ合格点に達しなかった。全体の平均点は78.8点で、不合格技術は「無菌操作・ガーゼ交換」「寝衣交換・口腔内清拭」「オムツ交換」などであった。

2) 第2段階：4年次対象 「総合看護学」 後期前半（10月～11月）の月曜

総合看護学は例年同様にグループ学習と発表の形式を取ったが、提出レポートの書式と提出日を変更した。レポートはそれぞれの課題別であったが一日の学びが比較できるように1枚/日とし、提出は当日であったものを自己学習による評価を加えられるように後日回収とした。その結果、学生は各課題における学習内容を自分の言葉で表現し学習内容を根拠に基づいて整理することが出来ていた。一方、WG担当以外の教員にも広く呼びかけ多数の参加を得て学生へのアドバイスを得た。

3) 第3段階：4年次対象 「卒業前技術チェック」 2月末国試後～3月（時期は学生と調整）

今年度は、安全面の配慮として「後片付けチェック表」の作成と「技術使用可能物品」の資料作成の2点を追加した。

4年次生が「後片付けチェック表」を用いてチェック後教員に確認を求めることで、医療廃棄物

等の安全面に配慮した。また、「技術使用可能物品」の提示は、4年生が使用物品の混乱をきたさずに練習やチェックを実施することができた。

4. 総合実習の企画・実施

平成20年度は、6月23日～7月4日までの2週間で、学生数は61名で、42施設に配置した。

平成21年度は、学生数が76名に増えることもあり、新たなフィールドとして3施設（黒木記念病院、大分岡病院、健康保険南海病院に依頼し、大分こども病院を加えた46施設とした。平成21年2月に学生へのオリエンテーションを行った。

5. 実習関連予算の管理

平成20年度実習関連経費予算を、主に学内実習室の整備費、演習に使用する教材費、実習センター整備費、各実習施設で使用する消耗品費、実習ガイドブック印刷費、実習用ファイル（学生用）費等に使用した。また、予算の使用状況を見ながら、修理が必要な備品や部品等の交換およびメンテナンス、備品の購入を行った。

6. 今年度の取組み

1) 看護技術修得確認シートの作成

看護技術修得確認シートは、第1～5段階までの実習をまとめて、学生が自分で看護技術の達成度を確認できる看護技術修得確認シートで、作成にあたっては、あり方検討会の報告書などを参考にしながら、平成19年度に卒業までに到達すべき内容を整理した。今年度は、試作した看護技術修得確認シートを、4年次生、3年次生に試用してもらい、意見をもとに見直し・改善を行った。平成21年度からは、作成したシートを学生に配布し、使用していく予定である。

2) 看護学実習に関する資料をWeb上にファイルを一本化

学内Webに「看護学実習」のページを作成、順次実習マニュアル等、実習に関連した資料をアップしていく予定である。

II. 次年度の取り組み予定

- ・臨地実習における指導者と教育の教育分担について見直し
- ・看護技術修得確認シート（看護師用）の実施および評価、助産師・保健師用の技術修得確認シートの試作

3) 進級試験WG

構成員 佐伯 圭一郎、岩崎 香子、江藤 真紀、小野 美喜、濱田 佳代子、吉田 成一

第2回の進級試験を実施した。出題依頼、問題の作成、学生へのインフォームを経て、12月に本試験を実施したが、81名受験して、41名が60点以上で合格した。2月の再試験の前に、本試験の結果説明会、生体科学研究室菅野教授による補講を実施した。再試験では受験者40名全員が合格した。

本年度の出題の分析と問題プールへの追加を行い、次年度に向けた検討を行った。

4) 助産学選考WG

構成員 林 猪都子、市瀬 孝道、梅野 貴恵、佐伯 圭一郎、宮崎 文子

4月に、平成21年度助産学実習履修許可者の選考を行った。教育研究審議会の議を経て10名に履修が許可された。

1-8 学生生活支援委員会

構成員 吉村 匠平、伊東 朋子、大賀 淳子、神崎 純子、定金 香里、佐藤 俊実、原田 幸代、林 猪都子、宮内 信治

学生の大学生活を充実させるための環境整備すること、困難を抱えている学生に必要なとされるサポートをタイムリーに提供することを目標に、下記の活動を展開した。前年度より引き続き行っている事業は、下記の通り。

1. 学生相談（学生個人を対象とするもの）

学年担任業務（学生相談窓口、ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの）、休退学・復学相談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。

2. 経済支援

奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給に関する面接）、奨学金情報の収集、周知活動、女性に機会を与える賞（国際ソロプチミスト）学内推薦者選考（平成20年度は本学学生が受賞）などを行った。

3. 学生の自主的活動への支援（コンサルテーション活動）

サークル活動支援（サークル費配分に関するコンサルテーションなど）、ボランティア活動支援（トラブルに巻き込まれた際のサポートなど）、若葉祭における実行委員サポート、自治会活動サポート（自治会からの相談窓口）、学生が主体となる自発的な活動（創立10周年記念スポーツ大会）の支援などを行った。

4. 健康支援

学生の健康管理支援（集団健康診断、抗体検査、ワクチン接種勧奨、個別相談）、禁煙教育（禁煙希望学生に対する経費補助、禁煙相談など）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・病気の入院、通院の補償請求に関する支援など）を保健室保健師を中心にを行った。

5. 学生関連イベントの企画・運営

在学生対象のオリエンテーション、新入生対象のオリエンテーション・宿泊研修、コンタクトグループ（グループ編成など）、スポーツ交流会（アルティメット、昼食手配を含む）、学生対象の講演会（今年度はDV講演会）、キャンパス・クリーンデー（5月、11月開催）などを行った。

6. 交通安全推進

交通安全指導（自動車・自動二輪等実技講習の実施）、通学許可面接（通学許可交付面接、事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の事故対応（一人暮らしの学生を中心に）、車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）、交通事故データベースの作成などを行った。

7. 学生生活に関する調査・広報

学生生活実態調査（問題作成、実施、集計、報告書の作成、公開）、喫煙実態調査（問題作成、実施、集計、報告書の作成、公開）、委員会blog、studentメールを活用した、学生への広報活動（防犯情報、注意喚起など）、学生への情報発信の在り方の検討（情報ネットワーク委員会）、などを行った。

その他、大学コンソーシアムおおいたへ運営委員会への委員派遣、学外者クレーム対応、学生の学業タスク管理サポート（スケジュール表の添付）、学年進行に伴うクラス替え、教職員による学生に関する相談などを行った。

平成20年度は、上記の活動に加え、下記の新しい試みを導入した。学内web上で、学生のボランティア参加などの活動状況を周知した。第8回全国障害者スポーツ大会（チャレンジ！おおいた大会）に1年生82名全員をおもてなしボランティアとして派遣した（平成20年度のみ）。ボランティア養成講座を企画・運営した（平成20年度のみ）。4年次生、編入学生を対象とした担任制度を導入した。禁煙サポート制度（一部経費負担）を導入した（助成を受けた学生は1名）。

担任制度を施行し4年が経過した。担任が実際に行っている主な業務をあげる。学生に関する教員からの問い合わせ対応・調整、学生保護者からの問い合わせ・対応・調整、休学中の学生への連絡・対応、関連教員との連絡、休退学希望学生（保護者）との連絡・面談、学生の関係する事故・犯罪被害などへの対応、学生からの各種問い合わせ・苦情（含むハラスメント）対応、学生のスケジュール管理のサポート、担当学年対象の学生生活実態調査の実施、怪我・疾病・入院学生への対応、学生生活支援委員会での担任報告、呼び出しなどに応じない学生への対応、学生からの相談窓口などである。

次年度の課題として、スポーツ交流会の「交流色」の強化、禁煙サポートの周知徹底、学級担任がハラスメント相談窓口であることの周知徹底、コンタクトグループを活性化するためのイベントについて、学生への情報発信についての検討がある。

1-9 就職支援委員会

構成員 宮崎 文子、平野 互、高野 政子、福田広美、松尾 恭子、小嶋 光明、梅木 満長

今年度も大分県内の医療施設への就職率50%をめざし活動し、その結果50%が県内に就職し目標を達成した。実施状況は以下の通りである。

1. 卒業生の在職する施設5か所に訪問し、活動状況等のフォローを行うとともに、雇用条件などの情報を収集し、就職関連情報の充実を図った。
2. 県外で経験を積んだ卒業生の受け入れ可能な県内施設を調査し、卒業生のUターンを促進するために、就職あっせんの規約を改正し、就職あっせんを可能にした。求人のために来訪した施設（83件）の人事担当者から積極的に情報を収集し学生に発信した。
3. 県内施設を対象とした求人票冊子を作成し、就職ガイダンス・就職説明会時に配布。
4. 県内医療施設（13カ所）の看護管理者を招聘し、4年次生を対象に就職説明会を実施。
5. 就職試験を支援するために希望者に8回模擬面接（31名）を実施した。模擬面接の評価を行うためにアンケートを実施。満足度は100%であった。
6. 就職支援委員会がすべての研究室（卒論生配属）を分担し、学生の就職活動を支援した。
7. 引き続き、医療施設以外の施設における看護職需要を文書依頼等で把握し、官公庁・企業からの情報収集に務めた。

今後の課題は、卒業生のUターンによる経験採用を推進するための対策を検討する。

1-10 広報委員会

構成員 稲垣 敦、影山 隆之、松尾 恭子、中山 晃志、安部 正雄

1) 創立10周年記念若葉祭

創立10周年記念若葉祭に向けて、教員イベントの企画・調整を行い、学生への支援および調整を行った。今年は、創立10周年および大分国体にちなんで、ステージイベントとして「草間学長と語ろう」や「めじろんダンス」を企画・実施した。創立10周年記念若葉祭は5月17日、18日の2日間行われ、約1200名の参加者があった。

2) 創立10周年記念地域ふれあい祭

11月15日、創立10周年記念式典に合わせて、大分総合文化センターの4階フロアを借り切って開催された。今年度は、新たに大学・研究室紹介パネルを50枚作成して掲示し、健康チェック、禁煙相談も実施した。

3) オープンキャンパス

7月20日に開催し、午前および午後の部を合わせて過去最高の260名の参加者があった。今年は、学生主体のイベントとして、学生自治会他と鐵心太鼓（新日鐵大分）のコラボによるTAKIOソーラン節、お茶会、合格体験談に加え、学生による相談コーナーを設け、参加者と学生の交流の機会を増やした。

4) 大学見学

大学見学会（ミニ・オープンキャンパス）の代わりに、大学見学の申込みを随時受け入れた。9/22（担当：中山）、10/1（担当：松尾）、10/30（担当：松尾）に開催した。

5) 出張講義

高校からの出張講義の依頼を受け、講師依頼等を行った。

竹田高校（6/20）講師：高野

下関市中等教育学校（7/8）講師：関屋

日田高校（8/27）講師：濱田

富士見が丘サロン（10/8）講師：影山

大分西高校（10/8）講師：松尾

雄城台高校（10/23）講師：梅野

6) 大学パンフレット（大学パンフレットWG）

2009年度版は、大学院関係で4ページ増やして、10,000部印刷し、進学説明会や各種大学イベントで配付した。また、2010年度版は11月にWGを立ち上げ、現在編集中である。2010年度版では学生生活、社会貢献、研究のページを充実させるため、32ページとした。公募に対して4社の応募があり、審査基準に従って業者を選定した。

7) 大分国体・障害者スポーツ大会

国民体育大会・障害者スポーツ大会局から依頼があり、大分国体開会式（9/27）、障害者スポーツ大会開会式（10/11）、同閉会式（10/13）に各6名の看護系教員が移動救護班（ボランティア）として派遣された。参加した18名の教員を以下に示す：高野、藤内、高波、朝見、津隈、小野 美樹、井伊、都留、江月、松尾、田中、小野 さと子、桜井、福田、木下、濱田、林、吉田 智子。

8) チキリンばやし市民総おどり大会

大分市からの依頼で、8月2日に、学長を含めた教職員、学生の総勢21名で、大分七夕まつりのチキリンばやし市民総おどり大会に参加した。

9) 富士見が丘団地への協力

富士見が丘団地自治会からの依頼で、横瀬小学校で開催された第35回富士見が丘団地運動会（10/26）においてSG（稲垣、大賀、木下）と学生5名で健康チェックを実施した。また、富士見が丘商工会からの依頼で、トキハインダストリー富士見が丘団地店周辺で開催された第1回ふじみん里まつり（11/23）においてSG（稲垣、桜井、濱田、小野さと子）と学生5名で健康チェックとパネル展示を実施した。いずれも、健康増進プロジェクトと協力して行った。

10) 学外Web (学外Web-WG)

コンテンツマネジメントシステムMT4を導入した結果(9/17)、作業も効率化され、必要な情報を見つけやすいホームページになった。コンテンツとしては創立10周年のページと研究紹介のページを作成した。後者は、教員の研究を受験生や一般対象者に紹介するため、毎月1名の教員が自分の研究をわかりやすく紹介してゆくもので、第1回は市瀬学部長が担当した。また、動画による授業や公開講座の配信を検討し、創立10周年記念式典の学長挨拶を配信した。一方で、法人情報、入試情報、年報、各種大学イベントの広報および事後報告等も随時掲載した。学外Webに掲載したコンテンツは以下のようなものである。

地域連携研究コンソーシアム大分、就職説明会、卒業式、第7回NP国際会議、入学式、新入生オリエンテーション、若葉祭、オープンキャンパス、スポーツ交流会、第1回キャンパススクリーナー、ウズベキスタンベトナム寄贈街頭募金、動物慰霊祭、創立10周年記念式典、創立10周年記念植樹、ソウル大学学生交流、韓国アンサンカレッジ研修受入、ウズベキベトナム募金(大分大学)、デートDV防止講演会、訪問看護認定看護師入学式、ウズベキスタンベトナム100台出発式、高円宮妃殿下のご視察、総合人間学、障害者スポーツ大会、看護国際フォーラム、第2回キャンパススクリーナー、学長大分合同新聞文化賞受賞、富士見が丘自治会運動会健康チェック、トリニータ体力測定、創立10周年(記念式典、講演、ふれあい祭、祝賀会)、留学生による日本語弁論大会、富士見が丘団地運動会健康チェック、総合看護学発表会、ふじみん里まつり、卒業研究発表会、ウズベキベトナム贈呈式、ウズベキスタンベトナム寄贈謝辞、県議会議員出前講義、国家試験壮行会、防災訓練、認定看護師修了式、FD講演会、研究成果報告会、宮崎教授最終講義、第9回NP会議。

11) 英文Web (英文Web-WG)

海外の利用者が知りたい情報を重視して、掲載情報を更新し、あらたに16頁を追加した。また、MT4の英文Web用テンプレートが完成し、現在コンテンツを移動中で、新年度早々に公開予定である。

12) メールマガジン (学外Web-WG)

年に4回、登録された会員にメールマガジンを配信した。配信した内容を以下に示す。

- 6月号：オープンキャンパス、第4回看護研究交流センターセミナー、第10回看護国際フォーラム、創立10周年記念式典および地域ふれあい祭、大学院生の募集、3年次編入学生(一般・助産学)の募集、大学見学、本学の大学案内・入学者選抜要項・募集要項
- 9月号：創立10周年記念総合人間学、第10回看護国際フォーラム、平成21年度特別選抜試験(推薦・社会人)、創立10周年記念式典および地域ふれあい祭、大学見学
- 12月号：平成21年度一般選抜試験(前期・後期)、大学院看護学研究科健康科学専攻、第9回NP国際会議
- 3月号：平成21年度一般選抜試験結果(前期・後期)、平成22年度入試日程、若葉祭、オープンキャンパス、大学見学

13) マスメディアによる広報

特に今年度は、創立10周年ということで、これに関する新聞広告や元旦の学長インタビュー広告を企画した。また、新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者および取材班の対応を担当した。主なものを以下に示す(広報委員会担当分のみ)：入学式(合同新聞4/8)、若葉祭(読売新聞5/18、大分ケーブルテレビ5/19、合同新聞5/23)、自律性をもつ看護職を目指して(TOSほっとはーとOITA 5/25)、お元気しゃんしゃん体操(合同新聞6/15)、創立10周年の広告1(合同新聞6/19)、ウズベキ募金中間報告(合同新聞6/20)、ナハ*マル120連発!!大学別美男美女図鑑(シティ情報おおいた7月号)、オープンキャンパス広告(朝日新聞7/5)、韓国ANSAN College研修(合同新聞7/4)、認定看護師コース開講(合同新聞9/1)、デートDV講演会(合同新聞9/23)、看護国際フォーラム(看護技術、看護展望、クリニカルスタディ、公衆衛生情報)、創立10周年の広告2(合同新聞11/9)、第8回国際NP会議(合同新聞11/15)、県立看護科学大の10年(合同新聞11/18、19、20、23、25、26)、新春トップインタビュー「時代を拓く」(合同新聞1/1)、二十歳のチカラ(毎日新聞1/5)、前期試験(合同新聞2/25)、認定看護師コース修了式(合同新聞掲載予定)、ウズベキスタン研修生(合同新聞掲載予定)、宮崎文子教授の最終講義(合同新聞3/16)、卒業式(OBSニュース3/18)。

14) 大学オリジナルグッズ

大学英名入りの4色ボールペン(1000本)、大学写真入りクリアファイル(1000枚)を補充して

大学イベントで配付し、大学広報に活用した。大学英名入りの自由布は海外からの来客に贈呈したり、教員の海外出張で活用した。また、新たに大学旗マーク入りのマグカップを4色（ホワイト、イエロー、ライトブルー、ピンク）各50個、計200個作成した。

15) 大学マスコット

大学マスコットについて検討した結果、来年度から毎年、学生に若葉祭のマスコットを作成してもらい、それらを候補に含めて大学マスコットを検討していくことになった。

今後の課題

- 1) 地域ふれあい祭は地域の祭に参加する形式に変更する
- 2) 動画による授業や公開講座の配信を検討する
- 3) 大学マスコットを検討する
- 4) 新規の広報手段を開拓する
- 5) 広報システムを整理し、効率化する

1) 大学案内パンフレットWG

構成員 影山 隆之、江月 優子、小嶋 光明、河野 梢子（12月から）、田中 美樹、吉田 智子（5月まで）

法人としての活動全体を紹介しつつ、特に読者として受験生や保護者を意識した紙面構成で、卒業生への取材や学生の撮影などを行って、大学案内パンフレットを作成した。12月からは一部構成員を入れ替えた上で、新業者を選定し、次年度パンフレットの編集作業を開始した。

2) 学外Web-WG

構成員 品川 佳満、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）および管理・運営を行った。今年度は、Webサイトの管理をより効率よく行うために、コンテンツマネジメントシステムを導入し、Webサイトをリニューアルした（2008年9月17日公開）。新サイト構築にあたっては、広報委員会、情報ネットワーク委員会、英文Web-WGと協力し、デザイン作成、情報の整理・更新、データの移行作業を行った。また、新サイトには、各種情報にアクセスしやすいページとなる工夫（バナー、サイト内検索機能など）を取り入れた。新サイト公開後、1日約600～700人のアクセスを記録している。

3) 英文Web-WG

構成員 G. T. Shirley、岩崎 香子、佐藤 みつよ、岡崎 寿子、吉武 康栄（10月31日まで）

英文Webページの作成、情報の更新・掲載および管理・運営を行うWGである。今年度は、6月に英文パンフレットを参考に情報の更新を行った。また、12月には他の新しいページ（国際フォーラムの報告や卒業研究発表会の報告など）の作成を行った。来年度からは、新しい英文Webページへリニューアル予定であるため、3月中にデータの移行や追加情報のページの作成等を行った。

1-11 国際交流委員会

構成員 G.T. Shirley、伊東 朋子、李 笑雨、小野 美喜、吉武 康栄（10月31日まで）、後藤 一昭、神崎 正太

国際交流委員会が平成20年度に行った活動は以下のとおりである。

1) ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（6月22日～7月6日までの2週間）、学部生5名、教員1名の短期派遣（6月22日～29日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療制度、福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

2) 本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生2名を長期派遣（8月10日～8月24日まで2週間）、学部生6名と同行教員2名が短期派遣（8月17日～24日まで8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療、福祉、看護について視察等を行い理解を深めた、報告はWebに掲載した。

3) 第10回看護国際フォーラムの大分県看護協会との共催

「新人看護師臨床研修のあり方および制度化にむけて」をテーマに、平成20年11月1日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。韓国から1名、米国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は214名と盛況であった。

4) 第8回NP国際会議の開催

平成20年10月30日に、本学22講義室にて、第8回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国オハイオ州のケースウエスタンリザーブ大学校フランシス・ペイン・ボルトン看護大学から1名を講師として招聘した。

5) 第11回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

今年度は第9回NP国際会議として、「NP演習と実習の開始に向けて」をテーマに、平成21年3月16日に本学22講義室で開催した。米国カリフォルニア州立大学校サンフランシスコ大学およびソウル国立大学校看護大学から1名ずつの講師を招聘した。

平成20年度の計画を具体的に踏襲した計画を検討する予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研修の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と内容を検討するよう試みる。そして、毎年、看護国際フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

1-12 公開講座委員会

構成員 影山 隆之、小野 美喜、佐藤 恭子、G.T. シャーリー、田中 美樹

創立10周年記念公開講座として、一般市民を対象とする有料公開講座を4回開催した。今年度のメインテーマは「家庭生活の健康と安全」で、各回の題目（日程；講師）は「食の安全性について」（伴 信彦；6/13）、「子育てと食育ー親も、グランマも、グランパも」（安部 眞佐子；6/19）、「インターネットでしっかり健康づくり／情報を安心して活用するために」（佐伯 圭一郎；6/26）、「家庭と職場のコミュニケーション」（関根 剛；7/3）、会場はいずれも学内教室であった。延べ参加者数は34人であった。

これと別に若葉祭で無料公開講座を開催した（5/17-18）。テーマ（講師）は、英語多読（言語学研究室）、お元気しゃんしゃん体操（朝見 和佳、影山 隆之）、理科実験（岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ）で、延べ参加者数は31人であった。

以上の開催にあたっては、前年度までに実施した地域自治会や公民館利用者に対する調査の結果を参考とした。当面は学内の教室等を会場として開催する方針を確認した。

中学校・高校の保護者に向けた新しい広報手段を検討した。

次年度も引き続き、同様の公開講座を企画する。中学校PTAおよび高校の生徒保護者に向けた新しい広報手段も活用する。

1-13 図書委員会

構成員 大下 敏子、関根 剛、田中 美樹、高波 利恵、小野 永子、牛島 聡子

図書委員会は図書館の円滑な管理・運営を行うため本年度の計画を視野に以下の活動を行った。

1. 定期的に図書委員会を開催し、報告と議題の検討を行った。
2. 本館は全国の図書館協議会のメンバーとして、総会等に教員・図書館職員が出席し、情報交換協議をし、他館との協力・連携を図った。特に本年度は、九州地区大学図書館協議会公立大学部会の当番館としての業務を執行した。前年度末より諸準備に取り組み4月の長崎大会においては、部会開催の全般を執行した。他に、日本看護図書館協議会（4月）、公立大学協会図書館協議会（6月）、大分県大学図書館協議会（9月）に参加した。
3. 各図書委員、各研究室の教職員、本学学生よりの希望図書、業者からの見計らい図書の検討をし、図書の選定をした。また、学生に幅広い教養と豊かな感性を養うことに目を向け、幅広いジャンルの中からも図書の選定を行った。
4. 図書・雑誌の情報検索システムを効果的に利用するための図書館HPのマニュアルの整備を行った。
5. 本学で開催された公開講座などを記録したDVDを整備・保管し貸し出しができるようにした。
6. 本学所蔵の図書の中から学生の勉学に役立つ書籍紹介を、教員が持ち回りで毎月HPに掲載した。
7. 看護交流センター認定看護師コースの研修生への図書館利用・文献複写・図書のリクエストなどを本学学生と同様のサービスを開始した。
8. 図書館の環境整備として、北西の窓に断熱フィルムを貼る工事をした。
9. 本学HPの研究室所蔵雑誌一覧および本学教員の業績収集は、収集および利用率ともに少ないことから、本年度をもって更新しないこととした。
10. 平成19年度の図書館利用者数（学外者）は1,730人、平成20年度は1,578人であった。

次年度は以下のような点に重点的に取り組んでいく。

1. 図書館の利用に関しての調査を行い、利用しやすい運営に役立てる。
2. 日本看護図書館協議会の監事当番館（平成21～22年度）として会の業務を執行する。

1-14 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成20年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議し、試験を統括した。入学試験の個人成績の開示に不手際があったことから、今後は、学生募集要項の改善を早急に検討することにした。外国人留学生の大学院募集・入試を実施し、1名の留学生を平成21年度の大学院修士課程の学生として受け入れることになった。

引き続き、年度計画に沿って入学試験のあり方および高校訪問・進学説明会などによる広報を行っていく。

1-15 研究倫理・安全委員会

構成員 伴 信彦、桜井 礼子、安部 眞佐子、関根 剛、平野 互、福田 広美（以上、学内委員）、西 英久（大分大学）、二宮 孝富（大分大学）（以上、学外委員）、高橋 秀也（事務局）

当委員会では、本学の教員及び学生が行う研究について、倫理・安全面の審査を実施している。今年度は、延べ77件の研究計画について審査を行った。前年度の卒業研究に関して、一部の施設への研究協力依頼の集中や申請時期の遅れ等の問題が散見されたため、教育研究委員会と連携し調整を図った。また、研究費の管理・監査を一層確かなものとするために、不正防止計画を策定した。

研究倫理・安全のために定められた手続きが確実に履行されるよう、引き続き教員・学生の意識を高めるとともに、必要に応じて研究計画の申請に係るルールを見直していく。

1-16 情報ネットワーク委員会

構成員 佐伯 圭一郎、工藤 節美（8月まで）、品川 佳満、岩崎 香子、伊藤 慎太郎（事務局）

本学情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティや教職員のICTスキル向上のための活動を継続した。本年度はWGを3つに集約し、効率的に作業を行った。教職員用情報処理機器の更新を4月に実施し、平成21年度の教育用情報システムの更新計画の立案を行った。また、卒業生と教職員を結ぶサーバnekobusを構築し、試験運用を開始した。

現在の活動を堅実に維持すると共に、今後さらに、1)情報セキュリティ向上のための啓蒙活動や技術的対策の推進、2)ICTスキル向上・情報システム活用のための情報提供・支援の充実を計画している。

1) ネットワークシステムWG

構成員 品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウェア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット）の管理運営を行った。グループウェア、学内専用WWW、CALL/学生支援、ファイルサーバについては、更新を行った。また、次年度のサーバおよび情報処理教室の更新のための準備を行った。

2) WinユーザーサポートWG

構成員 中山 晃志、伊藤 慎太郎（財務グループ）、岩崎 香子、河野 梢子、佐伯 圭一郎

教職員PCの入れ替えに際して、新PCの設定・配置や旧PCの再利用・廃棄に関する作業を行った。また、例年通り、学内に配置しているWindows PC（教職員、情報処理教室、教材作成室・メディアセンター、CALL用ノートなど）の管理（トラブル対応、システムやソフトウェアのバージョンアップなど）および統計ソフトウェアSPSSのバージョンアップに関する案内・対応を行った。

3) MacユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明、伴 信彦

教職員用のPC (Mac) の入れ替えに際して、新PCの設置および設定を行った。また、学内に設置してあるPCの管理（ソフトのバージョンアップ等）を行った。

1-17 研究科教育研究委員会

構成員 甲斐 倫明、藤内 美保、高野 政子、安部 眞佐子、佐藤 俊実、梅木 満長

大学研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

- 1) 健康科学専攻の設置を文部科学省に申請(届出)、平成21年度からの開設に向けた取り組み（募集要項、入試、広報）を行った。
- 2) 実践者コースに求められる能力の検討の結果、カリキュラムの見直しを行い、ヘルスプロモーションに関連する基礎科目を充実した。実践者コースに平成22年度から管理者コースを設置することにした。
- 3) 単位の実質化と教育効果を評価するために、筆記試験あるいは口頭試問による単位認定を進め、平成21年度からは成績不良者に対しては有料の再試験制度を導入することに決定した。
- 4) 論文指導と論文審査の問題点を改善するために、修士論文審査要領/博士論文審査要領/審査クライテリアの改訂、論文指導ガイドラインおよび論文審査ガイドラインの作成を行い、論文指導および論文審査のあり方を文書化した。
- 5) 入学時点での英語能力で門戸を狭くするよりも、修了時に研究に必要な英語能力を一定のレベルに到達させることに方針を変え、看護学専攻研究者コースおよび健康科学専攻の入試で英語を廃止し、TOEICの活用、原書講読演習および英語論文作成概論などの英語教育を重視することにした。
- 6) 外国人留学生の大学院募集・入試を実施し、1名の留学生を平成21年度の大学院修士課程の学生として受け入れることになった。

平成21年度に開設する健康科学専攻および平成22年度開設予定の管理者コースの広報を各医療機関で実施し、知名度の向上を目指す。また、実践者コースのカリキュラム内容を検証し、さらに改善を継続していく。

1-18 看護研究交流センター運営委員会

構成員 桜井 礼子、林 猪都子、佐伯 圭一郎、関屋 伸子、石川 誠、森 清、工藤 節美（平成20年8月まで）、甲斐 倫明、草間 朋子（オブザーバー）

1. 地域貢献・地域交流事業に関すること

1) 看護職者等を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣

(1) 大分県看護協会の事業への協力

実習指導者講習会、看護研究、小論文の書き方、看護力再開発カリキュラム、リスク、マネジメント、訪問看護研修ステップⅠ、訪問看護研修ステップⅡ呼吸管理 等

(2) 大分県看護教員養成講習会への講師派遣（平成20年5月～12月）

基礎看護、小児看護、母性看護、精神看護、地域看護、課題研究等（講義・演習を含む）、情報処理、看護倫理

(3) その他の講師派遣依頼

主なテーマ：「フィジカルアセスメント」、「看護過程」、「看護研究」、「記録の書き方、個人情報取り扱い」、「アレルギーを持つ児童生徒への対処方法について」、「メンタルヘルス」、「高齢者を対象としたフィジカルフィットネス」、「生活習慣病の予防」等

派遣依頼および対象：病院からの現任看護職への講演依頼がもっとも多かった。その他、保健所が主催する看護職および介護職対象の研修会、社会福祉協議会から介護職研修、養護教諭、施設職員対象など依頼先および対象は様々であった。

2) 研究指導等

(1) 講師派遣

研究指導は施設からの依頼に対して、年間を通して研究指導の講師2名（人間科学講座から1名、看護系講座から1名）を派遣している。今年度は、6施設に対して12名の講師が派遣された。講師派遣施設：大分県立病院、大分赤十字病院、大分市医師会立アルメイダ病院、

国立病院機構 大分医療センター 国立病院機構 西別府病院、
国立病院機構 別府医療センター

(2) 統計・情報処理相談窓口の開設

昨年度から引き続き、統計・情報処理相談窓口を月1回開設した。相談件数は3件であった。

(3) アニュアルミーティングの公開

学内研究成果報告会を、今年度より全日公開とし、地域の看護職者等の参加をホームページ、および主な実習施設へFAXにて呼びかけた。

3) 訪問看護認定看護師教育課程の開講

(1) 開講期間：平成20年9月1日から平成21年2月末（6ヶ月間）

(2) 研修修了生：12名（平成21年5月、日本看護協会の認定看護師を受験する予定）

(3) 主なスケジュールは以下の通りであった。

平成20年4月 研修生募集期間

平成20年5月25日 入学試験（合格発表 6月4日）

平成20年9月1日 開講式

平成20年9月2日～講義・演習を開始

平成20年12月～21年1月 実習期間（6週間）実習施設 県内6施設/県外4施設

平成21年2月12日 13時～ケースレポート発表会（実習指導者会議）

平成21年2月18日 修了試験

平成21年2月27日 修了証書授与式

(4) 認定看護師コース教員会

メンバー：甲斐 倫明、桜井 礼子、小野 朱美、寺嶋 和子、岡本 香代、安東 和代（外部委員）

主な活動として、カリキュラムの検討や教育課程の運営に関して定期的に会議を開催し、検討を行った。

4) 認定看護師教育課程開講記念講演会の開催

訪問看護認定看護師の教育コースの開講記念、および講義の一部を広く公開する試験的試みとして、2つの講演会を企画した。

(1) テーマ：訪問看護の役割とその活動ー病院と地域をつなぐ

講師：小野 朱美氏（訪問看護認定看護師教育課程専任教員）

開催日：平成20年7月11日13時～16時

参加者は49名（一般41名、教員8名）であった。アンケートの結果では、受講生は満足しており、講演後のディスカッションの場が、情報交換の場となり有意義であったとの感想や、訪問看護のネットワークづくりやPRについて大学や看護協会へ期待の声がよせられた。

(2) テーマ：「在宅の看取りを支える訪問看護師の役割～家族が安心して看取りを迎えるために」

講師：角田直枝氏（日本訪問看護財団）

開催日：10月4日9時30分～12時30分

訪問看護師を中心に、参加者数112名（一般94名、その他、研修生・教員）と多数の参加があった。アンケート結果では、テーマ、内容ともに満足度が高かった。

2. 国際協力・交流事業に関すること

1) JICA「看護教育改善プロジェクト」への参加

(1) ウズベキスタンへの派遣

派遣時期と人数：平成20年8月（1名）、10月（1名）、12月（1名）
平成21年2月～3月（5名）

2) JICAからの研修員の受入れ

(1) ウズベキスタン長期研修（看護教育コース） 6名

研修受け入れ期間：平成20年10月30日～12月19日

(2) ウズベキスタン中期研修（看護教育コース） 7名

研修受け入れ期間：平成21年2月6日～2月19日

3) その他の海外からの研修の受入れ

(1) 韓国：光陽（クァンヤン）市保健所 保健診療所所長 12名（看護職）

受け入れ期間：平成20年4月2日 1日

研修目的：介護保険システムの運用の実態調査と関連施設の見学

(2) 韓国：ANSAN College学生31名（看護師、理学療法士、栄養士コースト等）、教員12名

受け入れ期間：平成20年7月1日～7月4日

研修目的：日本の高齢者ケアを知る

(3) 韓国：東新大学校看護学科 学生13名、教員2名

受け入れ期間：平成21年1月19日～21日

研修目的：高齢者ケアと関連施設の見学と学生交流

3. 継続教育事業に関すること

1) 卒業への研究支援・技術支援

(1) 第4回看護研究交流センターセミナー

平成20年7月26日13時～16時、23講義室にて開催した。「B型・C型肝炎の現状と治/ウイルス性肝炎の治療時のケア」で講師には戸田 剛太郎先生（せんぼ東京高輪病院院長）、三谷 千代子先生（虎の門病院分院チーフナース）を招へいた。参加者数は30名で、卒業生は5名の参加であった。

2) 卒業生の名簿作成について

10周年記念事業のために、同窓会、情報ネットワーク委員会と共同して、卒業生の連絡先の名簿作りを行った。各学年の担当者を通して、メールアドレスを中心に連絡体制を整えることができた。

3) 卒業生へのアンケート調査について

10周年記念祝賀会の場において、卒業生を対象に研修会に関する希望調査を実施し、29名の卒業生から回答を得た。結果より、開催してほしい日程は10月開催希望が最も多く、曜日は平日が最も多く、日曜日・祝日が次いで多かった。またテーマについては、臨床看護、看護過程・看護診断等が多かった。次年度はこの点を考慮して10月に開催予定とし、テーマを検討する予定である。

4) 卒業生のためのネットワークづくり

卒業生への情報発信、および卒業生の情報交換のためのネットワークづくりのためのサーバーの整備等を行った。今後、情報発信の内容について検討を行う予定である。

4. 知的財産・産学官連携事業に関すること

産学官交流集會に参加し情報を収集するとともに、産学官共同のためのe-seeds用教員プロフィールのパンフレットを作成し、産業創造機構に依頼し関連機関への配布を行った。

- 1) 訪問看護師対象の研修会の開催
- 2) 卒論生のネットワークづくりと情報提供の内容を検討
- 3) 国際交流活動の見直し 国内の受入れだけでなく、海外での活動も検討する

1) インターネットジャーナルWG

構成員 草間 朋子、甲斐 倫明、G.T. Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、定金 香里、高波 利恵

チラシの作成、学会大会等各種イベントでの広報、「看護科学研究」第8巻第1号および第2号の審査・編集に関する実務が行われた。特に、今年度は投稿者および講読者の増加を目指して、全国の看護系大学にチラシを郵送した。第8巻第1号は平成21年3月に刊行し、本学ホームページ上 (http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/8_1.html) で公開されている。なお、第2号も近日中に刊行予定である。

2) 認定看護師コースWG

構成員 桜井 礼子、甲斐 倫明、小野 朱美、寺嶋 和子、江藤 真紀、梅木 満長、岡本 香代

平成21年9月開講を目指し、カリキュラムの検討および研修生ガイドブックの作成などの開講準備を行った。

また、教育課程が開講期間中についても、定期的に会議を開催し、コースの運営などについて検討を行った。

平成20年度より開講し、12名の研修生が修了となった。今後教育課程の内容を見直し、来年度のカリキュラムの再構築と講師の選定を行っていく予定である。

3) 認定看護師コース入試WG

構成員 外部委員を含む7名

平成20年度（第1期生）の受験資格の検討から募集要項の作成、入試の準備、実施、評価を行った。また、第2期生の募集要項の作成を行った。

平成20年度の研修生の入試の準備・実施について再検討を行った。入試内容については、次年度も今年度と同様の項目とし実施することとした。入試時期については、前年度3月までに合否がわかった方が、次年度に研修生が学習環境を整えやすいとの意見があり、平成22年度の入学試験は、平成21年度内に実施することを検討する予定である。

1-19 衛生委員会

構成員 石川 誠（1号委員）、角 匡幸（2号委員）、江藤 真紀（3号委員）、影山 隆之、高橋 秀也（以上、4号委員）、原田 幸代（オブザーバー）

職場巡視、定期健康診断結果による個別事後指導などを行った。また、平成20年4月1日から実施した大学敷地内全面禁煙について、学外者に周知するために、看板を設置した。

1-20 評価委員会

構成員 市瀬 孝道（学部長、理事）、甲斐 倫明（研究科長、理事）、石川 誠（事務局長、理事）、宮崎 文子（教授）

- 1) 平成19年度に実施した教員評価において、主に助手の領域別配点などの見直しを行い、修正案を教育研究審議会に提案し承認された。
- 2) 平成20年度の教員評価を1月に実施し、評価結果を2月に各教員に配布した。

教員評価結果のあり方については今後も継続して改善をしていく。

1-21 NPプロジェクト

構成員 大下 敏子、草間 朋子、江藤 真紀、小野 美喜、甲斐 倫明、桜井 礼子、高野 政子、藤内 美保、林 猪都子、福田 広美、宮内 信治、安部 正雄

NPプロジェクトは平成20年度年度計画に基づき、以下のような活動を行った。

1) 老年NPの大学院教育開始とカリキュラムの見直し

3名の老年NP学生に対して、平成20年4月から大学院教育を開始した。3名とも昼間勤務し夜間学ぶ体制であるため、学生の学習状況や到達度を把握しながら進めており、3名とも本学の長期履修制度を活用する予定である。学生の意見も参考にし、老年NPのカリキュラム（平成20年度入学生及び平成21年度入学生用）の見直しを行った。

2) NP学生のための初期体験実習（early exposure）実施

平成20年9月16日～9月19日（3泊4日）、3名のNP学生が韓国を訪問し、処方権有し24時間体制で診察を行っている保健診療員および2003年から制度化されたNPの活動を視察した。保健所、大学病院、コミュニティーヘルスセンター、看護大学など、5～6か所の施設を視察し、本学学生にとって、保健診療員とNPの活動の実際をまなび良い刺激を受け、モチベーションの向上に繋がった。

3) 実習施設の依頼・調整

平成21年度から始まるNP実習施設モデルとして、同病院内に設置されたNPプロジェクトチームと連携をとりながら、包括的健康アセスメントおよび医療処置管理（薬剤の処方を含む）についてプロトコルを作成した。

4) NPに関する調査

NPに関する調査研究を目的に学内の競争的資金を獲得した。本学の教員2人で、韓国の保健診療員とNPの活動の視察とインタビューを通し調査した。その結果を雑誌「看護管理」に投稿した。佐伯の無為地区を対象とする実態調査に関しては、調査票を作成し佐伯保健所と佐伯管内の保健師を対象に、調査目的の説明会を開催した。訪問看護師を対象にした意見交換会を開催し、医師や訪問看護師との業務の分担の現状とあり方について話し合った。

5) NP国際会議の開催

平成20年10月30日Case Western Reserve大学のMadigan先生を迎え第8回NP国際会議を開催した。米国における高度実践看護師教育の動向に関する講演や、NPプロジェクトメンバーとのディスカッションなどを行い実りある国際会議であった。また、平成21年3月16日～3月19日にかけて、California大学のJill先生、ソウル国立看護大学校看護大学のSuh先生を迎え、教員およびNP学生向けのNP演習・実習に関する第9回NP国際会議を開催した。

6) NPプロジェクトについての広報活動

平成20年11月15日に本学の10周年記念式典で、草間学長が「NPの養成教育を始めて」を講演した。平成20年12月13日、14日の日本看護科学学会の交流集会では、「大学院修士課程におけるNP養成の開始の経験」をテーマに本学の取り組みを報告した。そのほか、朝日新聞、共同通信、NHK、OBSなど多くの報道機関からの取材に応じ、NP教育に関する紹介をした。またNPに関する論文を7編発表した。

7) NP連絡会議の結成・開催

厚生労働省の科学研究費「専門的看護を提供できる実践家の育成に向けた体制構築の方策に関する研究」を獲得し、NP教育を開始する予定の大学（国際医療福祉大学、聖路加看護大学、国立病院機構）と連絡会議を3回開催した。主に、NP養成のためのコアカリキュラムの標準化、制度化にむけての検討を行った。

8) NPの制度化等に向けての活動の強化

見藤隆子先生を本学に招き制度化にむけて意見交換を行った。また川村佐和子先生を招き、厚労省検討会「訪問看護における診療の補助のあり方に関する研究」の検討過程についての評価について講演会を開催した。国会議員などとの面談をし、NPの制度化に向け理解や協力を求めた。

9) 特区提案

NPの制度化に向けた活動の一環として、業務について裁量範囲を拡大する6項目について平成20年11月に大分岡病院と共同で特区提案を行った。

NPプロジェクトはこの一年間精力的に様々な活動を行い、成果を上げることができた。特に本学のNP教育に関しマスメディアなどを通じ全国的に話題を提供し、関心を呼ぶことができた。また、次年度から始まる演習と実習の計画を立案し、実習受け入れ病院の開拓ができた。次年度からは、小児NPの教育が始まるので、この分野を円滑に進める必要がある。また、懸案となっている特区提案も引き続き取り組んでいく。次年NPプロジェクトは以下の点に重点を置き活動を継続する。

- 1) 小児NPの大学院教育を開始する。
- 2) さらなる実習施設の開拓および実習指導の充実を図る。
- 3) NPの裁量範囲の拡大及び資格制度など制度化に向けた検討を行う。特区の提案も継続していく。
- 4) NPの社会的ニーズ、評価に関する調査を行う。卒論のテーマなどでも取り上げる。
- 5) NPの活躍の場やその必要性を具体的に医療職や社会にアピールするために、卒論のテーマなどに繰り返し県内の保健医療の現状調査を行う。
- 6) 本学のNP教育や助産師の大学院教育での経験などを国際学会などで紹介し、社会の理解を得る努力をする。

2 学内行事の概要

2-1 学年暦

前期

後期

4月

- 8 入学式
- 9 オリエンテーション
- 9, 16 健康診断
- 10 2～4年次生授業開始
- 10, 11 新入生オリエンテーション
- 10～21 前期履修登録
- 14 1年次生授業開始
- 23 臨時学生大会
- 25 全学スポーツ交流会
- 30 交通安全講座(自動車)

5月

- 7 キャンパスクリーンデー
- 12～ 地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
- 17, 18 若葉祭

6月

- ～13 地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
- 16 前期後半授業開始
- 16～ 助産学実習(4年次生選択)
- 18 学生大会
- 19 開学記念日(休講)
- 23～ 総合実習(4年次生)

7月

- ～4 総合実習(4年次生)
- 8～15 初期体験実習(1年次生)
- 16 キャンパスクリーンデー
- 16 交通安全講座(自動二輪・原付)
- 19 夏季休業開始
- 20 オープンキャンパス
- ～25 助産学実習(4年次生選択)

8月

- 30 大学院(博士前期)入学試験
- 31 編入学(一般・助産学), 大学院(博士後期)入学試験

9月

- 7 夏季休業終了
- 8～ 成人, 老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習(3年次生)
- 30 前期授業終了

10月

- 1 後期授業開始
- 1～15 後期履修登録
- 8～15 1年次生ボランティア活動(全国障害者スポーツ大会)

11月

- 1 看護国際フォーラム
- 15 創立10周年記念式典
- 23 特別選抜試験(推薦・社会人)
- ～28 成人, 老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習(3年次生)

12月

- 1 後期後半授業開始
- 5 正午 卒業研究論文提出締切(4年次生)
- 8, 9 卒業研究発表会
- 22 進級試験(2年次生)
- 23 冬季休業開始

1月

- 7 冬季休業終了
- 8～23 基礎看護学実習(2年次生)
- 16 大学入試センター試験準備(1,3,4年次生休講)
- 17, 18 大学入試センター試験
- 30～ 看護アセスメント学実習(2年次生)

2月

- ～13 看護アセスメント学実習(2年次生)
- 25 一般選抜試験(前期)および特別選抜試験(私費外国人留学生)(休講)
- 下旬 看護師・保健師および助産師国家試験
- 27 後期授業終了
- 28 春季休業開始

3月

- 12 一般選抜試験(後期)
- 18 卒業式

2-2 オープンキャンパス

7月20日に開催し、午前および午後の部を合わせて過去最高の260名の参加者があった。今年は、学生主体のイベントとして、学生自治会他と鐵心太鼓（新日鐵大分）のコラボによるTAKIOソーラン節、お茶会、合格体験談に加え、学生による相談コーナーを設け、参加者と学生の交流の機会を増やした。

1) 企画趣旨

本学の特徴や取り組み、教育・研究・社会活動、施設等を受験生や関係者を中心に広く紹介するための全学的企画

2) 日時：平成20年7月20日

午前の部 10:00~12:30 午後の部 14:00~16:30

3) 参加者：260名

4) イベント

(1) 説明会（講堂）

司会（稲垣）、挨拶（草間）、大学説明（影山）、学生生活（学生1名）、入試説明（佐藤 恭子）

(2) 個別進学相談：入試委員会（甲斐、江藤、佐藤 俊実、佐藤 恭子）

(3) 模擬授業

対人関係エクササイズの体験学習（30分）：人間関係学（関根、吉村）

母性看護とは何か？事例を通して考える（30分）：母性看護学・助産学（宮崎）

自殺を防ぐ（30分）：精神看護学（大賀）

多読教材を用いた英語学習法（30分）：言語学（宮内）

(4) 体験・見学イベント

基礎的な看護演習の体験（基礎看護学、看護アセスメント、成人老年看護学）

妊婦体験・新生児の抱き方（母性看護学・助産学）

赤ちゃんの検温と聴診など（小児看護学）

高齢者疑似体験（地域看護学）

原子と放射線の体験型ミニ授業（環境保健学）

病原菌と病気の組織の顕微鏡観察（生体反応学）

情報処理演習、学内教材の閲覧（健康情報科学）

健康増進室の体験（健康運動学）

(5) 学生主催イベント

TAKIOソーラン：若葉実行委員2年+有志（大賀）

お茶会：裏千家茶道部（高野）

合格体験談：学生3名（影山）

学生相談コーナー：学生3名（影山）

(6) パネル展示

創立10周年の学長あいさつ：広報委員会（中山）

大学紹介：広報委員会（影山）

大学院関係：研究科委員会（甲斐）

特色GP・国際化GP：教育研究委員会（藤内）

認証評価、FD活動：自己評価委員会（吉田）

図書館紹介：図書委員会（関根）

看護研究交流センター：研究交流センター（桜井）

ウズベキスタン国際協力：（伊東）

NPプロジェクト：NPプロジェクト（宮内）

健康増進プロジェクト：健康増進プロジェクト（稲垣）

ソウル大学生交流紹介：2007年度引率者（伴）

インターネットジャーナル看護科学研究：WG（伴）

若葉祭：広報委員会（松尾）

2-3 公開講座

創立10周年記念公開講座として、一般市民を対象とする有料公開講座を4回開催した。今年度のメインテーマは「家庭生活の健康と安全」で、各回のテーマ（日程；講師）は以下の通りであった。

「食の安全性について」（伴 信彦；6/13）

「子育てと食育－親も、グランマも、グランパも」（安部 眞佐子；6/19）

「インターネットでしっかり健康づくり／情報を安心して活用するために」（佐伯 圭一郎；6/26）

「家庭と職場のコミュニケーション」（関根 剛；7/3）

会場はいずれも学内教室で、参加費は500円、延べ参加者数は34人であった。

若葉祭（5/17-18）で開講した無料公開講座のしてテーマ（講師）は、次の通りであった。

英語多読（言語学研究室）

お元気しゃんしゃん体操（朝見 和佳、影山 隆之）

理科実験（岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ）

延べ参加者数は31人であった。

2-4 看護国際フォーラム

第10回看護国際フォーラムの大分県看護協会との共催

「新人看護師臨床研修のあり方および制度化にむけて」をテーマに、平成20年11月1日に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。韓国から1名、米国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は214名と盛況であった。

2-5 ソウル大／看科大研究交流会（インターナショナル・ミーティング）

第11回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

今年度は第9回NP国際会議として、「NP演習と実習の開始に向けて」をテーマに、平成21年3月16日に本学22講義室で開催した。米国カリフォルニア州立大学校サンフランシスコ大学およびソウル国立大学校看護大学から1名ずつの講師を招聘した。

2-6 看護研究交流センターセミナー

第4回看護研究交流センターセミナー

平成20年7月26日13時～16時、23講義室にて開催した。「B型・C型肝炎の現状と治療/ウイルス性肝炎の治療時のケア」で講師には戸田 剛太郎先生（せんぼ東京高輪病院院長）、三谷 千代子先生（虎の門病院分院チーフナース）を招へいした。参加者数は30名で、卒業生は5名の参加であった。

2-7 姉妹校学生交流

1) ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（6月22日～7月6日までの2週間）、学部生5名、教員1名の短期派遣（6月22日～29日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療制度、福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

2) 本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生2名を長期派遣（8月10日～8月24日まで2週間）、学部生6名と同行教員2名が短期派遣（8月17日～24日まで8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療、福祉、看護について視察等を行い理解を深めた、報告はWebに掲載した。

2-8 若葉祭（大学祭）

今年は、創立10周年記念の若葉祭となり、テーマも“10th Anniversary”として開催された。学園祭のオープニングの後は、ステージ上で「草間学長と語ろう」のイベントが催された。10年間の大学の歩みと共に、草間学長と在学生在が今後の夢を語りあった時間となった。ステージイベントの他にも教員と学生のコラボレーション企画を増やしたり、小学生の来場者向けの簡単な理科実験など、たくさんの企画に来場者の方々との交流の場となった。企画運営は、若葉祭実行委員会（佐藤圭祐委員長）が10周年の記念として尽力し、在学生の協力を得て成功裡に幕を閉じた。

日時 平成20年5月17日～18日

テーマ “10th Anniversary”

来場者 約1200名

・ステージイベント

草間学長と語ろう、イントロDUN、ジェスチャー☆ドン、BMX、Mr. ナースマン、抽選会、バンド演奏、ダンスイベント、アームレスリング、若手お笑いライブ（バッドボーイズ、大西ライオン、インポッシブル）、カラオケ、Ms. ナース、鐵心太鼓×TAKIOソーラン、実行委員プレゼンツ

・公開講座

お元気しゃんしゃん体操、つくってみよう！（簡単な理科実験）、英語多読

・室内イベント

お茶会、フラワーアレンジメント教室、リラクゼーションレッスン（DVD上映）、DVDによる公開講座、禁煙相談、若葉祭Tシャツコンクール

・教職員と学生のコラボイベント

救急蘇生法、小児の救急法、アロマオイルハンドマッサージ、赤ちゃんだっこ妊婦体験、高齢者疑似体験、健康体力チェック

2-9 地域ふれあい祭

11月15日、創立10周年記念式典に合わせて、iichiko総合文化センターの4階フロアを借り切って開催した。今年度は、新たに大学・研究室紹介パネルを50枚作成して掲示し、別室で健康チェック（血圧、体重、体脂肪率、骨評価）、禁煙相談を実施した。来年度からは、県内各地の地域の祭に参加して、地域住民との交流を進めてゆく予定である。

2-10 アニュアル・ミーティング

平成20年度アニュアルミーティングを、平成21年3月6日に公開形式で開催した。先端研究1題、プロジェクト研究2題、奨励研究4題、一般演題8題の発表があった。また、昨年度に引き続き、全演題を学外公表とし、10名の参加があった。

開催場所：23講義室

開催時間：10:55～17:00

進行：大賀 淳子

開会挨拶 自己評価委員会委員長 菅野 公浩

セッション1 (11:00～12:00)

- 1) 本学における進級試験の実施と評価 - 佐伯 圭一郎
- 2) 大分県自殺実態基礎調査の概要(第2報) - 影山 隆之
- 3) 中学生の心身の自覚症状とライフスタイルとの関連 - 佐藤 みつよ
- 4) 本学のCALLシステムの現状と課題 - 岡崎 寿子

セッション2 (13:00～14:00)

- 5) カーボンナノ粒子の胎盤通過性の検討 - 吉田 成一
- 6) 医療職者が使用する速乾性擦式手指消毒剤がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響 - 定金 香里
- 7) 低代謝回転を伴う透析骨病変の骨質に関する研究 - 岩崎 香子
- 8) 放射線適応応答とバイスタンダー効果の関係 - 小嶋 光明

セッション3 (14:15～15:15)

- 9) 韓国における保健診療員とナースプラクティショナーの活動 - 大下 敏子
- 10) 健康増進プロジェクト - 稲垣 敦
- 11) ホームページを介した食物アレルギー相談システムの構築 - 安部 眞佐子

セッション4 (15:30～16:30)

- 12) 男性看護師が望む看護基礎教育における羞恥心を伴うケアの教育内容 - 松尾 恭子
- 13) 本学の助産学実習の現状と課題 - 分娩介助を中心として - 石岡 洋子
- 14) 地域高齢者における社会的関係性と閉じこもりとの関連 - 木下 結加里
- 15) WHPに取り組む事業所の労働者が保健行動に取り組むプロセスと要因 - 高波 利恵

講評と閉会挨拶 学部長 市瀬 孝道

2-11 創立10周年記念事業

本学は平成10年4月に開学し、平成20年4月に開学から10年を迎えたことから、創立10周年を記念し、後援会、同窓会とともに各種記念事業を実施した。

【目的】

次の4つを記念事業の基本目標に掲げ事業を展開した。

- 1) 今まで本学を支えてくれた県民への感謝
- 2) 本学教育、研究の充実
- 3) 今後の発展の契機
- 4) 大学関係者の士気の高揚、愛学心の醸成

【事業内容】

- 1) 創立10周年記念キャッチフレーズの募集
創立10周年を記念しキャッチフレーズを募集した。30編の応募があり、審査の結果「人をつなぐ、いのちをつなぐ」が採用された。
- 2) 創立10周年記念大学施設愛称の募集
創立10周年を記念し、大学施設に対する愛称を募集した。31編の応募があり、審査の結果、次の5作品が採用された。
「四季の道」「若葉の広場」「ヘルシーステップ」「桜の広場」「桜の散歩道」
- 3) 創立10周年記念学園祭（若葉祭）
広報委員会及び若葉祭実行委員会が実施
- 4) 記念植樹
6月19日の開学記念日に、大学入り口のエントランスプラザにおいて学生、教職員が豊後梅を植樹した。
- 5) 新聞広告
6月9日、11月9日の合同新聞朝刊に広告を掲載し、創立10周年事業のPRを行った。
- 6) 横断幕の掲示
大学入り口の体育館2階に横断幕を掲示した。
- 7) 創立10周年記念公開講座
公開講座委員会が実施
- 8) 創立10周年記念看護研究交流センターセミナー
看護研究交流センター委員会が実施
- 9) 創立10周年記念誌の作成
創立10周年を記念し、大学のあゆみ等を掲載した記念誌を刊行した。
- 10) 創立10周年記念式典、講演会、地域ふれあい祭
11月15日、iichiko総合文化センターにおいて、招待者、卒業生、在学生及び教職員等427名出席の下、記念式典、講演会、地域ふれあい祭を開催した。
 - (1) 記念式典
学歌斉唱、学長式辞、知事挨拶、来賓祝辞の後、関係機関及び実習施設等に対する感謝状の贈呈、名誉教授称号授与、キャッチフレーズ及び大学施設愛称募集の優秀者の表彰を行った。
また、アトラクションとして、学生によるダンスイベント及びTAKIOソーラン（鐵心太鼓と共演）を上演した。
 - (2) 講演会
基調講演として、草間朋子学長による「NPの養成教育を始めて」、特別講演として、鴨下重彦国立国際医療センター名誉総長による「看護に託す夢と希望」の講演会を開催した。
 - (3) 地域ふれあい祭
広報委員会が実施
- 11) 創立10周年記念公開講義
教育研究委員会が実施

3 教育活動

3-1 平成21年度入学者選抜状況

1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員					
			一 般 選 抜		特 別 選 抜			
			前期日程	後期日程	推 薦		社 会 人	私費外国人 留学生
県内	県外							
看護学部	看護学科	80人	35人	10人	30人	5人	注1) 5人以内	注2) 若干名

注1) 社会人の募集人員「5人以内」は推薦（県内）の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の35人に含める。

入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
						計	県内(率)	男(率)
特 別	推 薦	県内	62	62	2.2	28	28(100.0)	5(17.9)
		県外	20	20	5	4.0	5	0(0.0)
	社会人	3	3	2	1.5	1	1(100.0)	0(0.0)
	計	85	85	35	2.4	34	29(85.3)	5(14.7)
一 般	前 期	142	126	43	2.9	38	12(31.6)	2(5.3)
	後 期	128	61	11	5.5	10	4(40.0)	2(20.0)
	計	270	187	54	3.5	48	16(33.3)	4(8.3)
合 計		355	272	89	3.1	82	45(54.9)	7(8.5)

試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成20年 11月23日(日)	平成20年 11月4日(火)～11月10日(月)
	社会人			
一 般	前 期	総合問題、面接	平成21年 2月25日(水)	平成21年 1月26日(月)～2月4日(水)
	後 期	総合問題、面接	平成21年 3月12日(木)	

2) 特別選抜試験

① 推薦選抜

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長から推薦された生徒を対象に、総合問題と面接により実施した。

② 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

3) 一般選抜試験

平成 21 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）（必須）	4 教科 5 科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学B』 から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」から 1 科目を選択		
		「生物Ⅰ」（必須）		
外国語	『英語』（必須）			
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 4 科目	
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」 から 1 科目を選択		3 教科 3 科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」 から 1 科目を選択		
	外国語	『英語』（必須）		

注 1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注 2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位 3 教科を合否判定に用います。

注 3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

3-2 平成21年度3年次編入学(一般)試験状況

概要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、3年次編入学試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

募集人員

学 部	学 科	募集人員
看護学部	看護学科	10人

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
大 学	3	3	3	—	3	2(66.7)	0(0.0)
短期大学	1	1	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)
専修学校	12	12	4	—	2	2(100.0)	0(0.0)
合 計	16	16	7	2.3	5	4(80.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成20年 8月31日(日)	平成20年 8月1日(金)～8月8日(金)

3-3 平成21年度3年次編入学(助産学)試験状況

概要

看護師又は保健師として就労しており、助産師の資格を希望する者に対して、3年次編入学(助産学)試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者を対象に募集したが、出願がなく試験は実施されなかった。

募集人員

学 部	学 科	募集人員
看護学部	看護学科	若干名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成20年 11月23日(日)	平成20年 11月1日(金)～11月8日(金)

3-4 平成21年度大学院博士課程（前期）入学試験状況

1) 看護学専攻

概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻コース名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成コース	10名
			実践者養成コース	

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	17	17	12	1.4	11	5(45.5)	2(18.2)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成20年 8月30日(土)	平成20年 8月1日(金)～8月8日(金)

2) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等又は厚生大臣が行う医療関係職種の国家試験に合格し、資格を取得し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	1(100.0)

試験科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
英 語 総合問題 面 接	平成 21 年 3 月 1 日 (日)	平成 21 年 2 月 6 日 (金) ~ 2 月 13 日 (金)

3) 外国人留学生

概 要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課 程 名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	若干名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
修士課程	1	1	1	1.0	1	0(0.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
英 語 総合問題 面 接	平成 20 年 11 月 23 日 (日)	平成 20 年 11 月 4 日 (火) ~ 11 月 10 日 (月)

3-5 平成21年度大学院看護学専攻博士課程 (後期) 入学試験状況

1) 看護学専攻

概 要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(後期)	看護学専攻	2名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成20年 8月31日(日)	平成20年 8月1日(金)～8月8日(金)

2) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材(看護職及び非看護職)を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等又は厚生大臣が行う医療関係職種为国家試験に合格し、資格を取得し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(後期)	看護学専攻	2名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成20年 11月23日(日)	平成20年 11月4日(火)～11月10日(月)

3-6 教育

3-6-1 生体科学研究室

1 教育方針

解剖生理学を担当する。解剖生理学とは、人体の構造と機能、形と働きを扱う学問である。
維持する働き（植物機能）－ 血液循環、呼吸、消化吸収、代謝、排泄、内分泌
生命を活用する働き（動物機能）－ 骨格系、筋系、神経系、感覚器系
人体を保護し、種を保存する機能－ 皮膚、免疫系、体温調節、生殖器系、発生、老化

まず、正常な人体の構造と機能を学ぶことにより、疾患を理解できるようにする。次に種々の疾患につき学ぶ。

2 教育活動の現状と課題

本研究室では、生体構造機能論、生体代謝論、生体科学演習、生体科学特論、生体構造機能特論の講義を担当している。これらの科目は、いずれも解剖生理学に関係したもので、看護を学ぶ上で重要なものである。しかしながら、本学学生はこれらの科目に対し、興味や理解度が低いようである。看護実践を行う上で、正常な人体の構造と機能を学び、疾患を理解できるようになる事の重要性を認識できるよう講義を進めている。興味や理解度が上がるようにスライドや模型を用い、看護実践を行う上で重要な疾患について、解説して行く。

3 科目の教育活動

1) 生体構造機能論

1年次 前期

菅野 公浩、安部 眞佐子、岩崎 香子

人体を構成する細胞、組織、器官等について講義することにより、正常な人体の解剖生理学を学び、疾患を理解できるようにした。講義内容は、細胞、組織、循環、呼吸、消化、代謝、排泄、内分泌、骨格系、筋系、神経系、感覚器系、皮膚、免疫系、生殖器系等、多岐にわたる。

2) 生体代謝論

1年次 前期

安部 眞佐子

生化学を身近に思ってもらうために、看護と栄養のかかわり、病院での栄養管理について概説した。そののち、食事バランスガイドによって自分の食生活を振り返り、栄養学への関心を持たせ、また、栄養について理解するためには生化学の知識が必要と説いた。ついで、生化学のベースとなるような生体物質の化学的な説明をして、個々の生体物質について述べた。そののち、代謝について講義し、生体内での代謝は密接に連携していることを説明した。また、情報代謝についても概説した。

3) 生体科学演習

1年次 後期

菅野 公浩、安部 眞佐子、岩崎 香子

生体構造機能論で十分に講義できず、看護実践を行う上で重要な循環器、呼吸器、消化器、泌尿器、内分泌機能につき、具体的な疾患を交え、講義を行った。脂質代謝異常についても講義を行った。栄養学について、実践的な内容の実習を交えながら講義した。

4) 生体科学特論

4年次 前期後半

安部 眞佐子

食品について、生体代謝論では講義してはいないが、看護にとっても重要と思われる事について説明した。食品表示、食事バランスガイドについては講義をしていなかったので補足し、食事摂取基準については復習の意味もあるが再度説明した。ライフステージ別の栄養学について、これまで看護で学んで来た事を整理し直し、特に食事指導の行われるメタボリックシンドロームについては詳細に講義し、また、ビデオを見て遺伝子多型と高脂血症についての理解を深めた。最後に、健康食品データベースを試用して演習を行い、調べた事をプレゼンテーションをさせ、それぞれについて補足説明を加え、サプリメントへの理解を深めた。

5) 生体構造機能特論

2年次 前期前半

菅野 公浩、岩崎 香子

生活習慣病の主たる原因であるメタボリックシンドロームについて講義した。メタボリックシンドロームを理解するため、高血圧、高脂血症、糖尿病について講義した。また、高齢者で骨折の原因となる骨粗鬆症およびカルシウム調節を中心とした内分泌機能についても講義した。

6) 健康科学実験 I 組織学

岩崎 香子

解剖生理で学んだ知識への理解を深めるために、ヒトの組織切片の観察を行った。単なる組織観察に終わらぬよう課題を細かく指定し、組織観察を行った。実際の組織像を観察する際には、グループ単位において対話形式での組織構造の復習を行った。

7) 健康科学実験 II 血液生化学

安部 眞佐子

自己血糖測定器の使い方を実習した。また、ラットの血清中のグルコース濃度、逸脱酵素について試験管を使って測定した。さらに、血清タンパク質の分離を電気泳動によって観察した。

4 卒業研究

- ・透析患者の踵骨量と食事摂取の現状
- ・透析患者の食事療法に対するコンプライアンスと個人要因との関連
- ・血管内皮細胞のアポトーシスに及ぼす高濃度のブドウ糖及びインスリンの影響
- ・高濃度のブドウ糖及びインスリンが血管内皮細胞の接着因子に及ぼす影響
- ・幼児期の食物アレルギー予防を意図した食物除去の現状
- ・保育所における食物アレルギー児の支援

3-6-2 生体反応学研究室

1 教育方針

生体反応学研究室では看護の専門基礎分野の科目である病理学、薬理学、微生物学を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する種々の疾病、その発生メカニズムや薬理学的な反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程、薬の作用を科学的に捉え、これらが2年次～4年次の看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

2 教育活動の現状と課題

本研究室では生体反応論、生体反応学演習、病態特論、微生物反応論、感染免疫学、生体薬物反応論の講義を担当している。看護学生はこれらの基礎科目を学ぶことの意識・関心が低いためか、これらの科目の理解度が低く、2年次～4年次の実習に結びつけられていない場合が多い。看護実践を行ううえで疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識できるように、より看護の視点から講義を進めている。教育上の工夫として、生体反応学演習では、看護疾病病態論の講義に繋げるために、病理学各論の講義を行い、看護を行う基礎となる疾病病態を理解させるのに努めた。生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。

3 科目の教育活動

1) 生体反応論

1年次 後期

市瀬 孝道

病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリント配布して講義を進めた。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

2) 生体反応学演習

1年次 後期後半

市瀬 孝道

生体反応学演習では病理学各論の講義を行い、病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

3) 生体微生物反応論

1年次 後期前半

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、を理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。しかし、今年度の学習成績状況は不良であった。次年度以降は1年次後期後半に行う、感染免疫学と学習内容が共通するため、科目を統一し、重複を避け、より効果的な講義体系に変更する。

4) 感染免疫学

1年次 後期後半

吉田 成一

1年次後期前半に行った生体微生物反応論をもとに、病原微生物に対する生体の防御反応について理解させることを目標に講義を行った。学生にとり難解な内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。さらに、受講者は講義を受けるだけでなく、自ら学習し知識を習得しないと身に付かないと言うことを適宜、喚起した。しかし、今年度の学習成績状況は不良であった。次年度以降は1年次後期前半に行う、生体微生物反応論と学習内容が共通するため、科目を統一し、重複を避け、より効果的な講義体系に変更する。

5) 生体薬物反応論

2年次 前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。しかし、本講義を学習する上で専門用語の理解が学習の妨げになっている可能性が試験結果より得られたため、次年度以降は専門用語の理解から始める講義を行う必要があると考えている。

6) 病態特論

4年次 前期

市瀬 孝道

これまで教科書中心で病気や病態を講義してきたものを、本講義では臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。本年度は県立病院の臨床検査部において、炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。3回目の講義ではト部先生によるスライドによるプレゼンテーションも取入れた。

7) 健康科学実験 III 血液検査

定金 香里

ラット静脈血を用い、貧血・感染症に関わる血液検査を行った。マイクロヘマトクリット法を用いたヘマトクリット値測定、CRP定性キットを用いたC反応性タンパクの検出、視算法による赤・白血球数測定およびディフクイック染色した血球の形態観察をした。抗原感作マウスの腹腔洗滌液標本を別途用意し、末梢血ではみられない白血球についても観察、スケッチを行った。配付資料には、時間の関係上、説明できなかった内容を入れ、学生が実習する助けとした。また、貧血に関する計算問題、考察問題を入れ、測定結果、スケッチと共に提出させた。学生に難しい手技を問い、来年の指導に役立てることとした。

8) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

9) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

4 卒業研究

- ・室内に浮遊する真菌（カビ）がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響
-モデル動物を用いた実験的研究-
- ・中国大都市降下煤塵の気管支喘息増悪作用に関する実験的研究
- ・大気中に含まれる微粒子の胎仔期暴露が出生仔の免疫系に与える影響
- ・ユズ果皮精製成分によるアトピー性皮膚炎軽減効果の検討
- ・ユズ果皮のアレルギー抑制作用を有する物質の検索
- ・ユズ果皮精製成分によるアレルギー喘息抑制効果の検討

3-6-3 健康運動学研究室

1 教育方針

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体験して感じるとともに、個人、社会、人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、近年、臨地、学校、行政において健康運動や運動療法が重要になり、看護職にも運動の理解や指導能力が必要になってきたため、それに応えられる知識および実践能力を身につけることを目指している。さらに、在学中に自分の健康・体力を維持・増進するために運動量を確保し、将来のために自分に合った運動習慣を身につけることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることにより、将来、自分の健康管理に役立つだけでなく、他者（患者、地域住民、生徒）に対して実感を伴った看護、保健指導、健康教育、保健事業の立案ができるようになる。また、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、科学自体については教育されていない。大学のスペシャリティは科学であるため、学部及び大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものを見方などを学ぶ機会を取り入れている。

2 教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れで、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

本学では女子学生が多いが、特に女性の場合、平均的に見れば大学時代は既に体力が低下する時期である。また、一人暮らしになり運動や食事がおろそかになる場合も多い。さらに、本学では体育に相当する授業は1年次だけであり、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加が著しい。男子学生の中には放課後に自主的にスポーツを行っている学生もいるが、思いっきり体を動かす機会が少なく、ストレスが溜まっているようである。このような点を考慮して、授業では実習を入れて体を動かす機会を増やす努力をしているし、コンタクトグループのスポーツ交流会等も行われているが、これらはあくまでも「点」であり、充分とは言えない。今後、2年次以降の選択科目としてスポーツを取り入れるとか、体育系サークルを増やす等、対策を検討したいと考えている。

3 科目の教育活動

1) 身体運動科学

1年次

吉武 康栄

単純に身体を動かすだけではなく、自分の身体機能を論理的に理解した上で身体運動を発現させる、また、他者に対して運動の重要性を論理的に説明し実践できるようになる、ということを目的とし、講義と実技を組み合わせた授業形態をとった。具体的には、a) エネルギー供給系＝脂肪燃焼（講義）→実践、b) 伸張反射（講義）→実践、という具合に、単なるレクリエーション的な授業にはならないよう系統立てて授業を行うよう努めた。

2) 健康運動

1年次 後期

稲垣 敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションやニュースポーツを実施し、運動量の確保にも十分に配慮した。また、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、レクリエーションの高齢者や障害者における重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

3) 健康運動論

2年次 前期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。

4) 健康運動学演習

2年次 後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、基底面・重心・平衡性、筋力・パワー、エネルギー消費量等の測定実習も行った。

5) 運動療法特論

3年次 後期後半

稲垣 敦

概論では、運動処方についても講義し、各論では広く運動療法について疾患・障害別に講義した。選択科目であるが受講者が多かったため、実習としてはシングルマスター試験を行った。

6) 運動指導特論

4年次 前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子、軽部 薫、中嶋 麗理

他の研究室の教員に協力を頂き、精神障害者の運動表現療法、マタニティビクス、子供のレクリエーション、介護予防運動、肩こり・腰痛体操、ウォーキング／スローピング、ネイチャーゲーム、ヨガ等を体験し、指導法について講義した。今年度から学外講師の指導の下でヨガを行った。

7) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

8) 健康科学実験 X 心電図の成り立ちと心拍変動解析

吉武 康栄

看護の現場で頻りに接することが多い心電図測定を行った。まず、心電図の成り立ちについて電気生理学的観点から理解できるように講義を行った。続いて、学生全員が電極を装着し、自身の心電図波形をリアルタイムで確認した。さらに、生活習慣病外来などで用いられることが多い心拍変動解析による心臓自律神経活動評価を行った。最終的には2年後の卒業論文作成を念頭に置き、できるだけ論理的な文章作成についての講義を行った上で、レポート作成を行わせた。

4 卒業研究

- ・皮膚感覚の感度の低下が力調節中の神経・筋機能に及ぼす影響
- ・目的別ウォーキングコースの提案—大分市富士見が丘団地をモデルとして—
- ・ヨガの介護予防効果
- ・習慣的な登山の体力増進および減量効果

3-6-4 人間関係学研究室

1 教育方針

人に関する深い理解を基盤として、人の喜びや苦しみを分かち合える豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。

各科目の具体的な教育目標は以下の通り。1) 認識装置としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得（「人のこころの仕組み」）、2) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、3) 人間関係の形成方法についての理解（「コミュニケーション論」）、4) 対人援助技術の習得（「行動療法論」「人間関係学演習」）、5) アセスメント活動を通じた自己理解・他者理解の促進（「心理アセスメント論」）、6) 看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「行動療法論」「心理アセスメント論」）、7) 人間と社会について幅広い観点から学ぶ（非常勤担当科目）（「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「人間と社会」「法学入門」「経営学の基礎」「大分の歴史と文化」「文化人類学入門」「保健医療ボランティア論」）。

講義にあたっては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるよう配慮している。また、授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

2 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標は、人のこころに関する基本的な知識の習得、集団・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解である。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室の変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと適宜結びつけている。また、Webを媒介とした教育環境の整備も行っている。

他の看護系教室の講義との連携・教育内容の調整を進めることが、今後の課題である。

3 科目の教育活動

1) 人のこころの仕組み

1年次 前期

吉村 匠平

認識装置としての人の機能の特徴、2年次前期に開講される「人間行動論」の理解に必要な学習心理学の知識、人の発達のプロセス等について、小実験・VTR視聴などを併用し講義を進めた。今年度は、講義ブログを開設し、ブログ上に講義で利用した講義資料をすべて集約することで、Web上にポートフォリオを作成した。また全ての学生のコメントに対する返信を「講義Q&A」として集約し、学生に配布することで、受講学生の興味関心、理解状況をモニターできる環境を構築した。

2) コミュニケーション論

1年次 前期

関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に3回のグループエクササイズ、行動観察のまとめ方、行動観察の計画と実施、プレゼンテーションなどを実施した。一昨年からプロセスレコードの解説と作成を1年次に導入しており、看護実践に不可欠なコミュニケーションの基礎を体験的に理解し身につけさせている。具体的には、相手の発信している情報に気づく事、受け取った情報を自分がどのように理解しているか知る事（自己を振り返る）、相手に対して適切な情報を発信すること。そして、コミュニケーションは情報の受信－理解－発信（フィードバック）の繰り返しから成立していることを体験的に理解させた。

来年度はカリキュラム変更があるため、コミュニケーションスキルについては別授業に移して、プレゼンテーションスキルなどの講義を拡充する必要がある。

3) 人間関係学

1年次 後期

吉村 匠平

本講義は大分大学への遠隔講義を兼ねる形で行われた。心理学における「性格」理解のあり方として、客観的理解を目指す「実体論」と人間関係の中での理解を目指す「関係論」を取り上げ、それぞれについて説明した。また、ケアを必要としている人との関係を作る上で援助職者に必要とされる基本的な態度として、ロジャースの3条件を取り上げた。知識の暗記に留まらず、知識の運用ができるようにするため、心理テスト体験、客観形式の問題演習、VTRを用いたケース検討を行った。講義ブログを開設し、ブログ上に講義で利用した講義資料をすべて集約し、Web上にポートフォリオを作成した。また全ての学生のコメントに対する返信を「講義Q&A」として集約し、学生に配布することで、周囲の学生の興味関心、理解状況をモニターできる環境を構築した。

4) 人間関係学演習

2年次 後期前半

関根 剛

カウンセリングスキルを身につけるため、ロールプレイを中心に8回の演習を実施した。展開は、従来通り、異なる想定状況を作成して実施した。想定状況は、健康問題、日常的な人間関係、不快な出来事のほか、人間以外を主人公とするイヌバラ法をヒントにした状況設定など、多彩なものを用意した。また、ロールプレイは、昨年度同様に、学外のボランティアの方の協力を得て、患者役となっていた。

改善点は、(1)ロールプレイの設定状況を、全体が同一のもので進めるよう改善した。そのため、よりポイントをしぼったコメントを行うことが可能となった。(2)カフェテリアの利用、ヘッドセットを用いたカセットへの録音は順調であるが、自宅でカセットを利用できない学生も少なくない。そのため、今後、デジタルレコーダーなどを整備して、MP3なども利用できるようにする必要があると考えられる。

5) 行動療法論

2年次 前期前半

関根 剛

今年の講義では、従来に学習心理学に関する基礎的講義を減らして、認知行動療法に関する解説、自分自身の日常的な行動変容を試みる内容を増やした。具体的なプログラムを検討させて、講義の中でフィードバックを行い、実践させるなど、より体験的な理解ができるものに改善を行った。

今後、プログラム作成などについて、より効果的な講義、フィードバックが可能となるように、講義内容を検討・改善させていく予定である。

6) カウンセリング論

2年次 前期

関根 剛、吉村 匠平

講義前半を吉村、後半を関根が担当した。講義前半では発達心理学領域を取り上げた。乳幼児期の言語発達、身体運動機能の発達のアウトライン、発達障がい（ダウン症、ADHD、自閉症、反応性愛着障がい）について講義した。発達障がいに関しては、障がいの個人差が大きいことを繰り返し確認しながら、必要最低限の発達障がいの特徴を知識として習得することを求めた。後半は、代表的なカウンセリング理論を中心に解説を行うと共に、看護師が家族へのアプローチを行うことを具体的に知ってもらうために、臨床の看護師を招いて話を聞く機会を引き続き設けた。今年からは、養護教諭のための内容として、不登校、非行児童生徒への対応方法、犯罪や災害被害者への危機介入などについての内容を取り入れた。

7) 心理アセスメント

2年次 後期前半

吉村 匠平

自分自身を対象として様々な視点からアセスメントを行い、その結果を他者の前でプレゼンテーション（自己開示）することを求めた。課題内容は、自分で選択した絵本の読み聞かせ、標準化された心理テストを自分自身に実施・解釈し、それをプレゼンテーションする、自分自身についてのコラージュの作成と品評会、の3つである。多くの受講者が「発表準備が大変だった」と回答する反面、「自分を振り返る機会になった」「看護教育という視点から考えて意味のある活動だった」とも回答していた。今年度の受講者は9名であった。

4 卒業研究

- ・不快刺激場面に先行する音楽聴取が気分を与える影響
- ・看護学生の志望進路についての研究－不確定性志向性の観点から－
- ・看護学生の学業継続を可能にする要因について
- ・呼称としての「エンゼルメイク」「ラストメイク」「死化粧」の印象分析
～サービスの受け手側からの検討～
- ・あいづち行動における熟練者と非熟練者の比較

3-6-5 環境保健学研究室

1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学全般の基礎的事項と社会的な問題を結びつけた講義を行うことにより、さまざまな領域に重なる重要な項目（物理的事項から生物的事項までを含む）を理解させることに主眼を置いている。放射線の医療利用や健康影響・安全に関する講義、MEに関する基本的な知識、とくに安全管理についても講義も担当した。これらは、看護系大学の看護の基礎教育として、将来、保健・医療に携わる者が身につけるべき基礎的な知識として教授していくべきものと考えている。

2 教育活動の現状と課題

例年、1年次生は環境保健に対する関心は高いが、学年が進行するにつれて関心が低下する。これは他の看護基礎科目の講義や実習のウエイトが大きくなるため、環境保健と看護職との関係が見えにくくなるためである。疾病予防やヘルスプロモーション教育の一環として、健康リスク問題を理解させることは重要な課題であると考えている。学生のモチベーションを高めるために、看護における講義の位置づけを考えさせるように講義の冒頭では話をするようにしている。

3 科目の教育活動

1) 環境保健学概論

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

環境保健学全般をカバーすることよりも、環境保健学の基本的な考え方や知識を中心に講義をしている。講義の内容は次の通りである。

- 1) 公害から環境リスクへ、2) 現代の健康影響問題、3) 環境疫学、4) 新型インフルエンザのリスク予測、5) 環境リスク論、6) リスクアセスメントと環境基準、7) 人における発がん、8) がんの生物学、9) 環境化学物質による発がん、10) がん以外の健康影響、11) リスクのトレードオフ、12) 化学物質の安全性試験、13) 環境リスク心理学、14) 環境リスクの諸問題とまとめ、15) 試験およびその解説

2) MEの原理と安全管理

1年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、福泉 剛生（学外講師）

医療機器の原理と機能および医療における役割と安全性に関する基本的事項を講義した。とくに、安全性については電気の基礎から実際の管理までをカバーした。生命維持に関するME機器の臨床での現状を理解させるために、学外講師（臨床工学技士）を招き、臨床におけるMEの安全管理の重要性を認識させている。講義の内容は次の通りである。1)MEとは何か、2)電磁気に関する基礎知識、3)ME機器の基本原理解、4)X線診断装置：CT、5)画像診断装置：超音波診断装置・MRI、6)生命維持に係るME機器の用途と原理、7)生命維持に係るME機器の臨床、8)ME機器の安全管理、9)試験とその解説

3) 生活環境論

2年次 前期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

我々を取り巻く食環境、水環境、住環境と廃棄物についての基本的事項を解説し、健康で快適な生活を送るための食品保健・環境保健のあり方を論じた。講義内容は次の通りである。食中毒、食品添加物と食品中の残留物質、BSE問題、上水道と下水道、温熱環境と気圧、騒音・振動・悪臭、室内汚染。

4) 放射線健康科学

2年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線の健康影響とその防護の考え方を理解させるために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広汎な知識をコンパクトにして講義を行った。同時に並行して行われる健康科学実験（放射線）とこの講義を通して、放射線の正体とその健康影響について理解できるように配慮している。講義の内容は次の通りである。1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)身近な放射線・放射線源、5)放射線と物質との相互作用、6)放射線の線量、7)放射線の生体応答 -DNA損傷と突然変異、8)放射線の生体応答 -染色体異常と細胞死、9)放射線の健康影響（確定的影響）、10)放射線の健康影響（確率的影響）、11)放射線リスクの評価とその不確かさ、12)安全の考え方と放射線防護基準、13)UV・電磁界の健康影響、14)患者のための放射線防護、15)試験とその解説

5) 環境保健学演習

2年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

3つの課題を与え、その課題をレポートにまとめる作業を教員が支援するやり方で演習を行った。環境問題でとりあげられるリスク情報を理解するためには、その情報の定量的な側面の理解が不可欠であることから、コンピュータを利用して計算やグラフ作成を通して統計的な考え方を理解させるように配慮している。課題は次の通りである。1)メダカの死亡数分布によるデータのばらつきを調べるシミュレーション、2)全国のがん死亡統計およびがん罹患統計から、部位別性別年齢階級別死亡率・罹患率のグラフの作成を通してがんの傾向を理解する。罹患率の高いがんの致死率を計算し、大分県の年齢調整罹患率の推定に用いる。3)生命表を用いた平均余命の計算

6) 環境リスク論

3年次後期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

現代の環境問題の背景と複雑さ、解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。講義内容は次の通りである。環境リスク論とは、食品安全とリスク、環境ホルモンのリスク、新型インフルエンザのリスク、地球温暖化のリスク、化学物質の発がんリスク、生態リスク。

7) 環境倫理学

4年次 前期

甲斐 倫明

生命倫理に対する関心は身近な問題だけに関心が高いが、環境倫理に対する関心は看護学生では低い。本講義では、生命倫理の社会的な事例を紹介し、生命倫理の考え方を説明しながら、生命倫理の問題を考えることを実施している。その上で、現代の環境問題へと導入し、環境倫理がなぜ問われるのかを事例をあげて説明している。講義の内容は次の通りである。1) 倫理とは、2) 現代の生命倫理問題、3) 人間中心主義と生命中心主義、4) 現代の環境問題と倫理、5) 自然の生存権の問題、5) 世代間倫理の問題、6) 地球全体主義

8) 健康科学実験 VI 放射線

小嶋 光明

本実験では、自然環境中の放射線の存在と量を理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられている診療用X線照射装置からの散乱線を定量的に測定し放射線防護のあり方について考察した。

9) 健康科学実験 VII 空気汚染と水質汚染

甲斐 倫明

水質汚染については、学生の自宅の水道水を採取させ、残留塩素を測定することで、塩素消毒と副生成物について考える。化学測定以外に、水道水、沸騰した水道水、ミネラルウォーターをそれぞれ一定の温度にしてブラインドで味覚テストを行うことで水道水の質について考える。室内汚染については、あらかじめ、嗅覚パネル試験を行った後、室内の汚染の程度を人間の嗅覚を用いて測定する。この実験を通して、嗅覚や味覚を用いて測定は学生の生活の質に対する関心を高くすることがわかった。

10) 健康科学実験 VIII 染色体異常

伴 信彦

正常染色体の標本と、放射線によって誘発した異常染色体の標本を顕鏡し、染色体の構造的異常について学んだ。また、ダウン症候群の核型分析と慢性骨髄性白血病細胞の標本写真の観察を通して、疾病と染色体異常の関係について考察した。

4 卒業研究

- ・放射線の繰り返し照射はDNA初期損傷を蓄積するか？
- ・未修復DNA損傷を持つ細胞は細胞分裂により排除されるか？
- ・バイスタンダー効果によって生じる放射線誘発DNA初期損傷は修復されにくいのか？
- ・エストロゲン受容体の有無を組み込んだ乳がん発症数理モデルによる乳がん罹患率の年齢変化の分析
- ・小児がんの放射線治療に伴う二次がんのリスク推定
- ・放射線照射後の造血系回復過程の年齢依存性に関する検討 -放射線誘発白血病への感受性との関連-

3-6-6 健康情報科学研究室

1 教育方針

指定規則上、本科目群が担当する保健統計・疫学、情報処理の領域は、保健師の専門科目であるが、科学的根拠に基づいた看護実践に必須の基礎的な知識・技術と位置づけて教育にあたっている。

特に、その知識と技術を実践する際の重要な手段として、また本学における学習のツールとして、コンピュータおよびネットワークを活用する能力を早期に獲得できるように配慮している。

必修科目では保健師・看護師として必要十分な能力水準を目標としている。選択科目においては、さらに高度な内容について扱い、学生の将来の目標に応じた高度な能力の育成を目指している。

2 教育活動の現状と課題

コンピュータやネットワークを利用する技術に関しては、入学時の基本的能力はさらに向上している。しかし、これら技術以前の基本的な数的・言語的・論理的情報処理能力の獲得度はますます低下の傾向にある。

そのため、必修科目においては、全体の水準の向上も重要であるが、特に理解不足の学生に対する配慮を重視している現状である。特に、演習においては3名の教員できめ細かい対応を行っている。

指定規則の改正により、保健統計と疫学が独立し、それぞれの充実が求められる中で、限られた授業の量の中で、教育内容の厳選と充実、さらに理解を助ける教授法の実践など、検討を進めていかなければならない。その目的のためにも、学生用サーバを活用した学習支援などについても今後一層の充実をはかりたい。

3 科目の教育活動

1) 健康情報学

1年次 前期

佐伯 圭一郎

保健師領域の「保健統計・疫学」を教育する科目として、体系的に人間にかかわる健康情報の発生から評価までの方法を教授した。特に、単なる指標や数値の暗記でなく、考え方やその活用といった方法を会得することを目指している。しかし、本年度の講義に関しては、「自然科学の基礎」から数学領域のコマが減少した分を補うために、やや実例・応用部分の充実が実践できなかったと判断する。来年度に向けて、配布資料の改善や自己学習用教材の提供の準備をすすめている。

2) 生物統計学

1年次 後期

中山 晃志、佐伯 圭一郎

基本的な統計学の知識を実際の調査・研究の場面と関連付けながら、目的に応じた情報の収集、データ分析の技法、結果の表現方法について学習した。特に、統計的な方法論の考え方に重点を置き、統計情報の適切な解釈能力を高めることを目指した。数式は最小限にとどめ、パソコンの統計ソフトウェアを用いての統計処理の演習を行い、処理結果を解釈できるようになることを心がけている。

基本的な事項に関しては、反復を十分に行うことにより理解を深めるとともに、2年次の各論を取り扱う選択科目との連続性をも考慮している。

3) 健康情報処理演習

1年次

品川 佳満、中山 晃志、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立つための知識と技術について学んだ。また、インターネットをコミュニケーションや情報収集に役立つ技法を習得した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール）、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱うにおける情報システム（オーダーリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。年々学生のコンピュータを操作する技能は向上しているため、技術的な説明だけでなくコンピュータやネットワークに対する基本知識に関する解説に時間をかけた。

4) 応用情報処理学

2年次 前期後半

佐伯 圭一郎、中山 晃志

1年次の生物統計学との連続性を持たせ、生物統計学各論と事例データによる統計解析演習を行っている。毎回の小テストと解析演習レポートにより、学習の定着をはかり、事例を看護領域に求めることにより、具体的イメージと解析手法の必要性を理解できるように配慮している。

5) 実務情報処理学

4年次 前期後半

佐伯 圭一郎

健康情報学で学んだ知識と健康情報処理演習で身につけた情報処理能力を具体的事例について応用できることを目標としている。

疫学調査における標本抽出、尺度構成法、食中毒の疫学などについて扱い、また本年度もプレゼンテーションや印刷物のデザイン、病院施設の環境デザインなどについて商業デザイナーの外部講師を招致し、情報処理能力の一層の向上をはかった。

4 卒業研究

- ・ハイリスク妊婦に対する出生前訪問に関する文献的研究—NICU入院が予測される児の家族へのケアの有用性—
- ・大分県の医療機関ウェブサイトのユーザビリティおよびアクセシビリティ調査
- ・糖尿病一次予防の定量的 評価に関する文献的研究
- ・健康教育を目的としたホームページ制作と利用者による評価
- ・大分県内の市町村合併による出生率・死亡率の変化
- ・電子カルテシステム導入の効果に関する文献的研究

3-6-7 言語学研究室

1 教育方針

言語学研究室では、言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (Speaking, Listening) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (Computer Assisted Language Learning: コンピューターを用いたウェブ学習システム) によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習する。1年次の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、2年次の講義内容は、看護英語である。各話題について3－4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1年次前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声テープで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

上記取組みを実施することで、学生の英語学習意欲の維持、学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な英語学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが、今後も課題である。

3 科目の教育活動

1) 英語I-A1

1年次 前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読については、食料、環境、科学などをテーマとして、個別に具体的な内容の英文テキストに取り組んだ。日常生活を営む上では気がつかないが、実は自分自身にとって非常に身近でかつ深刻な問題に意識を向けることは大切である。そうした重要な主題も比較的平易な英文で表現できることを、英文テキストの暗唱をすることにより体得できたと思う。多読による総読書量は、前学期間中一人平均126,500語。最も多く読んだ学生の語数は251,000語。

2) 英語I-A2

1年次 後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。万病の元凶のひとつに高血圧が上げられる。血圧の定義付け、血圧に関係のある医療専門用語をはじめ、高血圧の原因とそれによって起こる症状、さらには予防や治療に関する知識まで、高血圧というひとつの症状に特化して英文テキストに取り組んだ。一課の文章全体をパラグラフごとに暗唱することで、英文テキストの構成の特徴が体感できたと考える。多読による総読書量は通年で一人平均148,000語。最も多く読んだ学生の語数は295,000語。

3) 英語I-B1

1年次 前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

4) 英語I-B2

1年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. Some of the topics are People, Food, Shopping, etc. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

5) 英語II-A1

2年次 前期

宮内 信治

講読内容として、人間の精神活動の中枢である脳について、様々な角度からの知見を紹介した英文テキストに取り組んだ。また、ナイチンゲールの簡単な伝記にも英語で触れた。音声・音韻的な視点から、英語の個々の音や単語ではなく、その総体としての英文の音の流れに着目し、その流れの中で自然に発生する音の変化に焦点を当てた。また、英文を読む際の音韻的特徴について、その音の流れを視覚的に捉えることができるような演習を実施し、それをもとに暗唱などの自主学習を促し、習得を確認した。音の英語らしさを具体的に捉えることに新鮮味を感じたようである。多読による総読書量は、一年次からの通算で前期終了時一人平均184,000語。最も多く読んだ学生の語数は356,000語。

6) 英語II-A2

2年次 後期

宮内 信治

講読においては、自らの辛かった体験について「書く」ことによる病気治癒の知見や、ヒトゲノム計画の発展とそれに伴う問題についての英文テキストに取り組んだ。英語のイントネーションに特化した表記方法の特徴や意味について理解した後、その表記法を用いた英文テキストを繰り返し音読し音の流れを確認した。暗唱課題により、学生自らが英語らしい音の流れを再現できるようになった。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均196,000語。最も多く読んだ学生の語数は386,000語。

7) 英語II-B1

2年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. Some of the topics are Personal Information, Clinical Information, etc. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

8) 英語II-B2

2年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. Some of the topics are Hospital Departments, Checkup, etc. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

9) 英語III-A

3年次 前期

宮内 信治

医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させ、関連する語彙の習得、増強を図った。

10) 英語III-B

3年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. Some of the topics are Hospital Ward, Emergency Department, etc. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

4 卒業研究

- ・ 談話イントネーション理論に基づく英語疑問文のピッチ移動の分析
 - 学習者用英語多読本を用いて -
- ・ 日本の看護系大学の英語入試問題：その特徴と文章・単語の難易度の調査・分析
- ・ 患者との信頼関係を築く上での看護師の心がけと現状
 - コミュニケーションに焦点をあてて -

3-6-8 基礎看護学研究室

1 教育方針

看護学の導入部分として、概括的な知識と考え方を理解させ、看護理論を理解するとともに、援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。初学者であり、自らの看護に対する姿勢を考えさせる機会としている。講義・演習・実習を行うにあたっては、個々の科目の学習進度にそって、具体的な看護実践に関連づけたり、一人ひとりの学生の理解度や興味・関心について考慮しながら、教授している。特に少ない講義・実習時間の内容をより効果的に履修させるための講義・実習前の予習プリントや講義・実習後のレポート指導などの事前・事後指導を強化している。

2 教育活動の現状と課題

様々な志望動機を持つ学生に対して、看護専門職について理解し、将来の進路に対しても方向づけができるように、教材の準備には時間を割いた。実技指導のデモンストレーションでは細かな技術がよく視聴できるように、教員の演示と同時にビデオを撮影・放映して、技術手順が学生にも十分理解できるように視聴覚機材の活用に努めた。しかし、学生が反復して技術手順を視聴するには、教材の蓄積が少なく十分とは言えない。今後、実技指導のためだけではなく、他の科目も含めて、例えば、臨地実習時のマナーや態度などに関する視聴覚機材やソフトの開発にも努力しなければならない。

3 科目の教育活動

1) 看護学概論

1年次 前期・後期前半

伊東 朋子、松尾 恭子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。看護の場の広がり認識させるために外来講師による授業を取り入れたり、時にはグループワーク活動をさせて、成果発表の時間などを設け、積極的な参加が可能となるように教材を精選した。

2) 看護管理学入門

1年次 後期後半

粟屋 典子、伊東 朋子

看護活動に必要な看護管理に焦点を当てて、看護管理とは何か、看護管理の必要性、看護管理のプロセスなどについて理解させた。毎回、講義終了時に簡単な感想文及び質問を記載させ、学生の理解度や興味関心を知る資料とした。

実際の臨床現場における看護管理のあり方について学生はほぼ理解していた。

3) 生活援助論

1年次 前期後半・後期、2年次 前期前半

伊東 朋子、松尾 恭子、小野 さと子、吉田 智子、佐藤 由香理、朝見 和佳、江藤 真紀、大賀 淳子、小野 美喜、高波 利恵、濱田 佳代子、福田 広美

日常生活の援助技術及び医療に伴う看護技術の基礎を修得することをねらいとし、「生活過程」「生命維持」「診断治療」に関わる技術を教授した。全員が技術の体験が時間内にできるように、1組と2組に分けて授業を実施している。2年次のレポートは、毎回予習を課して授業に取り組みせ、内容理解を深めるように記載する指導をし、毎回提出させてコメントをした後返却している。1年次のレポートは、対象の状況や心理を理解するために、患者役を行ったことに対する感想を毎回提出させてコメントして返却している。生活援助論の試験は、筆記試験と実技試験で構成している。授業外の自己練習に対する動機づけを行い、実技試験を行っている。

4) 臨床看護総論

2年次 前期

伊東 朋子、松尾 恭子

看護実践を展開するための問題解決法について学習させ、できるだけ平易に具体性を持たせて展開しながら、看護過程について学ばせ、臨地実習への方向付けも行った。

5) 基礎看護学演習

2年次 後期

伊東 朋子、松尾 恭子

看護の目的、目標を達成するための方法論である「看護過程」を事例を通じて展開させた。発表会を設け、グループワークした内容を共有できるように配慮した。また4年次後期に履修させる総合看護学への動機付けも行った。2段階実習を前にして、発表会では臨地実習での担当教員にも参加してもらい、学生の学習状況の把握と同時に学生の取り組みに対する助言や感想を聞いた。

6) 基礎看護学実習

2年次 後期後半

伊東 朋子、藤内 美穂、松尾 恭子、濱田 佳代子、朝見 和佳、井伊 暢美、江月 優子、小野 さと子、甲斐 令子、神取 恵美子、河野 梢子、後藤 愛、佐藤 由香理、杉山 玲子、高波 利恵、津隈 亜弥子、津留 英里佳、吉田 智子

既習科目の理論と実践が統合できるように、実習指導に力をいれている。患者1名を受け持つ本格的な実習としてははじめての学習であるため、実習施設の看護部長による講和を依頼し、実習に対する動機づけ等に配慮した。また2実習施設、14病棟での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生のグループメンバー構成を十分に検討して取り組んだ。実習施設の備品・消耗品等の整備にも努めた。最終日は、実習の達成感やケアの有用性を感じられる学生の発言が多く聞かれた。

7) 看護と遺伝

2年次 前期後半

吉河 康二、定金 香里、岩崎 香子

学問としての遺伝学よりもむしろ、古典的メンデル遺伝を学ぶことにより、遺伝疾患発現、垂直遺伝の仕組みを知ること重点を置いた。難易度としては高校生物レベルの知識で理解できる内容にした。次に遺伝情報の発現と多様性を復習するとともに遺伝子変異が関与する疾患や、体質との関連について講義を行い、基礎的知識から臨床遺伝に繋がるように配慮した。講義後半では、臨床遺伝学の立場から、メンデル遺伝病、多因子遺伝病、ミトコンドリア遺伝病、および染色体異常症について概説した。さらに、遺伝学的検査の概要を述べるとともに、実際の遺伝カウンセリングにおいてどのように応用されるのかについて述べた。

4 卒業研究

- ・妻を看取る夫への支援のあり方-妻と死別した夫の思いから-
- ・小児へのがん告知に対する考え
 - 医師・看護師・家族に焦点をあてて—
- ・看護学実習と就職先決定との関連
- ・看護師の笑顔が患者に与える印象と影響
- ・看護師が考える看護師-患者間での信頼関係構築のための看護師の要素と患者の反応
- ・新人看護師がエンゼルケアを通して抱く思い

3-6-9 看護アセスメント学研究室

1 教育方針

看護アセスメント学研究室では、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目指している。人の健康問題は、その人の発達段階、日常生活を取り巻く環境と深く関係しており、一般的な人間に対する理解とからだの仕組みを熟知した上でのアセスメント能力が重要である。看護援助の必要性を見極めるために、人体の構造・機能や病態生理などの基礎的知識を活用し、対象者の健康状態を身体的・心理的・社会的側面から総合的に把握・判断する視点と方法を理解させることを目標としている。

2 教育活動の現状と課題

本研究室では、看護疾病病態論Ⅰ・Ⅱ、看護アセスメント方法論の講義と、看護アセスメント学実習を担当している。対象者の健康問題をアセスメントするための能力を高めるためには、からだの仕組みや病態の理解が基本である。しかし、これら基礎的知識の習得に対して「とっつきにくい」「むずかしい」という感じを持っている学生が多いようである。アセスメント能力は看護実践のコアとなる能力の本質的な構成要素である。網羅的に暗記する学習方法では真の理解につながらないため、五感を駆使して学習できる工夫を行うとともに、実習（現場）で多く遭遇する疾病や病態など、優先的に習得すべき知識や看護に必要と考えられる知識を精選して教授するように配慮している。

3 科目の教育活動

1) 看護アセスメント方法論

2年次 前期後半

藤内 美保、濱田 佳代子、河野 梢子、神取 美恵子

まず、アセスメントの意義およびフィジカルイグザミネーションの基礎を説明し理解させた上で、理論から実践へ、単純から複雑へという流れに基づいて、各系統別（筋骨格系、神経系、消化器系、呼吸器系、循環器系）に講義・演習を行った。各系統別の演習ではフィジカルイグザミネーションを中心とした技術の習得を中心に、目的臓器・器官に応じた観察の視点やアセスメントのポイントを指導し、科学的根拠に基づいた思考を培うために、毎回アセスメントレポートの提出を課し、教員がコメントを付して返却した。続いて、以上のような方法で学んだ知識・技術を統合し、実践に活かせる能力を育成するとともに、人間関係を基盤とした看護援助の重要性を学ばせるために、NPO法人ななせ生きがいクラブとボランティアの方々の協力を得て、全身フィジカルアセスメント演習を行った。この演習では、インタビューや計測によって得られた情報をグループメンバーで共有し、それらを解釈・分析し、意見交換を通してアセスメントの結果を導き出す過程を体験させた。さらに、多角的・理論的な考え方を強化するために、臨床現場で遭遇し易い事例を提示し、事例別アセスメント演習を行った。この演習では、グループで一つの事例課題に取り組み、最終的には病態関連図およびロールプレイを用いた発表を行って学習成果を共有した。これらの演習を行うことによって、病態を正確に捉えた上で必要とされる観察ポイントに目を向けたアセスメントができるようになったが、病態と治療（特に薬物療法）とを関連づけた解釈・分析には課題が残された。今回はグループでの討議時間が限られ、文献学習に十分な時間を費やせなかったことが原因の一つであると考えられる。今後は、ゆとりある授業計画の基に、学生の科学的思考を培えるような指導方法を検討する必要がある。なお、授業の総括的評価として、筆記試験に加え本年度より新たに実技試験を導入した。

2) 看護疾病病態論Ⅰ

1年次 後期後半

藤内 美保、濱田 佳代子

循環器疾患、消化器疾患、肝・胆・膵疾患、呼吸器疾患、腎・泌尿器疾患、血液・造血器疾患について、各々の疾患の概念、病態生理、検査、診断、治療などの医学的知識を、看護の視点から精選して教授した。病態メカニズムの理解を促すために、解剖学、生理学における既習知識の復習を適宜組み込み、学生が思考を整理しやすいように病態関連図を用いるなどの工夫をした。一冊の専門書を熟読して内容を理解することが大切と考えることから、選定したテキストに基づいた講義を行った。学生が学んだ知識を着実に積み重ねていけるように、各系統別疾患の講義終了毎に試験を実施した。

3) 看護疾病病態論II

2年次 前期前半

藤内 美保、濱田 佳代子、河野 梢子

感染症・アレルギー・自己免疫疾患、筋・骨格系疾患、脳・神経系疾患、消化器疾患、肝・胆・膵疾患について、各々の疾患の概念、病態生理、検査、診断、治療などの医学的知識を、看護の視点から精選して教授した。教育効果を高めるための工夫として、内容を図解化して学生の理解を促すように努めた。一冊の専門書を熟読して内容を理解することが大切と考えることから、選定したテキストに基づいた講義を行った。学生が学んだ知識を着実に積み重ねていけるように、各系統別疾患の講義終了毎に試験を実施した。

4) 看護アセスメント学実習

2年次 後期

藤内 美保、伊東 朋子、濱田 佳代子、松尾 恭子、朝見 和佳、井伊 暢美、江月 優子、小野 さと子、甲斐 令子、神取 美恵子、河野 梢子、後藤 愛、佐藤 由香理、杉山 玲子、高波 利恵、津隈 亜弥子、津留 英里佳、吉田 智子

第二段階の基礎看護学実習を土台として、対象者の状態を総合的に捉え、健康に関わる問題を明らかにするプロセスを学ぶことを目的として行った。実習場所は大分県立病院9病棟と大分赤十字病院5病棟の計14病棟であり、一病棟につき学生5～6人を配置した。各実習場所に担当教員1人を配置し、学生に対する直接的な指導は担当教員および臨床側の実習指導者が行う指導体制をとった。学生1人が原則として患者1人を受け持ち、2週間で看護計画の立案までの看護過程を展開した。

全体的評価としては、学生は実習目標を概ね達成できたといえる。中には、実習態度面において記録提出期限を守れないなどの学生も見受けられた。学内実習反省会で担当教員から出された意見の中には、対象者に積極的に関わろうとする姿勢は良いが、その一方で、アセスメントプロセスの理解が不十分であり、文献の活用を苦手とする傾向などの指摘もあった。

今後は、学生のこうした弱点を補強できる教育内容・方法の検討が必要である。

4 卒業研究

- ・在宅高齢者の延命治療に対する語りから得られた看護職の役割
- ・クリニカルパスを活用した「不安」の看護診断に関する研究
—外科系病棟の看護師の認識に焦点を当てて—
- ・「爪」に関するフィジカルアセスメントの文献検討
—系統的・体系的な観察項目の提案—
- ・家族との話し合いが臓器提供の意思および死生観に及ぼす影響
- ・ベビーマッサージが児に及ぼす心理的効果の評価に関する文献検討

1 教育方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。成人看護学実習、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱにおいて必要となる専門的な知識及び援助技術の習得のためには、成人・老年看護学に関する講義のみならず成人・老年看護学演習に重きを置き、学生が模擬事例で設定した対象者への具体的な看護の学びを深めることができるように配慮して指導をしている。また、糖尿病患者を対象としたロールプレイによる学習で、関連の看護技術や患者指導の実際を学ぶ機会を取り入れている。さらに、臨床で働く様々な医療職者（医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士）を学外講師として招き、実際の医療・福祉現場に即した対象者の理解や援助方法を学ぶことができるようにしている。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、その学習範囲は非常に広範にわたっている。成人看護学概論・老年看護学概論は、学習内容に比べ時間数が少ないため、講義の内容はどの項目に関して行うか優先度を考えながら行っている。また、学生に課題を与え教室外での学習（図書館利用、高齢者へのインタビューなど）を取り入れることにより、成人・老年に関する医療・看護の幅広いとらえ方ができる機会を作っている。新カリキュラムにおいては、成人・老年看護学概論の時間が大幅に増加しているため、時間数が少ないための問題は解消すると考える。成人・老年看護援助論では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾患とそれぞれの治療法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、医療・看護器具を提示し、学生の関心と学習意欲を高め印象に残るような講義をするようにしている。試験問題・解答に関する解説の時間を確保することを本年度の課題としていたが、通常成人・老年看護学に関する試験は最終講義のあとに行われているため、学生全員を一堂に集めて試験問題・解答に関する解説の時間を確保できておらず、学生へ個別に対応しているのが現状である。このことに関して次年度は工夫する必要があると考える。援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、身体機能別に急性期と慢性期に必要な看護援助について教授しているが、各2コマずつの割り当てで進めている場合が多く、学生が欠席した場合はその部分の学習が欠けることになる。そこで、欠席者にはその講義内容に関するテーマを与え、ハンドアウトの資料やテキストで自己学習させレポートを提出させることにより補っている。

3 科目の教育活動

1) 成人看護学概論

2年次 前期前半

大下 敏子

成人期に生じる多様な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達、行動、社会、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で必要な知識を教授した。具体的には、ライフサイクルにおける成人期の特徴、健康問題、健康の保持増進、疾病予防、健康障害のレベルに応じた対象への看護、終末期にある対象と家族への看護、社会資源の活用などについて講義を行った。終末期における看護に関しては、ビデオを用いホスピスの一例を学生に紹介した。また、保健医療に関する情報を新聞や雑誌などから切り抜きをし、自分のコメントなどを書き入れたものをスクラップブックとして作成する課題を与えた。このことにより、単に大学内での講義や病院施設などでの実習だけでなく、日本における保健・医療・看護の現状に興味や関心・情報を持つことの大切さを学ぶ機会とした。

2) 老年看護学概論

2年次 前期前半

大下 敏子

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。具体的には、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題の特徴とその看護、薬物療法・健康障害のレベルに応じた看護、終末期にある高齢者と家族への看護、社会資源の活用などについて講義を行った。また、由布市にある介護老人保健施設の院長（医師）を招き、介護老人施設に入居している高齢者へのケアの実際について学ぶ機会を得た。この際、認知症をもつ高齢者への看護・介護についての学びもすることができた。学生の周りにいる高齢者へのインタビューを通し、高齢者の生きてきた過程を知り、「高齢者の個人史」を作る課題を与え、高齢者とのコミュニケーションの方法や、生きてきた環境や考え方を知る学びの機会を与えた。

3) 成人・老年看護援助論 I

2年次 前期後半

大下 敏子、小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について教授した。周手術期、栄養と排泄、消化器疾患、内分泌疾患、代謝疾患、感覚器疾患、運動機能障害、脳・神経疾患などの健康問題をもつ対象への看護援助について、学生が必要な知識と技術を習得できるよう、講義媒体や教授方法を様々に工夫して授業をおこなった。援助技術の演習、外部講師による講義では、講義内容の理解が深まるように事前学習として課題やレポート提出を課した。出席表を兼ねた質問カードやメールなどを用い、学生の質問には随時答え、学生の援助論に対する理解を促した。確実な技術習得を目的とした学内実習の実施にあたっては、援助論のオリエンテーション（OR）の際に学内実習のORを同時に行い、準備期間を多く取れるようにした。学内実習では3事例に対する患者指導を各グループごとに計画立案・実施、ロールプレイ形式の発表を取り入れたことで個別的な患者指導の必要性やその方法について教授することができた。

4) 成人・老年看護援助論II

2年次 後期

大下 敏子、小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について教授した。酸素化に関する健康問題、循環器系疾患、呼吸器系疾患、血液・免疫系疾患、生殖器系疾患、終末期における健康問題などに対する看護援助について、学生が必要な知識と技術を習得できるよう、講義媒体や教授方法を様々に工夫して授業をおこなった。援助技術の演習、外部講師による講義では、講義内容の理解が深まるように事前学習として課題やレポート提出を課した。終末期の看護に関しては、大分市内のホスピス病院の看護師長を外部講師として招き、ホスピスケアの実際についての学びをする機会を得た。「終末期ケア」について、グループ討議とその結果を発表する機会を作った。まとめとして、外部講師の講義、グループ討議、文献による学習などを含めた終末期看護に関するレポートを課題として与え、自分なりの死生観や終末期における看護について考える機会を作った。さらにクラス内で発表をし学生同士で共有を図った。出席表を兼ねた質問カードやメールなどを用い、学生の質問には随時答え、学生の援助論に対する理解を促した。

5) 成人・老年看護学演習

3年次 前期後半

大下 敏子、小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期の対象者の健康問題に応じた看護過程の展開を学習する目的で、臨床の場で急性期・慢性期の健康問題に対し、回復への援助、日常生活の自立、社会生活への適応に向けた看護過程を展開するために、学内演習を取り入れている。模擬事例を用いて、対象のアセスメント、看護診断、個別性のあるケアプランの立案、評価、修正の一連の過程を学び、臨地実習で適切な看護実践ができるよう教授した。講義では、模擬事例を用いた看護過程の展開について教授し、演習時間は個人やグループごとに担当教員による個人面接や課題の提出などにより個別指導を行った。最終日には、各グループ別に看護過程の展開についての発表をディベート形式で行い、異なった視点による看護過程の展開があることを学生が学ぶ場を設けた。本年度も、研究室の全教員が担当者となったため、一人の教員が担当する学生が15名程度と多くなりすぎず、より個別的な学生指導ができた。昨年と同事例を用いたが、昨年度の学生の理解が乏しかった箇所を強化することができ、よりよい指導につながったと考える。次年度は、新カリキュラムで重要とされている実践力の向上を考慮し、模擬事例による看護過程の展開に加え、看護技術も学習できるように演習を計画している。

6) 成人看護学実習

3年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、大下 敏子、小野 さと子、吉田 智子、河野 梢子、高波 利恵、朝見 和佳、甲斐 令子、杉山 玲子

成人看護学実習は、各領域別の看護の特性や看護過程をふまえ、個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的として、大分市内の総合病院で6週間の期間行った。9病棟にわたり、学生は一病棟あたり5～6名、それぞれに担当教員が配置された。専任教員は3名で当たった。昨年度は、基礎看護学研究室の教員が講義のために帰学せざるをえず、不在時に他の研究室より教員が担当するという不都合があった。本年度は、実習の当初より学外より2名の実習担当教員を確保し対応したため、基礎看護学研究室からは、2名の教員が実習期間中支障なく担当教員としての業務を遂行することができた。これにより、学生は実習全期間を通し同じ担当指導教員から一貫した指導を受けることができた。学生は6週間のうち3週間は急性期を残りの3週間を慢性期の対象を受け持つように設定した。しかし、入院期間の短縮化が進み、学生が一人の受け持ち対象者を3週間継続して看護実践を学ぶことができず、途中から別の対象者を受け持つなど、対象者の選定に苦慮した担当教員も多くいた。次年度は受け持ち対象者の選定にさらなる工夫をこらす必要があると考える。本年度は、昨年度修正・更新した実習マニュアルと看護技術習得確認シートを用い、学生の看護技術の習得にも力を入れた。昨年度と同じく実習前後に実習施設側とミーティングを持ち相互の意見交換と理解を深めることができた。次年度も開始時の施設側とのミーティングの際、外来実習、手術室の見学などについてより具体的に協議することにより、学生及び担当教員、病棟の実習指導者間でよりよい理解のもとに円滑な実習が行われると考える。

7) 老年看護学実習Ⅰ

3年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、大下 敏子、小野 さと子、吉田 智子、河野 梢子、高波 利恵、朝見 和佳、甲斐 令子、杉山 玲子

老年看護学実習は、各領域別の看護の特性や看護過程をふまえ、個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的として、大分市内の総合病院で6週間の期間行った。9病棟にわたり、学生は一病棟あたり5～6名、それぞれに担当教員が配置された。専任教員は3名で当たった。昨年度は、基礎看護学研究室の教員が講義のために帰学せざるをえず、不在時に他の研究室より教員が担当するという不都合があった。本年度は、実習の当初より学外より2名の実習担当教員を確保し対応したため、基礎看護学研究室からは、2名の教員が実習期間中支障なく担当教員としての業務を遂行することができた。これにより、学生は実習全期間を通し同じ担当指導教員から一貫した指導を受けることができた。学生は6週間のうち3週間は急性期を残りの3週間を慢性期の対象を受け持つように設定した。しかし、入院期間の短縮化が進み、学生が一人の受け持ち対象者を3週間継続して看護実践を学ぶことができず、途中から別の対象者を受け持つなど、対象者の選定に苦慮した担当教員も多くいた。次年度は受け持ち対象者の選定にさらなる工夫をこらす必要があると考える。本年度は、昨年度修正・更新した実習マニュアルと看護技術習得確認シートを用い、学生の看護技術の習得にも力を入れた。昨年度と同じく実習前後に実習施設側とミーティングを持ち相互の意見交換と理解を深めることができた。次年度も開始時の施設側とのミーティングの際、外来実習、手術室の見学などについてより具体的に協議することにより、学生及び担当教員、病棟の実習指導者間でよりよい理解のもとに円滑な実習が行われると考える。

8) 老年看護学実習II

4年次 前期前半

小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、大下 敏子

施設に入所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設3施設、介護老人福祉施設2施設の合計5施設において2週間の期間老年看護学実習を行った。クラスを前半と後半のグループにわけ、6～11名の学生を配置して実習をした。担当教員は日々のカンファレンスで、学生が実習で学んだ点や疑問点を出し合い学習を深めるように指導を行った。実習最終日に学内で実習の成果の発表会を持ち、各施設の特徴や状況での看護職の役割やケアの実際からの学びと課題を学生同士、教員の間で共有した。昨年度より発表会のあり方を改善し、本年度も同様に学生は午前中に準備に充て、午後に発表を持つことにより円滑に進めることができた。しかし、グループ討議の中で特定の学生に偏ったディスカッションとなる傾向があり、今後の進行方法に課題を残した。新カリキュラムによると、在宅看護実習が加わるため、老年領域の新しい施設の開拓と実習要綱の検討と改定を行った。今後も一施設に依頼する学生の適切な人数や実習方法に関して施設側と話し合い、効果的な実習が行えるようにしていくつもりである。

4 卒業研究

- ・一般病院の看護師が行うターミナル期患者に対する口腔ケアの実態調査
- ・入院中の骨髄穿刺の看護援助に対する患者の満足度 ～看護援助の実態と比較して～
- ・母親である看護師の子育て満足感と育児行動の変化に関する調査 ～二交替勤務と三交替勤務に着目して～
- ・がん看護を実践する看護師の道徳的感性 ～告知から治療の意思決定支援に焦点をあてて～
- ・臨地実習における看護学生と患者との対人関係構築に関する調査
- ・がん看護における看護師のタッチの認識とケアの実際

3-6-11 小児看護学研究室

1 教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、2年次前期に小児看護学概論で小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学び、学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の特性を認識するように工夫している。3年次前期・後期の講義、学内演習、実習を通して、学生は多くの小児に関する専門的知識を学ぶ。学んだ専門的知識を実習で実践し、看護場面に知識を応用することは容易なことではないだろう。学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近では少子化で兄弟姉妹も少なく、小児が周囲にいない、また接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持たせるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生の評価アンケートでは概ね「満足あるいはほぼ満足」が8割であり、欠席も少なく意欲的に参加していた。

小児看護学の学習内容の定着については、本年度も3回の分散型試験を行い重要項目の意識づけを工夫し、再試験を実施してフォローした。小児看護に対する興味と関心をもっている学生が少ないので期待を裏切らないような講義を継続したいところである。

3 科目の教育活動

1) 小児看護学概論

2年次 前期前半

高野 政子

小児看護の特質と概要を理解することを最終的な目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1) 小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2) 世界の子どもの健康と医療、3) 子ども観の変遷と子どもの権利、4) 日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5) 小児の成長と発達総論、6) 小児の形態・機能的発達、7) 心理的・社会的・言語的発達である。最終回には、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

2) 発達と援助論

3年次 前期前半

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と保健を講義し演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1) 小児期の主要な発達理論、2) 小児各期の発達アセスメント、3) 乳児期、幼児期の保育理論と技術、4) 学童期、思春期の保健と看護、5) 病気の子どものと家族、6) 小児の健康障害と看護、7) 障害のある子どもと療養生活の援助、8) 親子関係に問題のある場合の看護ほか。実習は昨年同様に、総合病院の小児病棟と療育施設の2施設で実施した。学内での技術演習は、大学院生の協力を得て6名で指導した。指導内容の要点は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。一方、看護過程の展開は、グループワークで実施した事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

3) 小児看護援助論

3年次 前期後半

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛

前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、後半は学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。

後半は臨地実習でよく出会う事例を5事例提供し、グループワークで看護過程を検討しまとめ発表した。2つのグループワークを行ったが、学生は積極的な参加を求めた。学生個々の事例展開も求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表した。この場合は個人ワークを実習でどのように活かすことできているかを評価するかが課題である

4) 小児看護学実習

3年次 後期前半

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛、佐藤 由香理

小児看護学実習は大分県立病院に1グループ学生10人で6グループ(合計60人)、別府発達医療センターに学生5人で6グループ(合計30人)の配置で、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。

学生1人に対象児1人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、約1/3の学生は実習中に2人の受け持ちを経験した。1人の子どもを継続できた場合に学生には看護に工夫がみられたが、複数の子どもの受け持った学生は看護実践まで至らないということが指導側の課題となった。

保育所実習によって、子どもの理解やコミュニケーションに慣れた後に病院実習を行うようしている。これにより、病気を持つ子どもと家族への関わりがスムーズであった。なお保育所実習は今年も運動会があるため9月の実習を避けて、7月23日～30日までに2グループが実施した。7月実施でも9月の病院施設における実習に影響はなかったと考えている。

4 卒業研究

- ・わが国における小児がんの子どもへの痛みへの看護に関する文献的研究
- ・地方都市における小児救急に関わる看護師の意識調査から見えてくる実態と課題
- ・「父親になった」という父性の自覚に関する研究
- ・退院後にへき地に戻る母子に対する支援と地域連携-NICU看護師のインタビュー調査から-

1 教育方針

母性看護学・助産学は、専門看護学講座に位置している。

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある母性各期・新生児の健康現象に対する援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。母性看護の実習は、周産期に重点を置いて展開している。

助産学（選択科目）では、独自の判断で助産（妊娠・分娩・産じよく・新生児期）過程を展開し、さらに広く母子及び家族の健康と福祉を促進するための理論と方法について学ぶことを目的としている。助産学実習の分娩取扱いについては、指定規則で助産師又は医師の監督下において1学生10例程度取り扱うことが定められており、本学では9例以上を目安とすることを基本的考え方としている。助産師教育では、卒業時点までにどこまでできることが望ましいかを基本にすえ、最小限、社会のニーズの変化に対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。しかし、現在おかれている4年制看護大学の教育環境下では、実習期間（8週間）内で、妊娠期の経過診断の訓練や分娩介助10例程度が守れず、夏休みを利用して目標を達成するという現状を抱えており、選択科目としての課題となっている。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論を、実習で実践し理論と実際を結びつけることを目標としている。今年度も実習施設は2か所（大分県立病院、堀永産婦人科医院）であり、実習期間中の分娩が施設によって異なり、学生数88名中28名が経膈分娩の見学はできなかった。そのため、じよく婦の看護については帝王切開後の産婦を対象とした。看護過程展開時の自主的学習姿勢には学生間の差がみられた。特に男子学生に目立つ者がいた。改善点としては、昨年に引きつずき更なる個別指導の重視が必要である。

今年度の助産学専攻者は学部生15名、ダブル2名で計17名である。本学の助産学教育は3年次から始まるが、3年次の母性看護学援助論と同時並行で助産学概論、助産診断・技術学の講義が順次継続して行われる。その上、6単位の助産学実習（6週間）では、実習期間が短いため指定規則の分娩介助数が先行し、妊娠期の診断技術訓練の時間がとれず、学習目標をどこにおくのが望ましいか大変難しい問題に直面している。もちろん分娩介助数でさえ実習期間内に到達出来ない現状があり、今年度は夏休み期間を長い学生では3週間延長してやっと9例に到達した。学部の助産学教育は、非常に過密であることが例年と同じく大きな課題である。今年度の1学生の分娩介助数は9例から12例でばらつき、平均9.8例で文部科学省に届け出た。母性看護学実習も助産学実習も少子化の影響が大きく、実習効果はその実習調整（実習病院を増やすこと、また臨時実習指導者を増やす等の難問）の努力に負うところが大きい現状である。

3 科目の教育活動

1) 母性看護学概論

2年次 前期

宮崎 文子、林 猪都子

母性看護学の基本概念として、人間の性と生殖（種族保存）の側面から女性の全生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点をおき、母性看護の役割と重要性について系統的に教授した。実施状況は次の通りである。

1) 母性とは・母性看護とは（倫理面の強化）2) 母性看護の変遷、3) 人間の性と生殖（リプロダクティブヘルス・ライツ）の概念と意義、4) ゼンダーとSEX 5) 家族関係の理論とサポートシステム、6) 母性看護の理論と実際、7) 愛着行動と母子関係、8) 思春期の特徴とその対応、9) 家族計画と受胎調節、10) 人工妊娠中絶の諸問題・不妊症、11) 更年期・老年期の特徴とその対応、12) 母子の歯科保健、13) 母性の環境と諸問題、14) 母子保健に関する諸制度、15) 評価。講義終了後の授業評価を行った。その結果出席状況・講義満足度は9.26（10点満点）で大変興味を示した。今年度の改善点はテスト2回、レポート1回と評価回数を増やしたこと、母性看護の内容は学生自身の問題であり極力学生参加型の講義形式（質問形式）とした。今後の課題は、社会変化に応じた授業内容の精選と判断力・思考力に重点を置いた教授方法の更なる継続検討である。

2) 母性病態論

2年次 後期

関屋 伸子、宇津宮 隆史、上野 桂子、谷口 一郎、堀永 孚郎、肥田木 孜

女性のライフサイクルにおける主要な疾患の病態・生理を理解することをねらいとし、主要な女性生殖器疾患および周産期の異常の病態生理と検査・治療などを教授した。主要な女性生殖器疾患は、子宮の疾患、月経異常、不妊症、性感染症とした。成人看護学における女性生殖器疾患との関連を考慮しつつ、リプロダクティブ・ヘルスとしてのとらえ方を理解できるよう配慮した。一方、周産期の病態では、ハイリスク妊娠・分娩における母体および胎児の病態と看護に関して、教科書に加えて配布資料を作成し教授した。特に、合併症妊娠・分娩では既修学習内容を想起させるよう発問等を工夫し、また、事例に基づき説明を工夫するなどインタラクティブな講義展開となるよう考慮した。全15回の講義であり科目終了後に筆記試験を実施し出席・講義態度を加えて評価した。

3) 母性看護援助論 I

2年次 後期

関屋 伸子、戸高 佐枝子

妊婦が胎児およびその家族に及ぼす影響とその看護について学ぶことをねらいとし、妊娠・分娩期の母体および胎児の生理的变化とその影響因子や母子とその家族への看護を教授した。妊娠・分娩における母体の身体的・生理的变化とそのフィジカルアセスメントについてパワーポイント、VTR、プリント等を用いて解りやすい教授方法を試みた。また、開業助産師を外部講師に招き看護職における母子管理の実際として妊娠期の管理と自宅分娩について1コマ分講義を持った。アンケートより学生は「妊婦主体のケアの大切さ」「新生児の可愛らしさ」「母親の優しさや遅しさ」などを感じ取っていたことがわかった。全8回の講義であり評価は科目終了試験および出席や講義態度を含めた。

4) 母性看護援助論II

3年次 前期

関屋 伸子、石岡 洋子

妊娠期、分娩期、産褥期の母子およびその家族のニーズと母性看護の役割について学ぶことをねらいとし、妊娠・分娩を踏まえて産褥期における母子の生理的及び心理・社会的特徴とその看護を教授した。特に、産褥早期における褥婦の日常生活とセルフケア能力獲得へ向けた援助と早期新生児の健康状態のアセスメントの理解を図った。また、母性看護学実習を見越して妊娠・分娩・産褥・新生児期における母性看護の学習ポイントを整理した資料を配布したことや学生への質問には講義中以外にもメールを通じて対応するなどして学生の主体的な学習をサポートした。全14回の講義であり科目終了後に筆記試験を実施し出席・講義態度を加えて評価した。

5) 臨床母性看護総論

3年次 前期

関屋 伸子、石岡 洋子、乾 つぶら、軽部 薫

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し、基本的看護技術を修得することをねらいとし、モデル人形やペーパーペイシエントを用いた母性看護技術の実践を教授した。母性看護過程ではウェルネスの視点で正常妊婦、産婦、褥婦、新生児の看護過程展開できるように看護理論を含めた授業の工夫をした。また、正常産褥事例を用いて1クラスを8グループに分けグループワークを実施した。單元ごとにアセスメント、ケア計画などを作成しグループ討議を行った。看護過程は個人レポートにまとめて提出させた。一方、看護技術は、1)妊婦計測として腹囲・子宮底長測定、レオポルド触診法、胎児心音聴取、2)新生児・褥婦の観察として新生児身体計測、新生児バイタルサイン計測、子宮復古状態の観察、内診児の介助、3)沐浴を実施した。評価は、出席およびレポートを提出とした。

6) 母性看護学実習

3年次 後期

宮崎 文子、林 猪都子、梅野 貴恵 関屋 伸子、石岡 洋子、軽部 薫、乾 つぶら

母性看護学実習の実習施設は2施設である。今年度は、施設毎に1グループA施設5名、B施設10名とし、1グループ5名に教員1名の組み合わせで行った。実習期間は1学生2週間（延べ12週間）である。実習は実習期間中の分娩件数の関係で、学生1名につき1名の妊婦・じょく婦を受け持つよう配慮し、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開の実際を体験学習させた。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る母性看護の概念を認識させる実習を期待したが28名の学生は分娩の場面に遭遇することができなかったことは残念であった。しかし、母性各期の保健指導はそれぞれ工夫して取り組むことができるよう努力した。

*今年度の母性看護学の実習施設（学生数88名）

大分県立病院4階東病棟・産科外来：学生数58名（うち分娩見学できなかったもの28名）

堀永産婦人科医院：学生数30名（全員分娩見学できた）

7) 助産学概論

3年次 前期前半

宮崎 文子、関屋 伸子

助産および助産の基本概念について、歴史的変遷から概説し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割の重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。内容は次に示すとおりである。1)助産学の構成、2)助産の本質・意義・対象、3)助産の歴史とあり方、4)助産風俗、5)母子保健の動向 6) 母子保健の諸制度、7) 助産師の職制と業務、8) 助産師教育(諸外国と日本)、9) 助産学を構成する理論・助産過程、10) 助産師と倫理、11) 諸外国の助産師活動、12) ICM(国際助産師連盟)の活動、13)日本の助産師の現状と課題、14)助産学と研究、15)評価。評価は筆記試験と課題レポートである。選択学生の出席状況は100%で講義内容には大変興味を持って参加した。

今後の課題は、変化する周産期システムに対応した講義内容の精選である。

8) 助産診断・技術学 I

3年次 前期後期

林 猪都子、乾 つぶら、戸高 佐枝子

助産診断に基づいて、助産を実践するための基本的な知識と技術を理解するために、妊娠期、分娩期の助産診断、援助技術、保健指導についての講義と演習を行った。妊娠期の確定診断、時期診断、経過診断の内容に加え、妊娠期の超音波診断ができるように妊娠期の超音波診断の講義を行った。分娩期は分娩経過診断ができるために、分娩経過と児頭回旋、内診所見の関係が理解できるように骨盤模型や内診モデルを使用して講義を行った。妊娠期の超音波診断の講義について、来年度から専門性の高い講義内容なので医師に依頼するようにした。参画型の講義を行っているので学生は積極的に参加していた。

9) 助産診断・技術学II

3年次 前期・後期

梅野 貴恵、軽部 薫、武石 美智代、佐藤 久美子

女性の生殖器の形態・構造から生殖器の発生、成熟女性の性周期、マタニティサイクルにおける内分泌の変動、思春期、更年期のセクシュアリティについて教授した。産褥期は外部講師に依頼し母乳育児支援の方法を2コマ実施した。学生は「母乳育児を成功させるための10か条」を理解し、助産師の支援で母乳育児を推進していくことが可能であることを学んだ。今年度初めて、NICUの認定看護師資格を有する外部講師に依頼し異常新生児の講義を1コマ実施した。新生児の演習では、近年助産師に求められている「新生児蘇生法アルゴリズム」に則り、新生児モデルで体験した。産褥期の退院指導では、4グループに分かれ、指導案、パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換を行った。学生は、すべての講義、演習において積極的に参加していた。

10) 助産診断・技術学III

3年次 前期・後期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、中村 聡、嶺 真一郎、後藤 清美、山口 裕子、林下 千宙、宇津宮 隆志

マタニティサイクルにおける女性の医学的管理と新生児医療、女性のライフサイクルにおける健康上の問題(特に内分泌)について、それぞれの専門とする医師によって講義された。学生全員とも熱心に講義を受け、成績は70点以上であった。

11) 助産診断・技術学IV

4年次 前期前半

林 猪都子、梅野 貴恵、石岡 洋子、軽部 薫、乾 つぶら

分娩期の助産診断の講義と症例を用いて、入院時から分娩経過の予測と助産診断が行えるように、助産過程の展開を行い、実際に助産学実習で活用できるように教授した。「助産診断システム研究会」の助産診断の概念枠組みを用いて、時期診断、状態適応診断、経過予測診断が行えるように、1事例をグループ学習で展開し、1事例を個人課題として取り組んだ。グループ学習での事例展開の内容解説を最終日に行い、学生の学習理解を深めた。

分娩介助演習では、側面介助法、正面介助法の2通りの介助法を習得させている。演習方法では、分娩介助の方法を解説し、教員がデモンストレーションを行った後、直接介助、間接介助、新生児などの役割を決めて、教員の指導のもとで実施した。学生は、最初は手順に沿って実施し、次の段階では助言なしで一通りの分娩介助技術が行えることを目標に、分娩介助評価表を用いて、5回以上の直接介助を実施した。技術の評価は、グループの評価者、教員が技術チェックを行った。

12) 地域助産活動論

4年次 後期前半

宮崎 文子、梅野 貴恵、戸高 佐枝子

助産管理の概念について、その本質と機能、助産管理（経営管理）の歴史的変遷、開業権を持つ専門職業としての概括的な知識・考え方及び地域助産活動について必要な理論と方法について教授した。

講義内容は学生の興味を重視して、事例を踏まえての展開と最新情報の提供に留意している。改善策は、特に助産師の自律の視点から助産所経営管理の中のマーケティング手法と財務管理に焦点を絞り事例演習を強化した。

課題としては、今後、経営管理の理解を深めるためには助産所の関連性を強化することである。

13) 助産学実習

4年次 前期

宮崎 文子、林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、石岡 洋子、軽部 薫、乾 つぶら

助産学実習は、妊娠中から産後までの家族を含めた継続的な援助及び安全で安楽な「いいお産」ができる助産力を身につけるための実践実習を重視した。本年度の助産学選考学生は17名（うちダブルスクール2名）である。実習施設は分娩介助ができる病院・診療所4施設と助産所3施設で計7施設である。今年度も少子化が進行する現状から17名の学生の分娩介助10例程度（指定規則）の到達は助産学実習の課題である。例年通り、短期間（8単位6週間）の分娩介助実習は夜間実習を余儀なくし、17名中4名の学生は夏季休暇3週間の返上希望実習でやっと9例に達した。今年度の平均分娩介助数は1人当たり9.8件であったが学生・教員の自己努力によるものである。さらに残る課題は妊娠期の診断技術訓練であり、教育期間の延長なくして、われわれの目指す教育目標には到達しがたいと考えている。今年度の実習施設名を以下に示す。

- | | |
|--------------|---------|
| 1 大分県立病院 | 5 生野助産院 |
| 2 国立別府医療センター | 6 渡邊助産院 |
| 3 堀永産婦人科医院 | 7 友成助産院 |
| 4 くまがい産婦人科医院 | |

4 卒業研究

- ・健康女性の尿失禁とその要因に関する文献的研究
- ・大分県都市部の出産経験者の助産師外来・院内助産所に関する認識及びニーズ調査
- ・母乳育児に対する父親意識に関する研究－母親との比較から－
- ・看護学生が希望する子宮頸癌検診方法と自己健康感（QOL）に関する調査
- ・分娩第2期の分娩背負所要時間に関連する要因の検討

3-6-13 精神看護学研究室

1 教育方針

看護職にとって共通の課題である「人のこころの健康に関する援助」についての視点・知識・技術・態度を培うことを目標に、2つの講義と演習・実習という流れで授業構成している。特に、精神疾患やこれを有する人に対する偏見を払拭することを、重要な目標の一つとし、精神科医療の現場で学生が体験したことが、長く心の傷となったり新たな偏見の種になったりしないよう注意を払っている。また、精神科病棟以外の「生活の場」に目を向けること、精神科医療以外の場でもこころの健康に配慮する習慣を培うことを重視している。

2 教育活動の現状と課題

全科目に共通することとして、a) 精神障害（者）に対する偏見の是正、b) 学生が興味と関心を持って自律的に学べる工夫、c) 授業の前後や途中で学生の関心・希望・理解度等を把握しタイムリーに授業へフィードバックすること、の三点に配慮を心がけている。2年次の講義までの既習知識（人間心理学など）に個人差が大きく、3年次後期の実習までにクラス全体を一定のレベルまで高めるには講義・演習の時間に不足を感じるが、学習内容の精選を図りながら努力している。演習・実習を通じて、学生が精神看護以外の領域で学んだはずの知識・技術が十分応用されない場合や、逆に他の領域で学んだことを単純に精神看護の領域に単純に当てはめすぎる場合が見受けられる。したがって、“精神看護の考え方の特徴は何か”、“精神科での看護とはどのような実践か”という点について、実践経験の少ない学生に具体的なイメージを効果的に伝える工夫が課題である。また、このイメージを学生が確認する機会としての演習・実習について、学生がどのような取り組み方をすれば効果的な学習になるか、ということ“を“学生に伝わりやすい語彙”で説明する、という面でさらに工夫の必要がある。

3 科目の教育活動

1) 精神看護学概論

2年次 後期

影山 隆之

毎年改訂しているオリジナルテキストに基づき、症状論・疾病論、精神看護の歴史、心の健康を理解するための諸モデルを学習した。精神疾患を有する当事者が出演するビデオなど視聴覚教材の活用、授業内にペーパーで学生の意見を集め時間内に講義進行に活用する工夫、授業中に紹介する国試過去問、授業後に提出する興味・理解・質問についての無記名式アンケート、これに基づく次の時間の振り返り、という一連の工夫が、学習意欲を引き出すために一定の効果を挙げたものと評価している。

2) 精神看護援助論

3年次 前期前半

大賀 淳子

例年のように、精神科医療全体および実習施設における患者の動向を踏まえ、扱う疾患を調整したうえでハンドアウトの配布資料を作成し、講義に臨んだ。また、看護師自身のメンタルヘルスについてもあらたに小單元として設け、学生が在学中だけでなく卒業後も自分自身のメンタルヘルスを意識していけるように配慮した。毎回のミニレポート、ミニテストの結果を次回講義に反映させる講義方法を継続しており、学生による評価結果からも、参加型の講義になりつつあると判断している。ただし、「ポイント提示」については未だ不十分であり、今後の課題である。

3) 精神看護学演習

3年次 前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子

講義で学んだ基礎知識を土台とし、事例の見立てと看護計画の立案・展開能力を高めるために、実践で出会う可能性の高い事例や場面を想定しながら進めた。

事例の見立てと看護計画の立案についての演習では、段階的に少しずつ課題を発展させながら、最終的には実習のワークシートと同じ様式で看護計画を立て、可能な部分についてロールプレイで実践してみる、という段階的プログラムを考えた。同一事例について、さまざまな学生・グループによる見立てを討論する過程は、学生にとって興味深い学習になったようだった。事例の提示の仕方によっては、学生の視野が制約されてしまったり、一部の情報にとらわれてしまったりする傾向が示唆されたので、提示内容について継続的に精選してゆく必要がある。

コミュニケーションについての体験学習では、ロールプレイを通して「聴く」「聴いてもらう」経験を味わい、インタビューの大切さと難しさを共有できたようだった。ただし、全学生が一つのフロアに散らばる空間は講堂か体育館しかないのだが、必ずしも演習に適切な空間とは言えない。この課題については今後検討の必要がある。

実習施設の院長による特別講義は、学生が高い関心を示し、内容も印象的だったようだ。

4) 精神看護学実習

3年次 後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子、佐藤 貞子

大分丘の上病院において、病棟、外来、デイケア、訪問看護の各部門での実習を通して、精神科医療施設での看護だけでなく社会の中での精神看護の役割について学ぶことを目標とした。実習直前まで担当教員の配置が確定しがたいという条件で、今年度の課題であった“早めの準備”は十分達成できなかつたが、実習が始まってからは大きなトラブルなく進行することができた。1)前年度から病院に導入された電子カルテを学生が閲覧する時間や場所の確保と、閲覧情報だけにとらわれず受持ち患者をよく観察することの指導は、ある程度スムーズにできた。2)受け持ち患者への看護過程についてタイムリーな指導に努め、デイリーカンファレンスにおける振り返りと学生同士の協力について早い時期に強調して指導したことにより、それぞれ前年より学習効果が高まった。3)訪問看護を経験できた学生は少数 だったが、学生に好評であった。4)外来・デイケアなど病棟以外で学ぶ機会を、十分な事前学習の上で活用できた学生と、事前学習が不十分で活用しきれなかつた学生がいたことから、準備を全学生に徹底するための工夫が課題である。学生間の情報交換や学生同士の協力の意義、実習中のカンファレンスの持ち方、事前学習の内容、演習との接続などについて、引き続き検討を重ね改善を図ってゆきたい。

4 卒業研究

- ・単科精神科における看護職員の喫煙とストレス対処特性との関連
- ・日本の病院看護師における二・三交替制勤務の比較研究についての文献的検討
- ・看護学生の職業意識の入学後の変化とストレス対処特性との関連
- ・大分県における自殺の原因・動機についての分析－「健康問題」および「経済・生活問題」に焦点をあてて－

3-6-14 保健管理学研究室

1 教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立てている。1年次は、講義により「健康」という概念を理解するとともに、初期体験実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多様な健康ニーズを学び、今後の学習の動機付けができることを目指した。2年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、3年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理および、地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習では健康教育の展開を通して、実践に視点をあてた保健活動が理解できるような講義・演習の内容とした。

2 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行っている。また、昨年度の反省として、1年次、2年次で学習した内容から、3年次以降の講義・演習を通して、地域で活動する看護職の活動の理解にはうまく結びついていない状況があり、いかに学生が具体的に実践をイメージし理解しながら知識と技術を獲得し、さらに地域実習につなげていけるよう教授できるかが課題であった。今年度は、特に3年次・4年次の地域看護学の生活援助論の演習等に参加することで、学生の学習状況を把握することができ、その後の地域看護学実習の指導につなげることができ、学生の学びを深めていくことができたのではないかと考える。保健師の教育という視点で、広域看護学講座として、お互いの教授内容を理解し学生の学習状況について情報交換を行い、学生の学びが効果的になるよう検討していくことが重要であると考えている。

3 科目の教育活動

1) 健康論

1年次 前期前半

草間 朋子、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

健康の概念と健康に対する考え方の歴史の変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。

担当（講義回数）と概要

草間 朋子（1）大分県立看護科学大学における教育方針

桜井 礼子（5）看護の視点から健康を考える、ライフサイクルと健康、健康づくりと健康日本21の展開、健康づくり 健康と運動、喫煙、飲酒、こころの健康

平野 互（2）疾病構造とライフスタイル、健康度の評価

高波 利恵（1）健康と環境

朝見 和佳（1）健康と栄養

坪山 明寛（1）看護職の役割と感性

宮崎 文子、高野 政子、大下 敏子、影山 隆之、工藤 節美、李 笑雨（1）専門分野における健康課題と看護職の関わり

2) 保健福祉システム論

2年次 後期

平野 互

まず「権利」について論じたのちに、憲法に謳われた基本的人権である生存権を実現するための制度的保障すなわち社会保険、社会福祉、国家扶助および保健・医療を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。社会保障制度が大きく転換し、医療法や保健関連法規も毎年のように変わっているため、法体系と諸制度を体系的に理解できるよう整理するとともに、国家試験の出題傾向に対応できるよう講義を構成した。加えて、システム・マネジメントに必要なリスクマネジメントや、インフォームド・コンセント、プライバシー権と個人情報保護法、ノーマライゼーションの理念など患者・障がい者の諸権利を保障するための基本理念について論じ、専門職としての判断に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

学生の授業評価からは、おおむね学生が講義の意図を理解し、少なくとも権利や社会保障制度に対する関心を高めて、制度の枠組に対する理解ができたことが伺えた。その一方、例年同様に学習意欲が低く成績も良好でない学生は存在し、学習意欲の向上と講義出席への動機付けを図るためのさらなる工夫の必要性があると考えられる。

3) 保健活動論

3年次 前期・後期

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践ができるよう、日本赤十字社の協力を得て演習を行った。

担当（講義回数）と概要

桜井 礼子(9) 地域保健活動、救急医療と災害看護活動、学校保健

平野 互 (2) 健康教育

高波 利恵(4) 産業保健活動

安達 国良 (1) 保健所の役割と活動の実際（北部保健所所長）

日本赤十字社(4) 救急救命処置の基礎（講義1、実技演習3）

4) 保健管理学演習

3年次 後期後半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から個人および集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。演習は、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして、どのような健康教育を行うか、小グループに分かれてグループワークを行った。また、保健活動の根拠法、社会制度や社会資源の活用について理解するために、事例を展開するために必要な事項に関して学生一人ひとりに課題を提示し、レポートにまとめ、学生間で共有する資料を作成した。最後に発表会で各事例についてロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、他のグループの学びを共有するとともに、ディスカッションを通してより深い考察ができるような場とした。

学生は、対象が個人及び集団へのアプローチとなるため、対象の具体的なイメージを持つことが難しく、健康教育の展開については課題が残ったが、第4段階の地域実習で健康教育を体験することから、その学びが深まることを期待したい。

5) 初期体験実習

1年次前期（7月8日～7月15日の6日間）

桜井 礼子、平野 互、朝見 和佳、江月 優子、井伊 暢美、江藤 真紀、大賀 淳子、小野 朱美、小野 さと子、神取 美恵子、河野 梢子、木下 結加里、後藤 愛、佐藤 由香理、高波 利恵、田中 美樹、津隈 亜弥子、津留 英里佳、平田 美和、福田 広美、松尾 恭子、吉田 智子

初期体験実習は、3日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解すること目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、各施設での学びを共有し、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。初期体験実習は学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させるとともに、担当教員に密に係わってもらいながら実習をすすめている。今年度は、新たに国立病院機構 西別府病院、特別養護老人ホーム 寿志の里を実習施設とした。

実習施設：20ヶ所

事業所：九州電力株式会社、新日本製鐵株式会社大分製鐵所、昭和電工株式会社大分事務所

保健福祉施設：大分県精神保健福祉センター

健診機関：大分労働衛生管理センター

学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター

病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、大分赤十字病院、湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、緑ヶ丘保養園、国立病院機構 西別府病院

介護老人保健施設等：介護老人保健施設 わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑、特別養護老人ホーム 寿志の里

地域保健：大分市、佐賀関病院

6) 看護の倫理

3年次 前期

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、6回の講義と3回の事例演習を行った。講義は、「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「Profession の責任と倫理」・「出生と死に関わる倫理」および「自立支援と障がい者の権利」を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。事例演習は、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに、志願者を募ってスモール・グループによる発表・討議を9題行った。事例の発表者についてはグループ・レポート、その他の学生については課題に対する個人レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、事例発表の場が発表と論評に終始しがちであることがあげられる。学生の討論への参加を促進する方法について改善の余地があると思われる。

4 卒業研究

- ・高齢女性の健康関連体力の経年変化と生活活動度との関連
- ・在宅酸素療法を必要とする患者の支援とリスクマネジメントのあり方に関する研究
- ・介護保険施設における看護職の役割に関する実態調査—特別養護老人ホームと介護保健施設の比較—
- ・動作解析を用いた起き上がり動作と腹筋力との関連
- ・労働者における自己管理スキルと健康的な生活習慣との関連

1 教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動をおこなうために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、在宅看護論、家族看護学概論、地域生活援助論Ⅰ、地域生活援助論Ⅱ、地域看護学実習を展開している。特に地域看護学概論、地域生活援助論Ⅰでは、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習や実習の内容や展開方法に工夫を凝らしている。

2 教育活動の現状と課題

地域看護学概論、地域生活援助論Ⅰの講義では実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れている。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開が実施できるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等をおこなっている。開講時期が実習直前である地域生活援助論Ⅱでは、地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習をおこなう市町村の既存資料を基に、地域看護診断をおこなっている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児や生活習慣病などの事例を基に、保健師がおこなう家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解し習得できるように工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

3 科目の教育活動

1) 地域看護学概論

2年次 後期前半

江藤 真紀、桜井 礼子、吉田 妙子

地域における個人・家族、集団への看護活動をおこなうために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的内容について講義をした。主には地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）、地域看護の変遷、大分県の地域看護活動等であった。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が保健師像をイメージでき、かつ地域看護学についての理解を深められるように教授した。

2) 地域生活援助論 I

3年次 後期後半

江藤 真紀、木下 結加里、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳、渡邊 由美子、岡本 英子、城 巳佐子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習をおこなった。内容としては、地域看護活動の展開、地域におけるケアシステム、家庭訪問、健康相談、地区組織化活動（セルフヘルプグループの育成）、対象別地域看護活動（母子保健活動、難病保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、障害者保健活動、精神保健活動、感染症保健活動、災害看護活動）、市町村における地域看護活動などであった。保健所や市町村の保健師を講師として招くことで、地域看護活動の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義をおこなった。また、地域看護活動の一部では演習を組み入れることで、二次データの使い方、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を教授した。さらに感染症保健活動では講義と連動させた感染症法に基づく二類感染症である結核の事例を用いた演習を実施し、保健師がおこなう看護過程の展開をすることで、具体的な支援方法について学習をおこなった。演習終了後には常に学生へのフィードバックをおこない、演習内容の自己評価とともに学習に深みを持たせられるように配慮した。

教育方法については、学生が知識やイメージを深められるようにパワーポイント、DVDや資料を活用した。今後も授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の選出と効果的な活用方法について検討を重ねていきたい。さらに地域保健領域での目まぐるしい法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解できるよう努力をする必要がある。

3) 地域生活援助論II

4年次 前期前半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、小野 朱美、高波 利恵、朝見 和佳、平田 美和

地域看護学実習の直前の演習として位置づけ、実習地域の二次的データを用いた地域診断の実施、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、生活習慣病の事例に対する家庭訪問時の保健指導、高齢者の入浴介助等のロールプレイをおこなった。毎時、グループワークをおこなう中で学生の理解度、技術習得状況に応じて指導をした。特に二次的データを用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導の反映させていただく資料をするなど、地域看護学実習との連動性を高く維持した。さらに新生児家庭訪問での母親に対する育児に関する訪問指導では、知識と技術の統合の重要性を実感できるように工夫した。

4) 在宅看護論

3年次 後期前半

江藤 真紀、木下 結加里、小野 朱美、寺嶋 和子、杉山 玲子

疾病や障害を持ちながら在宅療養をする人びととその家族に対する看護をおこなうために、在宅看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習をおこなった。内容としては、在宅看護の意味と位置づけ、在宅看護の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、家族の特性と生活支援の方法、在宅看護過程（講義、演習）、家族の特性と生活支援の方法、医療依存度の高い人へのケア、在宅ターミナルケア、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際であった。在宅看護過程の演習ではグループワークによって、在宅療養をしている高齢者の事例を作成し、具体的な初期訪問計画を立てる学習をおこなった。

5) 家族看護学概論

3年次 前期前半

工藤 節美、江藤 真紀

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習をおこなった。内容は、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族をひとつのユニットとして捉えて援助するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにロールプレイによる家族インタビューを用い、具体的な体験を通して学習が深まるように工夫した。

6) 地域看護学実習

4年次 前期前半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳、平田 美和、小野 朱美、小野 さと子、吉田 智子、佐藤 由香理、河野 梢子、神取 美恵子、後藤 愛、津隈 亜弥子

大分県下全域の保健所（保健支所含む）9か所と市町村保健センターおよび支所26か所、訪問看護ステーション26か所、合計61か所の施設に、それぞれ2～4名の学生を配置し1～2週間（大分市保健所のみ3週間）の実習をおこなった。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職（保健所と市町村は保健師、訪問看護ステーションは看護師）が実習の現場で直接的な指導をおこない、担当教員は各施設を巡回することで学生と指導者の双方の状況把握をおこないながら、中間カンファレンスや修了カンファレンスでの指導、記録物の指導などをおこなった。実習内容は、市では少なくとも1件の訪問指導を、訪問看護ステーションでは数件の訪問看護を体験せきるように調整をおこなった。また、全員の学生が保健所または市で健康教育について計画・立案、実施、評価の一連の過程を体験し、集団を対象とした看護支援を学習した。

今後は、学生が法改正や保健事業の見直し等に対応できる実習を展開できるよう実習内容や形態の工夫がさらに必要となる。

4 卒業研究

- ・生活習慣病教室修了生と受講生の抱く健康づくり活動と行政への健康ニーズの分析
- ・高齢者における転倒と足関節可動域および土踏まずの関連性
- ・地域高齢者の転倒に関連した生活環境・習慣特性の検討
- ・地域高齢者における閉じこもりの実態と活動範囲からみた身体・心理・社会的特徴について

1 教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses. Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

2 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities: Texts, presentations, questions and answers are carried out in English. To promote the understanding, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual lectures. English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of self-study, references, methods of presentation, and a locus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-study and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted.

Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

3 科目の教育活動

1) 国際看護学概論

2年次 後期

S. W. Lee

Objectives and contents;

1. To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
2. To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
3. To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

1. Orientation and introduction to the nature of international nursing - definition, characteristics, aims-
2. Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
3. Main nursing concepts and trends of international nursing and health
-Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
4. Trends of international nursing and health,
-Global health care problems, history, models for services-
5. Risks to health and life in the world
- Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
6. Risks to health and life in the world
- Non-communicable disease -
7. International networking of health; WHO
8. Wrap-up, evaluation of the course

2) 国際看護比較論

3年次 後期

S. W. Lee, R. Sakurai

Objectives:

1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Overview of international nursing
From international health & nursing to global health perspectives
Issues & challenges for health development
(Poverty, Gender, Culture & Health Care, Environment)
2. Global strategies for all health
Human resources
3. Work force related to ICN
International Relief Organization: JICA
4. International Relief Organization Red Cross

3) 国際看護学演習

3年次 後期

S. W. Lee, R. Sakurai

Objectives of the Course:

1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation
- III. Human resources for health or/and nursing of a nation
- IV. Foreign Country' s Impact and context of aids by JICA

4 卒業研究

- Japanese nurses personality type and job satisfaction relationship; compare with Korean nurses
- Japanese nurses job stress and job satisfaction relationship; compare with Korean nurses
- Literature study on autism care and health: compare Japan, America and England

3-6-17 共通科目

1) 自然科学の基礎

1年次 前期

甲斐 倫明、岩崎 香子、小嶋 光明、定金 香里、伴 信彦、吉田 成一、吉武 康栄

1年次生が入学と同時に身につけておくべき基礎知識を整理するために、人間科学講座の教員で分担講義を行った。高校までの選択科目の違いによる学力を確認するために予備試験を実施し、あらかじめ各科目の学力を把握し講義の参考にした。講義内容は次の通りである。

1) 科学的自然観とは、2) 生物：細胞とは、3) 生物：細胞分裂の仕組み、4) 生物：DNA複製の仕組み、5) 生物：タンパク質合成の仕組み、6) 生物：生物の発生 (1) 受精、7) 生物：生物の発生 (2) 胚発生、8) 物理：電気と磁気、9) 物理：力とエネルギー、10) 物理：熱・温度と相変化、11) 化学：分子構造と化学反応、12) 化学：溶解と水溶液、13) 化学：化学変化：酸化と還元、酸とアルカリ、14) 化学：有機化合物の構造、15) 試験

2) 健康科学実験

2年次後期

岩崎 香子、安部 眞佐子、定金 香里、吉田 成一、市瀬 孝道、甲斐 倫明、小嶋 光明、伴 信彦、稲垣 敦、吉武 康栄

本健康科学実験では、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的として、例年どおり以下に示す10テーマからなる実験を行った。

1) 組織学実習、2) 血液生化学実験、3) 血液検査、4) 基礎微生物学実習、5) ラットの解剖、6) 室内空気汚染と水質汚染、7) 放射線、8) 染色体異常、9) 最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定、10) 心電図の成り立ちと心拍解析

3) 総合人間学

4年次 後期

市瀬 孝道

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第1回：看護政策。見藤 隆子

第2回：地域医療と看護職への期待。松本 文六

第3回：患者が望む看護とは。辻本 好子

第4回：青年海外協力隊としての経験。寶戸 由紀

第5回：社会人とマナー。酒井 祐一

第6回：気象予報士から見た地球温暖化。村山 貢司

4) 総合実習

4年次 前期後半

市瀬 孝道 (学部長)

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第4段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する領域と実習施設を選択する。各施設(部署)には原則として学生1名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。

総合実習の具体的な準備については、教育研究委員会所管の総合実習WGが担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担し、学生は配置決定後の2月から担当教員の助言を得ながら実習目標・計画の立案を行なった。実習に際して、担当教員は学生に同伴しないが、施設側との情報交換を十分に行い、学生の実習目標の達成を支援した。今年度は大分県内の42施設の協力を得て実習を行なった。なお、平成21年度より、実習全体の調整を行う観点から、総合実習に関することは実習関連WGが担当することになった。

5) 看護研究の基礎 I

3年次 後期後半

市瀬 孝道

本科目は、卒業研究の意義や論文作成迄の一連の過程で必要とされる基本的な考え方、進め方、知識や技術を修得することを目的としている。2日間の集中講義で行なった。講義のテーマと講師は以下のとおりである。

平成21年2月16日

(1) 卒業研究の意義 : 宮崎 文子

(2) 研究の倫理と安全 : 伴 信彦

(3) 実験研究の進め方の基礎 : 岩崎 香子

(4) 文献的研究の進め方の基礎 : 平野 互

平成21年2月17日

(5) 調査研究の進め方の基礎 : 梅野 貴恵

(6) データ解析の基礎 : 中山 晃志

(7) 文献検索の方法・文献の入手法 : 稲垣 敦

(8) 論文のまとめ方・発表の方法 : 福田 広美

6) 看護研究の基礎Ⅱ (原著購読)

4年次

市瀬 孝道

本科目は卒業研に究関連する原著、原書を検索、選択、購読し、専門論文の大意を把握し、研究を進める上での論理的な展開法、論文の書き方、作成法を学ぶことを目的としている、学生は卒論の研究期間中に3編の英語の原著論文についてまとめ、それぞれの研究室で行なう抄読会で発表した。

7) 看護研究の基礎Ⅱ (総合看護学)

4年次 後期

桜井 礼子、藤内 美保、大賀 淳子、小野 美喜、木下 結加里、関屋 伸子、田中 美樹、松尾 恭子

基礎看護教育の仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。医療・保健現場において遭遇しやすい6事例(小児、母性、急性期、慢性期、ターミナル、在宅)を用いてそれぞれの課題にそってグループワークを行い、適切にアセスメントし看護計画を立案すること、対象者のニーズや状況にあわせて安全安楽な看護技術を提供できることを目標とし、その成果を発表した。

各グループとも熱心にグループワークに取り組んでいた。発表会では、ロールプレイの場面は教職員が患者役等をつとめたため、その場に応じた対応が求められたが、学生はその場の状況を判断し、適切なコミュニケーションや看護ケアを展開することができていた。また、発表では臨床現場のリアリティに欠ける場面も若干あったものの、発表後のディスカッションでは学生の発言も見られ、事後の学生レポートも多く学びを表出することができていた。

しかし、課題作成および指導(各領域の教員)と評価者(実習WG)が異なるため、学生の学習を適切に指導・評価し得ているのか課題が残った。今後、新カリキュラムにおける単位認定化を目指して出題者と評価者の両者を同一化するなど総合看護学の在り方を検討する必要があると思われる。

3-6 大学院における教育活動

3-6-1 博士（前期）課程

1) 老年看護学特論

1年次 前期

大下 敏子、小野 美喜、福田 広美、影山 隆之、桜井 礼子、安部 眞佐子、佐藤 豊秀、宮成 美弥、木本 ちはる、安藤 由紀子、上野 千賀子、佐藤 重行

老年期において、加齢に伴って様々な形で生じてくる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題や加齢に伴う疾患や生活習慣病に起因する高齢者特有の疾患への理解を深め、疾患や健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法及び疾病予防・健康増進について学習するため、老年看護の概要、高齢者、家族、地域社会の特性と実態、老年NPの役割、介護保険等の社会資源活用と多職種連携、老年の栄養管理、嚥下とリハビリテーション、創傷処置、褥創処置、急性期・回復期にある老人への看護実践、慢性疾患をもつ老人への看護実践、在宅酸素療法を行う老人の看護、精神と行動の疾患と症状をもつ高齢者の看護、終末期にある老人への看護実践、老年看護における倫理、老年期の疾病予防・健康増進などについて、本学教員および外部講師によりそれぞれ教授した。例えば、急性期・回復期にある老人や慢性疾患を持つ老人への看護実践では、心不全の高齢者事例を用いて看護モデル、医学モデルからとらえたアセスメントをディスカッションした。学生それぞれの活動領域の知識や体験をいかした意見交換ができ、NPとしての視点も明確にしていくことができた。また、「脳・神経系、感覚器系、腎・泌尿器系、内分泌・代謝系、消化器系などの病気と症状をもつ老人の看護」では、事例を通して医学と看護モデルについて学習を行った。学生は、事例に必要なとされるアセスメントを考え、診断や治療、また理論をベースにした看護介入についてグループディスカッションおよびプレゼンテーションを実施した。老年看護の概要の中では、日本における高齢者、家族、地域社会の特性と実態を具体的に教授し、それに関連して老年NPの役割と資質についてディスカッションを行い、学生はNPに求められる役割と資質について理解を深めることができた。外部講師を招くことにより、それぞれの分野の老年看護についての具体的な知識や技術、資源の活用などの学びを深めることができた。しかし、この科目は、教える内容が多い割に時間数が少ない。NP学生へは的を絞った内容にすることにより学習効果が上がると考えられる。次年度より、外部講師との事前連絡をより密にし、授業内容についてよく話し合うようにしていくつもりである。

2) 老年疾病特論

1年次 前期

菅野 公浩、小寺 隆、武井 光雄、増井 玲子、永田 裕二、植山 茂宏、竹下 泰、石田 哲也、一木 康則

老年看護の対象者に適切なプライマリーケアを提供するために、NPに必要な老年期によくみられる疾病について学び、その診断・検査・治療についての学ぶため、老化理論、老年に特有な症状、循環器系疾患、呼吸器系疾患、運動器系疾患、脳・神経系疾患、腎・泌尿器系疾患、内分泌・代謝系疾患、消化器系疾患、感覚・聴覚障害、高齢者感染症、心の病気と症状などに関して本学教員および外部講師によりそれぞれ教授した。この科目は様々な疾病に関して、診断、検査、治療について学習するため、中身の濃いものである。次年度は学習効果をさらに高めるため、本学だけでなく、実際の医療現場で診断に用いる医療器具などがある病院などに学生が出向いて学習するように調整することも考えている。また、本年度の状況の検討から、学生が病態生理学特論を受講し関連の知識を十分に習得した上で、老年疾病特論を受講することで学習効果を上げることが望ましいと考え、次年度からは病態生理学特論の後に老年疾病特論を教えるようにする予定である。

3) 老年アセスメント学演習

開講せず。

4) 老年薬理学演習

開講せず。

5) 老年看護学実習

開講せず。

6) 小児看護学特論

1年次 前期

高野 政子、田中 美樹、玉井 友治

Wong's「Nursing Care of Infants and Children」を用いて、小児看護で用いる理論、小児と家族の看護介入、親行動の発達について教授した。後半は大学院生は助産コースの5名であったので、翻訳してレジメを作成し発表した。最後にミニテストを行った。医師の玉井友治は集中講義で最近の小児医療の実際について講義した。

7) 小児疾病特論

開講せず。

8) 小児アセスメント学演習

開講せず。

9) 小児薬理学演習

開講せず。

10) 小児看護学実習

開講せず。

11) 生殖看護学特論

1年次 後期後半

宮崎 文子、林 猪都子、関屋 伸子、梅野貴恵

性と生殖の側面から人間のライフサイクル各期（思春期から更年期・老年期）における女性と家族の健康維持・増進、健康逸脱時の援助のための対象の捉え方を理論的に探究するとともに、各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴とウエルネスを考察し、その看護の援助方法及びセルフケアのための教育（性教育）のあり方について教授した。さらに周産期にある女性と家族の親役割の獲得、愛着形成及び生殖機能の正常性維持のためのリスク回避に関する看護援助活動を深め追究した。評価はレポート及び筆記試験による。

12) 助産学特論

1年次 前期後半

宮崎 文子、林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、戸高 佐枝子、西本 真由美

近年の産科医療は急激な勢いで産科医師不足・産科病棟閉鎖という事態が生じている。妊産婦の生活圏内に出産場所を堅持するためにも、本来の助産師の専門性を生かした働きを推進することが急がれている。そこで正常分娩における医師との役割分担を担い、病院の助産師が自立して助産ケアを行う体制づくりの仕方及び自信を持って助産師外来・院内助産ができるための知識・助産診断を深め、多様化するお産に対応できる即戦力と自律した助産師の育成を狙いとした。評価はレポート及び筆記試験。

13) 助産学演習

1年次 後期

林 猪都子、宮崎 文子、梅野 貴恵、関屋 伸子、軽部 薫

妊娠期診断学実習、妊産褥婦保健指導実習、NICU実習に行く前の知識の強化を図る内容と現在の産科トピックスの内容とした。演習方法は学生が主体的に参加できる企画とした。内容は次の通りである。1) 妊娠期の超音波診断、2) 妊娠期の保健指導、3) 分娩監視装置の見方、4) アクティブパース、5) 母子愛着形成、6) 乳房管理、7) 新生児蘇生法、8) マタニティビクス、アフタービクス、ヨガ

14) 妊娠期診断学実習

1年次 後期

林 猪都子、宮崎 文子、梅野 貴恵、関屋 伸子

生野助産院、アルメイダ病院、サエラ助産院、貞永産婦人科医院に4名、渡邊助産院、掘永産婦人科医院に3名、大分県立病院周産期母子センターに7名配置して、妊娠期の経過診断をするために超音波診断の演習（19日間）を行った。

15) 妊娠褥婦保健指導実習

1年次 後期後半

宮崎 文子、林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子

妊産婦の安全生・快適性を踏まえて、ニーズに寄り添う妊婦・産婦・じょく婦の一貫した継続支援及びより高度な保健指導技術の獲得・充実をねらいとした。実習施設の外来において1学生3例の正常妊産婦の継続事例（妊娠から産褥まで）を受け持ち、それぞれ事前に妊婦・家族の情報を収集して、実際に母子の健康診断に基づき個別性のある教育支援・ケアの計画・立案・実施を行い、保健指導充実のための訓練を行った。評価は出席状況、記録物、レポート等を考慮した。

16) NICU実習

1年次

梅野 貴恵、軽部 薫、宮崎 文子

今年度初めて大分県立病院総合周産期母子医療センターNICUで実習を行った。7名の学生を2グループにして、1グループ2週間の実習を行った。

実習は、学生に1名のハイリスク新生児を受け持つようにして、児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導も実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児や極低出生体重児の看護援助も見学、一部実施した。産科とNICU、地域の産科施設とNICUとの連携も見学により理解を深めることができた。学生は、母子分離された両親への愛着形成促進のためのケアや助産師として妊娠中からの保健指導の重要性を学ぶことができた。

17) 看護アセスメント学特論

1年次 後期前半

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、濱田 佳代子

4名の教員はそれぞれ集中講義形式で行った。藤内：学生の関心あるフィジカルアセスメントをテーマとし、講義を行い、後半はディスカッションおよび演習を行い、臨床場面で応用できる能力の向上につなげた。高野：前半は小児のフィジカルアセスメントについて講義した。後半は小児看護における看護過程の展開について講義して、現状についての討論を行い理解を深めた。濱田：前半は、大学院生が自分の研究テーマに関連した内容を選択し、選択したテーマに関して文献検討に基づきプレゼンテーションを行った。後半は、教員が大学院生のプレゼンテーション内容を、看護アセスメント・看護診断の側面から考察し、大学院生の看護アセスメント能力の向上に資するように、講義およびディスカッションを行った。伊東：神経難病に関する知識を概括し、その知識に基づく看護判断について講義を行った。後半は神経難病患者、とりわけ筋萎縮性側索硬化症患者の在宅での療養生活についてディスカッションを行った。

18) 精神保健学特論

1年次 前期前半

影山 隆之、大賀 淳子

前半では、履修者が少ないことから履修者の関心に合わせた内容を設定し、ストレス、睡眠、自殺といった最近の精神保健のトピックスについて紹介・討論した。

後半では、精神保健に関連する看護理論を取り上げ、履修者による発表および討論を行った。

19) 基盤看護学演習

開講せず。

20) 老年看護学特論

1年次 夜間：6月～7月

大下 敏子、小野 美喜、福田 広美、影山 隆之、桜井 礼子、安部 眞佐子、佐藤 豊秀、宮成 美弥、木本 ちはる、安藤 由紀子、上野 千賀子、佐藤 重行

老年期において、加齢に伴って様々な形で生じてくる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題や加齢に伴う疾患や生活習慣病に起因する高齢者特有の疾患への理解を深め、疾患や健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法及び疾病予防・健康増進について学習するため、老年看護の概要、高齢者、家族、地域社会の特性と実態、老年NPの役割、介護保険等の社会資源活用と多職種連携、老年の栄養管理、嚥下とリハビリテーション、創傷処置、褥創処置、急性期・回復期にある老人への看護実践、慢性疾患をもつ老人への看護実践、在宅酸素療法を行う老人の看護、精神と行動の疾患と症状をもつ高齢者の看護、終末期にある老人への看護実践、老年看護における倫理、老年期の疾病予防・健康増進などについて、本学教員および外部講師によりそれぞれ教授した。例えば、急性期・回復期にある老人や慢性疾患を持つ老人への看護実践では、心不全の高齢者事例を用いて看護モデル、医学モデルからとらえたアセスメントをディスカッションした。学生それぞれの活動領域の知識や体験をいかした意見交換ができ、NPとしての視点も明確にしていくことができた。また、「脳・神経系、感覚器系、腎・泌尿器系、内分泌・代謝系、消化器系などの病気と症状をもつ老人の看護」では、事例を通して医学と看護モデルについて学習を行った。学生は、事例に必要なとされるアセスメントを考え、診断や治療、また理論をベースにした看護介入についてグループディスカッションおよびプレゼンテーションを実施した。老年看護の概要の中では、日本における高齢者、家族、地域社会の特性と実態を具体的に教授し、それに関連して老年NPの役割と資質についてディスカッションを行い、学生はNPに求められる役割と資質について理解を深めることができた。外部講師を招くことにより、それぞれの分野の老年看護についての具体的な知識や技術、資源の活用などの学びを深めることができた。しかし、この科目は、教える内容が多い割に時間数が少ない。NP学生へは的を絞った内容にすることにより学習効果が上がると考えられる。次年度より、外部講師との事前連絡をより密にし、授業内容についてよく話し合うようにしていくつもりである。

21) 成人看護学特論

1年次 後期後半

太下 敏子、小野 美喜、福田 広美、伊東 朋子

成人期の発達課題や健康問題への理解を深め、健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法及び疾病予防・健康増進について探究するため、成人看護領域の教育・実践・研究の変遷と動向、成人看護領域の研究・実践のための基本概念、成人看護における医療と福祉の制度と体制、急性期・回復期にある成人への看護、慢性疾患をもつ成人への看護、慢性疾患をもつ成人への看護、終末期にある成人への看護に関して本学教員が教授した。看護領域の教育・実践・研究の変遷と動向に関しては、成人期の看護に焦点を当て、現在までの研究や教育の動向を文献から読み解いた。学生が教育に携わる者であったため、リアルタイムで体験している教育を通じたディスカッションとなり、学びを深めることができた。慢性疾患をもつ成人への看護では、Chronic Illness Impact and Interventionの講読を通して学習を行った。終末期にある成人への看護では、事例を用い学生がプレゼンテーションをし、ディスカッションを行った。また、終末期看護における霊的な面での看護にも着目し講義を行った。海外の文献をもとに終末期の患者と医師・看護師とのコミュニケーションおよび告知に関する看護について学習する機会を作った。成人看護における医療と福祉の制度と体制に関しては、難病医療専門員を外部講師として招き、難病患者医療ネットワークについての現状と課題についての講義の機会を得た。

22) 生殖看護学特論

開講せず。

23) 発達看護学演習

開講せず。

24) 地域看護学特論

開講せず。

25) 国際看護学特論

S. W. Lee

Course Description:

This course is an introduction to the global perspectives of health and nursing issues using some nursing theories. The nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing for analyze and evaluation of the international nursing and health are examined.

Course content:

1. Introduction to Advanced International Nursing.
2. International Nursing and Trans-cultural Nursing
3. Understand the nature of International Nursing / Health.
4. International Nursing' s scientific inquiry and explanation
5. The components of International Nursing and Health.
6. Understand philosophical controversies in current thought on International nursing science and nursing knowledge development
7. Understand Trans-cultural Nursing
8. Apply Nursing Theories to International Nursing
9. Understand the Criteria of Theory Evaluation
10. Apply criteria of theory evaluation to theories used in international nursing
11. Understand alternative strategies for developing international nursing
12. Understand and evaluate globalization and cooperation network for International health and nursing
13. Critics globalized health and nursing
14. Japan Nursing and International Nursing
15. Development on the international nursing in Japan
16. Evaluation the course and a blueprint for the future of international nursing

Required Textbooks:

Fawcett, Jacqueline (2005). Contemporary Nursing Knowledge: analysis evaluation of nursing models and theories (2nd ed.). Philadelphia: F. A. Davis Comp.
Alligood, M.R. and Tomey, A.M. (2006). Nursing Theory: Utilization & Application (3rd ed.) St. Louis, Mosby
Leininger, M(1995). Transcultural Nursing: Concepts, Theories, Research & Practices(2nd. Ed.) New York, McGraw-Hill, Inc.
Andrews, M.M. & Boyle, J. S. (1999). Transcultural Concepts in Nursing Care (3rd. ed.)Philadelphia, Lippincott
*Kim, S.J. and Yatsushiro, R. (2006), International Nursing(1st. ed.), Seoul, Soo-moonsa Com.
*Optional textbook

Readings:

Articles listed in the weekly reading sections of the course outline will be in the Library

26) 放射線保健学特論

開講せず。

27) 広域看護学演習

開講せず。

28) NP論

1年次 前期

草間 朋子、林 猪都子、桜井 礼子、高野 政子、Yoshiko.S.Leibowitz

米国および韓国から学ぶNPの歴史の変遷、NPの役割と実践活動と、日本におけるNPの必要性和教育カリキュラム、求められる能力について教授し、今後の自分たちの目指すNPの活動の場と実践内容について検討した。

29) フィジカルアセスメント学特論

1年次 前期後半

藤内 美保、濱田 佳代子

NP養成コースのために今年初めて開講した科目である。対象者の身体的状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身に付けるために、講義・演習の形式で行った。全身・頭部・頸部、胸部の肺・胸郭および心臓・血管系、腹部、直腸・肛門、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に行った。演習では、フィジカルアセスメントモデル、眼や耳の異常モデルなど多くのシミュレーションが準備できていたので、実践的な演習を行うことができた。最終日は総合試験として筆記試験および実技試験を行った。

30) 臨床薬理学特論

1年次 後期後半

吉田 成一、伊東 弘樹、佐藤 雄己

NP養成コースのために今年初めて開講した科目である。診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。一般名の理解を徹底することが次年度以降の課題と考える。

31) 診察・診断学特論

開講せず。

32) 病態機能学特論

1年次 前期

菅野 公浩、市瀬 孝道、卜部 省吾

病気を理解するための基礎的な知識を整理する為にヒトの体の仕組みや機能について講義した(菅野)。生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の疾患についてハンドアウトを用いて詳しく講義した(市瀬)。また、病理標本の作成法、病気の肉眼標本やプレパートをを用いた顕微鏡観察を行い、炎症や種々の臓器に発生したがん細胞やがん組織を理解させた(卜部)。

33) 健康増進科学特論

開講せず。

34) 看護管理学特論

1年次 前期後半

粟屋 典子、桜井 礼子、黒田 なおみ、小野 千代子

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる理論とその展開について学ぶ。具体的な管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能について考える。

講義の概要は以下のとおりである。

1. 看護管理理論
2. 管理プロセス
3. 保健・医療・福祉に関する法制度(1)
4. 保健・医療・福祉に関する法制度(2)
5. 保健・医療・福祉施設における看護組織
6. 人的管理のあり方
7. 看護の質評価の方法論(1)
8. 看護の質評価の方法論(2)
9. 看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方
10. 看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方
11. 看護職の業務管理のあり方(1)
12. 看護職の業務管理のあり方(2)
13. 看護業務と安全管理
14. 看護職の専門性と倫理的責任
15. ディスカッション
16. まとめ(評価)

35) 看護コンサルテーション論

開講せず。

36) 看護教育特論

開講せず。

37) 看護理論特論

1年次 前期前半

S. W. Lee, M. Tonai, K. Matsuo

Course Description:

This course is an introduction to the nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing. Origins of and strategies for theory development in nursing are examined. Analysis of the role of theory in nursing practice and research are explored.

Course objectives:

1. Explains the nature of scientific inquiry and explanation
2. Explains how the components of a theory are related and function in description and explanation.
3. Explains philosophical controversies in current thought on nursing science and nursing knowledge development
4. Applies criteria for the evaluation of theories and conceptual models used in nursing
5. Evaluates alternative strategies for developing nursing sciences.

38) 看護倫理学特論

1年次 後期

平野 互、小野 美紀、関根 剛

受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、12回の講義と3回の事例演習を行い、さらに最終回には事例報告による評価を行った。講義は、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」・「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の基本原則と思考方法」・「人間の尊厳と患者の権利」・「個人の尊重と自己決定権・プライバシー権」・「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は3名の教員が出席して、評価を行った。

選択科目であるため、受講生が少ないことが課題であり、教育上履修が必要と考えられる課程の学生については、履修促進のための対応が必要と思われる。

39) 看護政策論

開講せず。

40) 原書講読演習

1年次 前期

宮内 信治、李 笑雨、田中 美樹

世界保健機関(WHO)によるプライマリヘルスケアに関するアルマ・アタ宣言の文章とAdvanced Nursing Practice (Schober & Affara, 2006)を教材とし、高度な看護を提供する看護師についての概略理解を深めることを目的に、英文法の解説と復習、英文解釈演習を宮内が行った。李は新しい看護職域に進出した際に看護職者が直面するReality Shockについて、その内容および対処法などを解説し、学生間で自らの体験をもとに討論を行わせた。田中は、Marie-Anne Brown教授(シアトル大学)らの学術文献を用い、研究論文の構成に則してその内容を批評検討する手法を教授し、演習を行った。学生間の英語習得レベルの差を考慮して、個別に作業や理解の進捗を確認する方法を採用し、同時に、本講義終了後の自己学習を促すべく基本的な文法内容や学習方法を提示した。選択科目ではあるが、今後の世界の看護における動向を把握し日本における看護に反映していくための情報収集理解能力の醸成のために、多くの学生が受講することを期待する。

41) 生体機能学特論

開講せず。

42) 人間関係学特論

1年次 前期

関根 剛、吉村 匠平

受講者は、全員助産学コースの学生だった。このため、受講者のニーズに合わせるため、学生と協議し、講義内容の見直しを行った。吉村は、愛着理論、愛着の測定方法、愛着の形成プロセス、投影法を用いた心理アセスメントについて、自己決定理論に基づく動機付けについて講義した。また、コミュニケーションスキルのアウトラインとロールプレイ、モンスターペイシエントなどと言われるような患者への対応方法について講義した。

43) 保健情報学特論

開講せず。

44) 看護科学研究特論

1年次 前期前半

佐伯 圭一郎、稲垣 敦、伴 信彦、田中 美樹

看護研究の理論と手法を具体的な事例にしたがって教授した。履修者の研究計画と関連付けて、科学的な研究の立案と遂行について指導した。

45) 研究のすすめ方

1年次 前期前半

佐伯 圭一郎、影山 隆之、高野 政子、品川 佳満

EBNの基礎となる看護研究の理論と手法を概説し、研究を進める上で重要な技術的側面について教授した。7名の教員がそれぞれの専門に基づいて講義を行った。

- | | |
|------------------|--------|
| 1. 看護研究の意義 | 佐伯 圭一郎 |
| 2. 調査研究の進め方 | 江藤 真紀 |
| 3. 実験研究の進め方 | 吉武 康栄 |
| 4. 文献研究の進め方 | 高野 政子 |
| 5. 研究のまとめ方・発表の方法 | 林 猪都子 |
| 6. 文献検索の方法 | 影山 隆之 |
| 7. 研究の倫理と安全 | 平野 互 |
| 8. データ解析の基礎 | 佐伯 圭一郎 |

46) 課題研究 (NP)

1年次

大下 敏子、小野 美喜、福田 広美、桜井 礼子、藤内 美保、関根 剛、江藤 真紀、伴 信彦、吉田 成一

NP学生が携わっている看護や実習などの実践を通して課題を探究し、問題解決能力および論文作成の能力をつけるために本年前期より課題研究に取り組んでいる。学生それぞれに担当教員1名、副指導教員2名が割り当てられ、課題研究のテーマと内容について指導を行った。

47) 課題研究 (助産)

1年次

宮崎 文子、林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、稲垣 敦、安部 眞佐子、品川 佳満、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、小嶋 光明、吉村 匠平、菅野 公浩、中山 晃志

課題研究選択者は7名である。

それぞれの院生の助産実践に関係する課題をあげ、テーマの明確化、課題研究の方法及び研究計画について指導・助言した。

48) 特別研究

1～2年次

各指導教員

2名が修士論文を提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

1) 衛藤 菜々恵

産褥期入院中における上の子どものファミリールーム宿泊による母親への影響

主指導教員：林 猪都子、副指導教員：関屋 伸子、品川 佳満

2) 福田 晴美

産科診療所における母乳育児推進の方策 -WHO/UNICEFの「母乳育児成功のための10カ条」の視点から-

主指導教員：宮崎 文子、副指導教員：梅野 貴恵、佐伯 圭一郎

3-6-2 博士（後期）課程

1) 生命病態学特論

開講せず。

2) 健康増進科学特論

開講せず。

3) 保健情報科学特論

1年次 前期

佐伯 圭一郎

研究実践におけるデータ収集と分析の技法について、特に統計ソフトウェアの利用とデータ管理の技法について、1名の履修者の研究課題と関連付けながら具体的に教授した。

4) 精神保健学特論

1年次 前期

影山 隆之

履修者が少ないことから履修者の関心に合わせて内容を選定し、自助グループ活動、および精神保健学の研究方法について、文献を紹介し討論を行った。

5) 放射線保健学特論

開講せず。

6) 看護基礎科学演習

開講せず。

7) 生活支援看護学特論

開講せず。

8) 看護管理学特論

開講せず。

9) 生殖看護学特論

1年次 前期後半

宮崎 文子

リプロダクティブヘルス、ウイメンズヘルスの研究の方法論及び性に関する基本的考え方を国際的視野に立って考究し、総合的な視点から高度な専門知識と看護実践能力を併せ持つケアが提供できることを狙いとした。ここでは、望まない妊娠の防止に関する研究を取り上げた。

10) 発達看護学特論

開講せず。

11) 国際看護学特論

開講せず。

12) 看護専門科学演習

開講せず。

13) 特別研究

1～3年次

各指導教員

1名が博士論文を提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

梅野 貴恵

母乳育児と更年期症状との関連に関する研究

(英文) A study on the association between climacteric symptoms and breast-feeding

主指導教員：宮崎 文子、副指導教員：甲斐 倫明、草間 朋子

3-7 ボランティア活動

1) 第14回日本ALS協会大分県支部総会、第33回久住コロニー収穫祭

伊東 朋子

3年次生：越智 巧太郎、鈴木 香奈美、田中 美智子

1年次生：徳丸 裕恭、林 真梨子、樋口 令奈、桎木 夢加、海山 絵理、鈴木 綾、鈴木 温子、竹内 亜紀、甲斐 小妃江、川添 洵子、竹井 大貴、松下 直旦、宮之原 未来

平成20年5月25日に実施された第14回日本ALS協会大分県支部総会でのボランティアとして、患者・家族のつどいに参加し、車いす介助や家族の支援に関わった。

平成20年11月3日に実施された知的障害者授産施設福祉農場コロニー久住で行われた第33回収穫祭でのボランティアとして物品販売や障害者支援などを行った。

2) 博愛ふれあいフェスタ2008

井伊 暢美

4年次生：前田 結佳理

3年次生：越智 功太郎、佐藤 里奈、鷹取 希美、竹下 亜希子

平成20年6月14日に博愛病院・博愛診療所での「博愛ふれあいフェスタ2008」に参加した。利用者の誘導や介助と、音楽にあわせたバルーンアートの上演を行った。

3) 大分県自閉症協会 夏季療育キャンプ

平野 互

4年次生：田口 美和子

3年次生：越智 功太郎、鷹取 希美、竹下 亜希子

平成20年8月2日と3日の両日、博愛会パルクラブ（久住）において開催された「大分県自閉症協会 夏季療育キャンプ」にボランティアとして参加した。学生は自閉症児とペアを組み、食事介助、レクリエーションに取り組みながら、保護者が行政担当者との協議を行う時間帯にはレスパイトケアを行って、キャンプの運営を支えた。

4) 第23回Young Wing Summer Camp

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛

4年次生：斎藤 由貴、脇屋 里奈

3年次生：山田 剛弘

1年次生：安部 早紀奈、穴見 美穂、衛藤 裕美、渡辺 希、宮本 義定

サマーキャンプは小児の糖尿病をもつ子どもを対象とするキャンプでそれを支援するボランティア活動を本学の学生は大分大学、別府女子短大等の大学や教職員と協力して準備を行い成功させた。本番は8月7日～8月12日まで実施されたサマーキャンプであり、その開催に向けて学生は打ち合わせ等隔週1回の会議を開催している。教員は準備打ち合わせや山登り、最終日の発表会に参加して学生を支援した。

5) こどもの健康週間2008

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛

4年次生：斎藤 由貴、村谷 淑真、布施 芳史

3年次生：越智 功太郎

毎年10月10日の体育の日に合わせて開催している。障がい児やその家族も戸外に出て遊びを楽しんでもらうという企画である。小児科医会が主催し小児保健協会の共催というものである。学生と教員は当日ゲームコーナーの担当でボランティアとして活動した。

4 学内セミナー

4-1 100万語英語多読講座

英語教育の一環として授業に取り入れている英語多読について、内容の紹介と普及を図るため、若葉祭とオープンキャンパスにて公開講座を実施した。若葉祭については5月17日（土）、18日（日）両日、午前・午後それぞれにて2セッションずつ合計4回、オープンキャンパスでは7月20日（日）午前・午後に1セッションずつ合計2回、実際に多読用教材を来訪者に公開し、英語多読を体験してもらった。11月15日（土）に行われた創立10周年記念式典においても、言語学研究室の教育活動ならびに英語多読を紹介するパネルを作成し、オアシスタワーに展示した。

4-2 CALL英語学習システム

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全学生に対し授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を言語学研究室の3名の教員（岡崎 寿子、宮内 信治、Gerald T. Shirley）が運営および実施している。CALLについては、前期は1年次生の必修授業とし、後期は、1年次生も含め他学年の学生・大学院生全てが、自ら自由に英語学習に取り組めるよう配慮し、受講希望者を対象に実施している。受講した学生は、熱心に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

4-3 情報公開・個人情報保護制度研修会

平成21年3月24日の14時から、大分県総務部県政情報課情報公開班の松原主幹を講師に招き、情報公開制度及び個人情報保護制度に関する研修会を開催した。

公文書は原則として公開対象となるため適切な文書管理が必要であること、また、個人情報の漏洩が社会的に問題になっている為、個人情報の管理には十分な注意が必要であることを改めて認識した。

4-4 ファカルティ・ディベロップメント（FD）講演会

この企画は、本学教員の資質開発（ファカルティ・ディベロップメント：FD）を目的として、自己評価委員会が推進した組織的活動の一環である。平成21年3月2日（13時45分～15時45分）に、講師として千葉大学看護学部教授の舟島なをみ氏を招き、本学23講義室において開催した。講演は「看護教育における授業評価 ― 実習に焦点を当てて ―」というテーマで、パワー・ポイントを用いた講義形式で行われ、参加者は44人であった。講演後のアンケートの集約を行ったところ、「論理的、具体的な説明で理解しやすく、内容の整理ができた」「今後の教授活動の参考になり、大変勉強になった」「自分の実習指導を振り返り、評価の意味などを再度確認できた」「研究・実践を積んだ先生による価値ある講義だった」「自分の意識改革が必要だと感じた」「やる気になった」などの感想が多く寄せられ、教員としての資質向上への関心や意欲の高まりを示していた。今後も、教育の質の改善に結び付けるための取り組みの一層の充実に努めていく予定である。

5 学内プロジェクト研究

5-1 健康増進プロジェクト

研究者 稲垣 敦（健康運動学）、桜井 礼子（保健管理学）、平野 互（保健管理学）、朝見 和佳（保健管理学）、江藤 真紀（地域看護学）、木下 結加里（地域看護学）

本プロジェクトの目的は、「健康増進に関する研究とそれらの知見に基づいた、あるいは広く健康増進に関する地域貢献を行うこと」である（平成20年度第1回プロジェクト会議議事録）。平成20年度の年度目標は、「高齢者の健康増進プロジェクトを本学の地域貢献事業として進め、その活動を大学イベントやマスコミを通して紹介する」および「高齢者の健康増進プロジェクトでは、新たな視点から高齢者の健康増進に役立つ研究に取り組む」であった。今年度の実施した事業を以下に示す。

- 1) 研究：転倒と足関節柔軟性および土踏まずの関連性
- 2) 研究：高齢者の転倒と生活環境および生活習慣の関連性
- 3) 研究：高齢者の閉じこもりの実態と身体的・心理的・社会的特徴
- 4) 研究：高齢者の健康関連体力の経年変化と生活活動度の関連性
- 5) 研究：動作解析による起き上がり動作と腹筋の活動の関連性
- 6) 研究：科学的データに基づいた目的別ウォーキングコースの提案
- 7) 研究：ヨガの介護予防効果の検討
- 8) 地貢：介護予防ボランティア育成研修会を県内各地で開催（東部保健所、竹田市・九重町保健福祉センター、大分県総合社会福祉会館、大分県教育会館、大分市社会福祉センター、佐伯市三余館、コンパルホールほか）
- 9) 地貢：トリニータHG観客の健康チェックの実施（九州石油ドーム、4/26、7/12、11/9）
- 10) 地貢：トリニータ介護予防教室に協力（佐賀関、9/29～3/2、隔週）
- 11) 地貢：ヨガ教室の開催（本学体育館、9/30、10/7、10/14、10/21、10/28）
- 12) 地貢：転倒予防教室の開催（野津原地区、4回）
- 13) 地貢：第35回富士見が丘団地運動会で健康チェックを実施（横瀬小学校、10/26）
- 14) 地貢：第1回ふじみん里まつりで健康チェックとパネル展示を実施（トキハインダストリー富士見が丘団地店駐車場、11/23）
- 15) 地貢：中津市の国保ヘルスアップ事業の第三者評価を受託（8/20）
- 16) 地貢：介護予防運動標準プログラム（大分県版）の作成（県福祉保健部に協力）
- 17) 地貢：介護予防メニューの手引き作成・配布（10,000部）
- 18) 地貢：お元気しゃんしゃん体操のポスター作成・配布（5,000部）
- 19) 広報：お元気しゃんしゃん体操の新聞記事（合同新聞6/15）
- 20) 広報：若葉祭（5/17-18）、地域ふれあい祭（11/15）で活動をパネル展示

5-2 NPの実践活動がもたらす保健医療への効果

研究者 大下 敏子（成人・老年看護学）、藤内 美保（看護アセスメント学）、江藤 真紀（地域看護学）、小野 美喜（成人・老年看護学）、甲斐 倫明（環境保健学）、桜井 礼子（保健管理学）、高野 政子（小児看護学）、林 猪都子（母性看護学・助産学）、福田 広美（成人・老年看護学）、宮内 信治（言語学）、李 笑雨（国際看護学）、草間 朋子（学長）

韓国におけるNPおよび保健診療員の活動の実際を視察し、その役割と課題を学ぶ。またNPおよび保健診療員の受けた教育、活動の実際について調査を行い、NPと保健診療員の違いや連携のしかたについて調査し、日本におけるNPの活動やNP教育に活かすことを目的とする。調査期間：平成20年9月16日～9月23日。NPと保健診療員の役割の違いについては、NPは病院外来、病棟での包括的なフィジカルアセスメントや入院・退院調整、コミュニティでの家庭訪問、高度な看護ケアなどを行っている。一方、保健診療員は軽微な症状や慢性疾患の検査、診断、治療、管理といった活動をし、処方権や検査を実施できるという役割があった。この背景には、1970年代無医地区が多く、住民は満足いく保健医療サービスを受けることが困難であった。そこで1980年に過疎地域におけるヘルスケアに関する農村漁村支援法という法律によりが誕生した。こういった国民の視点にたった職種の誕生の意味を考えることが重要である。またそれぞれの職種の専門性や特殊性を生かし、連携協働することで住民への安全で安心な医療保健サービスを提供することが求められていると考える。

6 先端研究

6-1 ホームページを介した食物アレルギー相談システムの構築

研究者 安部 眞佐子（生体科学）、佐伯 圭一郎（健康情報科学）、高松 伸枝（別府大学食物栄養科学部）

食物アレルギーは乳幼児の5%に発症し、適切な食事介入が無いとアレルギーの悪化や成長障害も起こりえる。このため、早期に食事介入が必要であるが、現在の保険でカバーされる食事指導は時間の制限もあり有効な介入が行いにくい。また、多数の乳幼児が通院する小児科や皮膚科は小規模であり管理栄養士が常勤でないため、指導を受けられない状況にある。さらに、疾病保有者が散在するために施設を固定した介入が行いにくい。このため、どこからでもアクセス可能なホームページを作り、適切なアレルギー対応食に関する知識を集約し、相談業務を行うシステムを構築することとした。以下に活動の内容を記載する。

1. 携帯電話、パソコンでアクセス可能な食物アレルギーのホームページ（HP）を作成し、食事相談を受けることとした。HPの周知は1歳6か月健診受診保護者へのアンケート配布時の説明文書にHPアドレスと携帯電話コードを記載する方法をとった。HP情報掲載については、県内14市町役所の母子担当者に直接説明し、口頭での許可を得た。アンケートは2008年8月～11月まで配布した。HPは同年8月～2009年1月まで運用し、アンケート配布終了後2か月で閉鎖したが、食事相談はなかった。コンテンツは、公立おがた総合病院拜郷敦彦医師、在宅管理栄養士安部絵里の協力を得た。イラストは、大分県立芸術文化短期大学根之木英二先生のご指導のもと、2人の学生に協力いただいた。また、レイアウトは本学卒論生が担当した。実際に食事指導にあっている管理栄養士数人にHPの感想を聞いたところ、熟読すればわかりやすいが、一般向けには難しすぎるとのコメントをいただき、読みやすくするテクニックの欠如を実感した。患児の保護者との信頼関係を構築することができなかったことについては、バーチャルなHPの限界に加えて、疾病に関するHPであったのに専門医が不在であったことを原因としてあげたい。

2. 保育所向けサポート体勢を構築することとした。9月の大分県保育連合会主催給食担当職員研修会にて、保育所における食物アレルギーの対応（安部眞佐子）、アレルギー関連食品の選び方（高松伸枝）について研修を担当した。11月にわさだ公民館で2回給食担当者への調理講習会を企画し高松伸枝と別府大学4年生を講師として開催した。研修会とHPの相加効果によって、スムーズに調理講習会を開催することができた。また、1月に1個対策メニューを掲載して、メーリングリストを運用し、保育所向けにはHPが機能する事ができた。

以上のような活動の結果、講習会をキーとしてHPを補足的に使う方法がよいと考えた。また一般の母親に対して食物アレルギーという狭い視点からのアプローチは、専門医不在の組織としては無理がある。12月に、食物アレルギーについての栄養指導ガイドラインが学会から出され、指導経験の少ない管理栄養士でも、指導のハードルが低くなった。このような背景から、今後は、妊娠期からの母親を対象とした調理講習会を通して栄養指導を行うシステムに移行し、その中で食物アレルギーの食事指導をすること、及び、保育所向けコンテンツはそのまま継承することとして、新たな組織で準備を開始している。また、保育所給食担当者をキーとして患児保護者とコンタクトできるシステムも構築したい。当初申請時に予定していた栄養士の再教育については、予算申請の段階で半額のみ認められたため、事業としては成立せず、今後の課題である。

6-2 インターネットを使った病院内学級と地域の学級を結ぶシステムの開発

研究者 高野 政子（小児看護学）、藤井 弘也（大分大学教育福祉科学部）、村上 則子（大分県立病院看護部）

本研究の目的は、1. 院内学級に在籍中の患児に対して少しでも教室と同じ感覚を提供できるように、病院内と外を結ぶTV会議形式の環境システムを構築し、双方向通信による授業展開の可能性を検討する。2. このシステムの利用による対象児童の心理・社会的効果についても明らかにすることである。本年の取り組みはTV会議システムを構築することの手順が整い、1事例の男児とその家族と対象とすることができ、現在原籍校と接続して使用中である。この病院内学級と学校を結んで授業を受けることの長所と課題が明らかとなった。今後も入院は継続するので、それに合わせ継続する予定である。今後はさらに事例数を増やすことを目指している。

7 奨励研究

7-1 低代謝回転を伴う透析骨病変の骨質に関する研究

研究者 岩崎 香子 (生体科学)

慢性腎臓病患者の代表的な合併症である骨ミネラル代謝異常は骨の病変を生じるだけにとどまらず、長期的には心血管系の石灰化を介して、患者の生命予後に大きく影響する。透析骨病変 (Renal osteodystrophy: ROD) はその病理組織所見によりいくつかのタイプに分類され、現在は無形成骨症 (Dynamic bone disease: ABD) がRODの大半を占める。ABDの特徴として骨芽細胞機能低下による極端な骨形成低下と、これらに起因して骨のカルシウム緩衝容量の減少をもたらす高カルシウム血症を生じやすいこと、異所性石灰化の誘導、他の骨病変に比べ骨折リスクが高いこと、一度骨折すると治癒が遅延することが危惧されている。しかしながら、著明な骨密度減少が見られないABDにおいて骨折リスクが上昇する原因は不明である。一方、材料力学の分野で用いられる赤外吸収スペクトル (FT-IR) やラマン分光法に代表される振動分光学的解析が骨の分野でも応用され始めている。そこで本研究ではABDモデルラットの大腿骨および脛骨を対象として、骨質の変化に関して検討を行った。その結果、ABDラットではコラーゲン構造の変化が見られ、成熟遅延が推察された。また貯蔵弾性率が低下しており、貯蔵弾性率は腎機能と関連が見られることが明らかとなった。これらの結果より骨密度の低下していない低代謝回転型の骨病変ではコラーゲン成分の変化に関連して骨強度が低下する可能性が示唆された。

7-2 医療職者が使用する速乾性擦式手指消毒薬がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響

研究者 定金 香里 (生体反応学)、伊東 朋子 (基礎看護学)、市瀬 孝道 (生体反応学)

最近、医療現場では素早く消毒でき、作用が持続する速乾性擦式手指消毒薬の使用が推奨されている。しかし、手に液を擦りこみ拭き取らずに使用するため、アトピー性皮膚炎の悪化が懸念される。本研究では、モデルマウスを用いて、速乾性擦式手指消毒薬の主成分、0.2%塩化ベンザルコニウム、0.5%グルコン酸クロルヘキシジン、80%エタノール、10%ポビドンヨードの4種の液を毎日、マウスの皮膚炎発症部位に塗布し、アトピー性皮膚炎への影響を調べた。その結果、塩化ベンザルコニウム、エタノール、ポビドンヨード塗布群は、ダニ抗原単独群よりも有意な皮膚症状の増悪を認め、血清中の総IgE、抗原特異的IgG1は増加傾向を示した。一方、グルコン酸クロルヘキシジン群は、ダニ抗原群に対し症状軽減およびIgE値の減少傾向を示した。皮下組織中のマスト細胞数は、塩化ベンザルコニウム、ポビドンヨードを塗布した群でダニ抗原群に比し有意に増加し、特に脱顆粒した細胞の増加がみられた。血清中ロイコトリエン産生は塩化ベンザルコニウム、ポビドンヨード、次いでグルコン酸クロルヘキシジン、エタノールの順で増加した。Th2型のサイトカイン、IL-13産生は、塩化ベンザルコニウム、ポビドンヨード群で増加した。以上の結果から、0.2%塩化ベンザルコニウム、10%ポビドンヨード、80%エタノールの塗布はマウスのアトピー性皮膚炎様症状を増悪することが明らかとなった。その強さは塩化ベンザルコニウムで最も強かった。塩化ベンザルコニウム、ポビドンヨードは、マスト細胞を活性化させ、ロイコトリエンの放出を高めることによって症状を増悪させる作用があることが示唆された。0.5%グルコン酸クロルヘキシジンは、IgE産生の低下により症状が軽減したことが示唆された。アトピー性皮膚炎を発症した医療職者は塩化ベンザルコニウム、ポビドンヨード、エタノールを含む速乾性擦式手指消毒薬の使用を控えた方が良いことが示唆された。

7-3 カーボンナノ粒子の胎盤通過性の検討

研究者 吉田 成一 (生体反応学)

雄性マウスにカーボンナノ粒子を投与すると雄性生殖機能に悪影響が生じることが明らかにされている。さらに妊娠マウスにカーボンナノ粒子を投与すると、出生した雄性マウスの生殖機能に悪影響が生じることも明らかにした。しかし、胎仔期カーボンナノ粒子曝露を行い、出生後の雄性生殖機能への悪影響はカーボンナノ粒子が胎仔に直接影響を与えたのか、母獣にカーボンナノ粒子が影響を与え、その結果生じる間接的な影響なのか明らかにされていない。本研究では、カーボンナノ粒子を妊娠マウスに気管内投与し、胎仔及び雄性出生仔の組織中の粒子の有無を電子顕微鏡で解析し、カーボンナノ粒子が胎盤を通過するか検討した。

粒径14nmのカーボンナノ粒子を0.05%Tween80含有生理食塩水に懸濁し、マウス1匹につき0.2mgを1週間に1度、2回気管内投与した(投与日は妊娠7日、13日目)。対照群には0.05%Tween80含有生理食塩水を気管内投与した。2回目のカーボンナノ粒子投与翌日に一部の妊娠マウスを心臓採血屠殺後、胎仔および胎盤を摘出した。摘出した組織を定法に従い電子顕微鏡解析試料とし透過型電子顕微鏡にて解析した。

2回目のカーボンナノ粒子投与翌日に摘出した胎仔の肝臓組織を電子顕微鏡で観察したところ、カーボンナノ粒子の存在は確認出来なかった。母獣に投与した物質が胎仔に移行する場合、主に肝臓や脾臓に取り込まれることから、母獣に経気道曝露を行ったカーボンナノ粒子は胎盤を経由して胎仔に移行する可能性が低いことが示唆された。

7-4 NICU(新生児集中治療室)退院後へき地へ戻る母子に対する育児支援～訪問看護師への教育の必要性

研究者 田中 美樹 (小児看護学)

周産期医療の発達により、低出生体重児の救命率・生存率は急速に上昇している。NICU(新生児集中治療室)退院後、NICUを有する施設が通院圏内にはないまたは、小児科医師不在・少ない地域に戻る母子も少なくない。そこで本研究の目的は、へき地におけるNICU退院児と家族への育児支援の実態調査および、実際に育児支援を行っている看護職者(助産師および看護師)の意識調査を行い、NICUとの連携のあり方や地域で母子を支える看護職者への教育的支援の必要性を検討することであった。同意の取れたNICU看護職者6名に半構成的インタビューを行った。5名の看護職者が経験した事例で、呼吸管理、人工肛門の処置や経管栄養などの医療的処置が毎日必要で、訪問看護師に訪問依頼をしていた。さらに、小児科医が少ないまたは不在の地域でも訪問看護師への依頼が多かった。小児看護を経験したことがない訪問看護師もいたが、今後母子が安心して退院するため、知識や技術の向上が必要であることが示唆された。

7-5 病院内におけるMRSAの存在場所を明らかにするための調査研究

研究者 河野 梢子、神取 美恵子 (看護アセスメント学)

MRSAは1961年以来院内感染の主要菌であるJANIS院内感染対策サーベイランスのデータによると多剤耐性菌感染症の約90%がMRSAによるものであり、専門家の中では「MRSAを制する者は院内感染を制す」とも言われている。また、近年市中感染型MRSAやバンコマイシン耐性腸球菌(VRE)の出現という新しい問題が発生した。これらの耐性菌の拡大を防ぐためにも、今MRSA対策を講じておかなければならない。

そこで、院内の接触感染の現象を明らかにし、感染経路の遮断の示唆を得るために、病棟内におけるMRSAの存在場所を明らかにすることを目的に高頻度手指接触面における環境調査をスタンプ法にて行った。調査対象の菌は黄色ブドウ球菌、MRSAとした。

環境表面21表面のうち黄色ブドウ球菌が検出されたのは9表面であった。そのうち6表面はMRSAであることが確認された。また、菌が検出された検体のうち、吸引器のバルブからは60個/25cm²中というほかの環境表面に比べ明らかに多い菌数が検出された。

7-6 放射線適応応答とバイスタンダー効果の関係

研究者 小嶋 光明 (環境保健学)

低線量放射線の生物応答反応の一つに放射線適応応答 (細胞に低線量放射線を事前に照射しておく、その後の高線量放射線に対して抵抗性を示す現象) がある。本研究では放射線適応応答がどのぐらいの線量の事前照射で生じるのかを調べた。その結果、 $\sim 10\text{mGy}$ のX線を事前に照射することにより、その後の 1000mGy 照射によるp-ATMフォーカス数が有意に減少することが分かった。従って、 $\sim 10\text{mGy}$ の事前照射により放射線適応応答が誘導されることが分かった。また、この放射線適応応答はリンデンを処理すると見られなくなった。従って、バイスタンダー効果が放射線適応応答の誘導に重要な役割を果たしている可能性が考えられた。

以上本研究結果より、バイスタンダー効果と放射線適応応答の関係を下記の様に考えた。細胞は細胞間コミュニケーションを介して細胞集団の恒常性を維持している。そのような環境に細胞は存在しているため、たった一つの細胞でも放射線に被ばくすると、細胞間コミュニケーションを介してダメージシグナルが細胞集団全体に伝達される。これにより放射線に被ばくしていない細胞にも損傷が生じる。これがバイスタンダー効果である。細胞に損傷が生じると、修復機構が活性化する。これが放射線適応応答の誘導につながり、後に同じ損傷が生じてもすぐに修復される。従って、バイスタンダー効果は細胞集団全体に放射線適応応答を誘導させる役割を担っていると考えられた。

8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第8巻1号が3月に刊行された。論文および執筆要項等は本学ホームページ (<http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html>) に公開されており、誰でも無料で投稿および講読することができる。

第8巻第1号

資料

大分県における性・年齢階級別の「病苦」自殺率および「経済・生活苦」自殺率
岡田 麻衣、影山 隆之

トピックス

多発性骨髄腫とサリドマイド
古澤 忍

トピックス

日本における中小規模事業所の産業保健活動の支援の在り方
—産業看護の先進国であるフィンランドの産業保健師の活動実践を参考に—
高波 利恵、ポウラ・ナウマネン、ヘレナ・リッサネン、松尾 太加志

9 業績

著書

大和 英之、岩崎 香子

Annual Review 腎臓, 中外医学社, 東京都, 2009

K. Sadakane, T. Ichinose, K. Fujioka, T. Shibamoto

Functional Food and Health. ASC symposium series 993, Chapter 30: 362-368, American Chemical Society, Washington DC, 2008

M. Kai, N. Ban

Current Risk Estimate of Radiation-related Cancer and our Insight into the Future, in : Radiation Health Risk Sciences, Springer, Tokyo, 2009

関根 剛

Q & A 少年非行を知るための基礎知識 第2章Ⅱ-3 学習理論と認知行動療法 55-58, 明石出版, 東京, 2008

Q & A 少年非行を知るための基礎知識 第4章 Q 2 7 少年鑑別所とはどのような施設ですか 170-171, 明石書店, 東京, 2008

Q & A 少年非行を知るための基礎知識 第4章 Q 2 8 中学校教師ですが、少年鑑別所で生徒に会うことはできるのでしょうか 172-173, 明石書店, 東京, 2008

Q & A 少年非行を知るための基礎知識 第4章 Q 3 1 少年院とはどのような施設ですか 178-179, 明石書店, 東京, 2008

直接支援員初級マニュアル 第1章5-II 臨床心理士の役割 55-61, 全国被害者支援ネットワーク, 東京, 2008

直接支援員初級マニュアル 第2章ロールプレイ 148-160, 全国被害者支援ネットワーク, 東京, 2008

直接支援員初級マニュアル 第4章3 自分に気づく演習(2) 323-328, 全国被害者支援ネットワーク, 東京, 2008

直接支援員初級マニュアル 第5章3 コンピュータ利用の注意 340-347, 全国被害者支援ネットワーク, 東京, 2008

犯罪被害者支援必携 第3章 犯罪被害者支援の実際 I 犯罪被害者支援における関係機関・団体の連携 総論 43-47, 東京法令出版, 東京, 2008

斎藤 益子、宮崎 文子他

助産師 国家試験予想問題 2009, クオリティケア, 東京都, 2008

未来に広がる助産師活動ー私たちだからできることー, MCメデイカ出版, 大阪府, 2008

S. W. Lee

Nursing Communication 6th Ed., Korean Nurses Association Published Company, 2008
Understanding Nursing Theory 3rd Ed, Soomoonsa Published Company, Seoul, Korea, 2008

高野 政子 他

看護・介護・福祉の百科事典, 朝倉書店, 東京, 2008

研究論文

- T. Ichinose, S. Yoshida, K. Hiyoshi, K. Sadakane, H. Takano, M. Nishikawa, I. Mori, R. Yanagisawa, H. Kawazato, A. Yasuda, Shibamoto T. : The effects of microbial materials adhered to Asian sand dust on allergic lung inflammation. , Arch Environ Contam Toxicol. , 55, 348-357, 2008
- T. Ichinose, S. Yoshida, K. Sadakane, H. Takano, R. Yanagisawa, K. Inoue, M. Nishikawa, I. Mori, H. Kawazato, A. Yasuda, T. Shibamoto : Effects of asian sand dust, Arizona sand dust, amorphous silica and aluminum oxide on allergic inflammation in the murine lung, Inhal Toxicol, 20, 685-694, 2008
- K. Inoue, E. Koike, H. Takano, R. Yanagisawa, T. Ichinose, T. Yoshikawa : Effects of diesel exhaust particles on antigen-presenting cells and antigen-specific Th immunity in mice, Exp Biol Med (Maywood)., 234, 200-209, 2009
- M. Ojima, N. Ban, M. Kai : DNA Double-Strand Breaks Induced by Very Low X-Ray Doses are Largely due to Bystander Effects, Radiat. Res., 170, 365-371, 2008
- R. Yanagisawa, H. Takano K. Inoue, E. Koike, K. Sadakane, T. Ichinose : Effects of maternal exposure to di-(2-ethylhexyl) phthalate during fetal and/or neonatal periods on atopic dermatitis in male offspring., Environ Health Perspect., 116(9), 1136-41, 2008
- R. Yanagisawa, H. Takano, K. Inoue, E. Koike, T. Kamachi, K. Sadakane, T. Ichinose : Titanium Dioxide Nanoparticles Aggravate Atopic Dermatitis-Like Skin Lesions in NC/Nga Mice., Exp Biol Med (Maywood)., 234(3), 314-22, 2009
- R. Kanda, S. Tsuji, Y. Ohmachi, Y. Ishida, N. Ban, Y. Shimada : Rapid and reliable diagnosis of murine myeloid leukemia (ML) by FISH of peripheral blood smear using probe of PU. 1, a candidate ML tumor suppressor, Molecular Cytogenetics, 1(1), 22, 2008
- K. Nakagawa, Y. Kanda, H. Yamashita, S. Nakagawa, N. Sasano, K. Ohtomo, K. Oshima, K. Kumano, N. Ban, Y. Minamitani, M. Kurokawa, S. Chiba : Ovarian shielding allows ovarian recovery and normal birth in female hematopoietic SCT recipients undergoing TBI, Bone Marrow Transplantation, 42(10), 697-699, 2008
- H. Fukuda, T. Ichinose, T. Kusama, A. Yoshidome, K. Anndow, N. Akiyoshi, T. Shibamoto : The Relationship Between Job Stress and Urinary Cytokines in Healthy Nurses: A Cross-Sectional Study, Biological Research for Nursing, 10(2), 183-191, 2008
- H. Fukuda, T. Ichinose, T. Kusama, R. Sakurai, K. Anndow, N. Akiyoshi : Stress assessment in acute care department nurses by measuring interleukin-8, International Nursing Review, 55, 407-411, 2008
- H. Fukuda, T. Ichinose, T. Kusma, R. Sakurai : Assessment of Salivary Human Herpesvirus-6 and Immunoglobulin A Levels in Nurses Working Shifts, Asian Nursing Research, 2(3), 170-176, 2008
- N. Ono, S. Oshio, Y. Niwata, S. Yoshida, N. Tsukue, I. Sugawara, H. Takano, K. Takeda : Detrimental effects of prenatal exposure to filtered diesel exhaust on mouse spermatogenesis., Arch Toxicol., 82(11), 851-859, 2008
- 早瀬 麻子、島田 三恵子、乾 つぶら、新田 紀枝 : 妊娠末期から産後の母親の生活リズムと乳児の睡眠覚醒リズムとの関連, 小児保健研究, 65(59), 746-753, 2008
- 早瀬 麻子、島田 三恵子、乾 つぶら、鮫島 道和、保 智己、新川 治子、緒方 敏子、時本 秋江、

保条 麻紀：Actigraphによる妊娠末期から産後4か月の母親の睡眠覚醒リズムの縦断研究, 周産期医学, 38(12), 1613-1617, 2008

乾 つぶら、島田 三恵子、早瀬 麻子、緒方 敏子、時本 秋江、保条 麻紀、新川 治子：妊娠末期から産後4ヶ月の母親の睡眠の質及び睡眠覚醒リズム等の変化, 日本助産学会誌, 22(2), 189-197, 2009

島田 三恵子、竜岡 久枝、乾 つぶら、早瀬 麻子、白井 文恵、足立 智美：乳児の睡眠の発達を促す育児法, 保健の科学, 51(1), 11-16, 2009

岩崎 香子、草間 朋子：軽度な下肢運動による高齢者の踵骨量への影響, 保健の科学, 50(5), 351-367, 2008

梅野 貴恵、宮崎 文子：母乳育児中の女性の血中ホルモンの推移, 母性衛生, 49(2), 327-335, 2008

小西 恵美子、八尋 道子、小野 美喜、田中 真木：看護における徳の倫理の意義, 日本看護科学学会, 28(4), 3-7, 2009

桜井 礼子：韓国ソウル大学校との相互交流研修および国際看護学教育, 看護教育, 50(2) 164-167, 2009

品川 佳満：人工呼吸器を装着した筋萎縮性側索硬化症患者の心拍変動の1/f ゆらぎ特性, 川崎医療福祉学会誌, 18(1), 271-275, 2008

菅野 公浩：TNF-alpha employs a protein-tyrosine phosphatase to inhibit activation of hepatocyte growth factor receptor and hepatocyte growth factor-induced endothelial cell proliferation, Mol Cell Biochem, 332:113-117, 2009

戸崎 美穂、高野 政子：混合病棟における小児看護学実習の学生の学びと課題, 第39回日本看護学会論文集 看護教育, 72-74, 2009

高波 利恵、ポウラ ナウマネン、ヘレナ リッサネン、松尾 太加志：日本における中小規模事業所の産業保健活動の支援の在り方—産業看護の先進国であるフィンランドの産業保健師の活動実践を参考に—, 看護科学研究, 8(1), 14-20, 2009

藤内 美保、宮腰 由紀子、安東 和代：新人看護師の臨床判断プロセスの概念化 —健康歴聴取場面におけるケア決定までの判断—, 日本看護研究学会学会誌, 31(5), 2008

大瀧 慈、佐藤 健一、中山 晃志 他：小人口問題に対応した死亡危険度指標の構成法について, 応用統計学, 37(3), 109-123, 2008

今野 真紀、八代 利香、李 笑雨：大学生の月経に対するイメージとセルフケア, 母性衛生, 49(4) 628-636, 2009

その他の論文

藤内 美保：観察からの情報収集とアセスメント, 看護記録と看護過程, 18(2), 2008

藤内 美保：看護診断に挑戦, クリニカルスタディ, 29(9), 2008

藤内 美保：身体的アセスメントのポイントとケアへの活かし方, 看護きろくと看護過程, 18(5), 2008

藤内 美保、大下 敏子、寺山 庸子、江藤 真紀 小野 美喜 甲斐 倫明 桜井 礼子、高野 政子、林 猪都子、宮内 信治、草間 朋子：新たな看護の創造 ナースプラクティショナーの養成を開始して, Nures eye, 21(4), 49-60, 2008

濱田 佳代子：特集 アセスメントの視点がみえてくる！看護過程もうまくいく！これでわかる！看護診断 看護診断の基礎ちしき, クリニカルスタディ, 29(9), 14-20, 2008

平野 互：医療事故をめぐる患者の権利と医療者の責任, 医学のあゆみ, 227(11), 1002-1004, 2008

桜井 礼子：ウズベキスタンでの看護教育の改善を経験して, 保健の科学, 50(12) 833-838, 2008

大下 敏子、李 笑雨、草間 朋子：韓国における保健診療員とナースプラクティショナーの活動, 看護管理, 19(1) 33-39, 2009

宮崎 文子：中央アジア・ウズベキスタン共和国の母子保健体制と助産師活動, 助産師教育ニュースレター, 61, 8-9, 2008

学会発表

- H. Fukuda, T. Ichinose, T. Kusama, R. Sakurai, K. Anndow, N. Akiyoshi : Assessment of Chronic Stress in Shift-working Nurses by Salivary Human Herpesvirus 6, The 13th Congress of The Asian College Psychosomatic Medicine, Seoul, Korea, 2008. 9
- M. Ojima, N. Ban, M. Kai : Dose-response relationship of initial DNA damages by ionizing radiation is not linear, 国際シンポジウム「放射線発がんに非標的経路は存在するのか？有用な役割を果たす候補」, 京都, 2008. 12
- M. Takano, R Sakurai, I. Hayashi, et all : The first step in the process of establishing a qualification system for NPs in Japan, 5th International Council of Nurses (ICN) International Nurse Practitioner /Advanced Practice Nursing Network (INP/APNN), トロント, 2008. 9
- S. W. Lee, R. Yatsushiro, A. Mori, R. Sakurai : Japanese Nurses' Job Satisfaction- Comparison Study with Korean Nurses, The 13th Congress of The Asian College Psychosomatic Medicine, Seoul, Korea, 2008. 8
- S. W. Lee, J. S. Jin : Development of the Attachment Promotion Therapy Program for the Children with Autism, 19th International Nursing Research Congress: Evidence- Based practice -Globalization of Research through Technology, Singapore, 2008. 7
- S. W. Lee, R. Takanami, T. Kosaka R. Yatsushiro : Survey Study on Nurse's Care Approach to Terminally Ill Children in Korea and Japan, The 13th Congress of The Asian College Psychosomatic Medicine, Seoul, Korea, 2008. 8
- S. W. Lee, R. Yatsushiro, M. Kadota : Nursing students' perceptions toward international health and nursing, The 2008 International Conference: Healthy People for the Healthy World, Bangkok, Thailand, 2008. 6
- Y. Iwasaki, H. Yamato, M. Fukagawa : Kidney Dysfunction Disturbs Collagen Maturation in Adynamic Bone Diseases as Assessed by Confocal Raman Spectroscopy, American Society of Bone and Mineral Research 30th Annual meeting, Montreal (Canada), 2009. 9
- 阿久津 照美、鶴田 信子、関根 剛 : 面接、情報提供および心理教育を取り入れたロールプレイ, 全国被害者支援ネットワーク上級研修, 東京都, 2009. 2
- 安部 眞佐子、高松 伸枝 : 食物アレルギー対応メニューの紹介, 大分県認可保育所調理講習会, 大分市, 2008. 11
- 安部 眞佐子、佐伯 圭一郎、高松 伸枝、安部 絵里、拜郷 敦彦 : 食物アレルギー相談受付, 食物アレルギーに関するホームページ開設, 大分市, 2008. 8
- 安部 眞佐子、山部 直子、堤 ちはる、吉留 厚子 : 母子健康手帳交付時期における妊婦の食物アレルギーに対する意識について, 第45回日本小児アレルギー学会, 横浜, 2008. 12
- 安部 眞佐子、中村 祥子、堤 ちはる、吉留 厚子 : 0市における乳幼児の食物アレルギー児の実態把握と対応, 第 62 回日本栄養・食糧学会大会, 東京, 2008. 5
- 井上 健一郎、小池 英子、柳沢 利枝、市瀬 孝道、高野 裕久 : ディーゼル排気微粒子がアレルギーに関連する免疫担当細胞へ及ぼす影響, 第58回日本アレルギー学会秋季大会, 東京, 2008. 11
- 稲垣 敦 : 温泉ウォーキングの減量法としての可能性, 第67回日本公衆衛生学会総会, 福岡, 2008. 11
- 稲垣 敦 : 森林歩行のストレス低減効果, 日本体育学会第59回大会, 新宿区, 2008. 9

稲垣 敦：登山による筋損傷, 日本体育測定評価学会第8回大会, 豊島区, 2009. 3

小嶋 光明：低線量放射線の生物影響～バイスタンダー効果と適応応答の関係～, 第42回日本保健物理学会, 沖縄, 2008. 6

小嶋 光明：低線量放射線によるバイスタンダー効果と適応応答の関係, 第45回放射線影響懇話会, 長崎, 2008. 7

小嶋 光明、江藤 紘文、伴 信彦、甲斐 倫明：低線量放射線によるバイスタンダー効果と適応応答の関係-DNA初期損傷に着目して-, 第51回放射線影響学会, 北九州, 2008. 11

影山 隆之、西山 愛友美：平成19年の大分県における自殺の原因・動機に関する統計的分析－「健康問題」および「経済・生活問題」を中心に, 第54回大分県公衆衛生学会, 大分市, 2009. 2

影山 隆之：勤労者のメンタルヘルスと自殺対策, 大分労働局平成20年度「職場におけるメンタルヘルス対策に関する研修会・自殺対策に関するセミナー」, 大分市, 2009. 2

影山 隆之：自殺は減らせる死：地域で始める自殺予防, 竹田市民生委員児童委員協議会研修会, 竹田市, 2009. 1

影山 隆之：自殺問題についての行政保健師の経験と意識－全県調査の速報, 第32回日本自殺予防学会, 盛岡市, 2008. 4

影山 隆之：抑うつ状態・希死念慮の評価ツールDSSを一般勤労者に適用した場合の基礎データ, 第28回日本社会精神医学会, 宇都宮市, 2009. 2

岡崎 寿子、佐藤 みつよ、高波 利恵、岩崎 香子：中学生の放課後の活動および栄養摂取状況が踵骨量に与える影響, 第10回日本骨粗鬆症学会, 大阪, 2008. 11

賀 森、市瀬 孝道、吉田 成一：都市大気粉塵は抗原誘発性の好酸球性気道炎症を増悪させる, 日本薬学会第129年会, 京都, 2009. 3

間淵 麗奈、関屋 伸子、生野 末子、宮崎 文子：産褥早期における清拭が褥婦の心身に及ぼす影響, 第49回日本母性衛生学会学術集会, 東京, 2008. 11

関屋 伸子、間淵 麗奈、長谷川 泰代：シャワー浴による褥婦の身体的・心理的ストレス指標の変化, 第49回日本母性衛生学会学術集会, 東京, 2008. 11

関根 剛、栗林 久：犯罪被害者の声を聴く, 大分被害者支援センター犯罪被害者支援ボランティア養成講座, 大分市, 2009. 2

関根 剛、高橋 久代：支援に関する情報の扱いについて, 全国被害者支援ネットワーク秋季全国研修会, 東京都, 2008. 9

関根 剛、野崎 響子：直接支援員への指導方法, 全国被害者支援ネットワーク上級研修, 東京都, 2009. 2

岩崎 香子、岡崎 亮、菅野 三喜男、西島 冬彦、渡辺 牧子、大和 英之：糖尿病からの低代謝回転型透析骨症の発症における腎機能低下の影響, 第28回日本骨形態計測学会学術集会, 東京, 2008. 7

岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史：無形成骨症(ABD)の骨質に関する検討－動的粘弾性(DMA)測定および共焦点レーザー・ラマン分光法による検討－, 第26回日本骨代謝学会学術集会, 大阪市, 2008. 10

岩崎 香子、谷口 知栄子、内田 素行、藤枝 綾子、大和 英之：終末糖化産物は骨芽細胞機能の低下を惹起する, 第51回日本腎臓学会学術集会, 福岡, 2008. 5

- 岩崎 香子：中学生の踵骨量年間変化に影響する因子についての検討, 第10回日本骨粗鬆症学会学術集会, 大阪市, 2008. 11
- 吉村 匠平：遠隔講義「人間関係学」, 大分大学授業公開FDワークショップ, 大分大学, 2008. 12
- 吉村 匠平：新人職員対象の早期バーンアウト予防講座 その2, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡, 2008. 6
- 吉村 匠平：積極的傾聴に必要な態度, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2008. 11
- 吉村 匠平：他者攻撃の畏、自己攻撃の畏, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2008. 10
- 吉村 匠平：閉じた質問、開いた質問, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2008. 12
- 吉田 成一、日吉 孝子、高野 裕久、市瀬 孝道：粒子状物質によるマウスのテストステロン産生に及ぼす影響, フォーラム2008：衛生薬学・環境トキシコロジー, 熊本市, 2008. 11
- 吉田 成一、日吉 孝子、高野 裕久、武田 健、市瀬 孝道：中国メガシティ降下煤塵の胎仔期暴露による雄性出生仔生殖機能への影響, 日本薬学会第129年会, 京都, 2009. 3
- 吉野 久美子、関屋 伸子：母性看護学実習経験録からみた学内演習項目の検討, 第5回大分県母性衛生学会学術集会, 大分, 2008. 10
- 宮崎 文子：マタニティビックスの精神的効果ービアンカZ（ストレス測定器）を使用してー, 第5回大分県母性衛生学会学術集会, 大分県, 2008. 10
- 宮崎 文子：顧客重視（CLIENT FOCUS）から見た開業助産師と勤務助産師の実態, 第22回日本助産学会, 神戸市, 2008. 3
- 宮内 信治：直接話法におけるWH疑問文のピッチ変動, 第13回日本英語音声学会全国大会, 名古屋市, 2008. 11
- 軽部 薫：産後1ヶ月と産後4ヶ月における姿勢と体形の変化, 日本母性衛生学会・第49回日本母性衛生学会学術集会, 千葉県浦安市, 2008. 11
- 戸崎 美穂、高野 政子：混合病棟における小児看護学実習の学生の学びと課題, 第39回日本看護学会ー看護教育ー, 岐阜市, 2008. 8
- 甲斐 倫明、伴 信彦：最新の原爆データを用いた発がんリスク評価, 日本保健物理学会第42回研究発表会, 那覇市, 2008. 6
- 高松 伸枝、神菌 めぐみ、安部 眞佐子：保育所給食関係者への食物アレルギー対応支援活動, 第9回食物アレルギー研究会, 東京, 2009. 2
- 高波 利恵：Nurses' approach to terminal children in Korea and Japan., The 13th Congress of the Asian College of Psychomatic Medicine, 韓国ソウル市, 2008. 9
- 高波 利恵：行動変容に関連する要因ー個人と職場環境の相互作用ー, 第81回 日本産業衛生学会, 北海道, 2008. 6
- 高野 政子：小児の訪問看護の実態と看護師の自律性に関する研究, 日本小児看護学会第18回学術集会, 名古屋市, 2008. 7
- 高野 政子：母親の食意識と3歳児の肥満と食行動, 第39回日本看護学会ー地域看護ー, 静岡市, 2008. 10

佐藤 みつよ、岡崎 寿子、高波 利恵、岩崎 香子：中学生の踵骨量と心身の自覚症状および栄養摂取状況との関連, 第10回日本骨粗鬆症学会, 大阪市, 2008. 11

山口 奈美、高野 政子：授業における効果的発問の検討 - 小児看護学方法論を題材として -, 第39回日本看護学会 -看護教育-, 岐阜市, 2008. 8

市瀬 孝道、吉田 成一、安藤 春香、若林 敬二：アスベストによる肺の炎症と局所DNA損傷物質の検出, フォーラム2008 衛生薬学・環境トキシコロジー, 熊本, 2008. 10

市瀬 孝道、吉田 成一、賀 森、若林 敬二：アスベストによる肺の炎症と腫瘍発生について, 日本薬学会第129年会, 京都, 2009. 3

市瀬 孝道、西川 雅高、高野 裕久、世良 暢之：黄砂の健康影響, 第25回エアロゾル科学・技術研究討論会、国際シンポジウム2008, 金沢, 2008. 9

市瀬 孝道、定金 香里、高野 裕久、井上 健一郎、柳澤 利枝：中国大都市降下煤塵のアレルギー修飾作用, 第58回日本アレルギー学会秋季大会, 東京, 2008. 11

市瀬 孝道：黄砂による健康被害の問題点, 第67回日本公衆衛生学会総会・サテライトシンポジウム, 福岡, 2008. 10

小池 英子、高野 裕久、井上 健一郎、柳澤 利枝、定金 香里、市瀬 孝道：フタル酸ジイソノニルがNC/Ngaマウス骨髄由来樹状細胞に及ぼす影響, 第58回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京, 2008. 11

小嶋 光明：放射線誘発DNA初期損傷の修復・時間関係 -低線量域に着目して-, 京都大学原子炉実験所 平成20年度専門研究会, 京都, 2008. 9

小野 美喜：臨床看護師の認識する「よい看護師」, 日本看護科学学会, 福岡, 2008. 12

神菌 めぐみ、安部 眞佐子、高松 伸枝：食物アレルギー児に対応する保育所給食担当者の悩みについて, 第9回食物アレルギー研究会, 東京, 2009. 2

石川 雄一、市瀬 孝道、定金 香里、信岡 かおる、伊波 英克：県産の柑橘加工残渣を活用した抗アレルギー飲料の開発 1, 産学連携学会第6回大会, 大分郡野津原町, 2005. 6

大下 敏子、草間 朋子、江藤 真紀、小野 美喜、桜井 礼子、高野 政子、藤内 美保、林 猪都子、福田 広美：大学院修士課程におけるナースプラクティショナー (NP) 養成の開始の経験, 日本看護科学学会学術交流集会, 福岡, 2008. 12

大賀 淳子：看護学生と看護師の精神病に対するイメージの比較, 第28回日本社会精神医学会, 宇都宮市, 2009. 2

大賀 淳子：森林散策によるストレス軽減効果の検討, 第2回県民の森「森林療法講座」, 大分市県民の森「青少年の森森林学習展示館」, 2009. 1

大賀 淳子：日光浴が閉鎖病棟入院中の統合失調症患者の睡眠に及ぼした影響, 第67回日本公衆衛生学会, 福岡, 2008. 11

長谷川 隆幸、勝沼 泰、小野 孝二、甲斐 倫明：CT検査からの臓器線量のImPACT推定値とガラス線量計による実測値の比較, 日本保健物理学会第42回研究発表会, 那覇市, 2008. 6

辻 さつき、神田 玲子、大町 康、石田 有香、伴 信彦、島田 義也：FISH法を用いた放射線誘発骨髄性白血病マウスのPU. 1遺伝子異常解析, 日本放射線影響学会第51回大会, 北九州市, 2008. 11

定金 香里、伊東 朋子、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子、井上 健一郎、市瀬 孝道：医療職者が使用する擦式速乾性消毒薬のアトピー性皮膚炎に対する増悪作用, 第79回日本衛生学会学術総会, 東

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子、井上 健一郎：ノニルフェノールおよびブチルフェノールがアトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼす影響（1），第58回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京, 2008. 11

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子、井上 健一郎：ノニルフェノールおよびブチルフェノールがアトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼす影響（2），第58回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京, 2008. 11

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子、井上 健一郎：真菌吸入によるアトピー性皮膚炎モデルマウスへの影響, 大気環境学会九州支部第9回研究会, 福岡, 2009. 1

定金 香里、天尾 豊：きみはわかるかな？舌の感覚の不思議, 大分県理科・化学懇談会 夏休み子供サイエンス2008, 大分市, 2008. 8

田中 美樹、高野 政子：小児看護学実習における看護技術の実態と学内演習の課題, 日本小児看護学会第18回学術集会, 愛知県名古屋, 2008. 7

田邊 愛季子、阿部 里美、宮野 康子、梅野 貴恵：膝押し操体法による分娩第I期経過時間の短縮, 第49回日本母性衛生学会学術集会, 千葉県浦安市, 2008. 11

日吉 孝子、市瀬 孝道、吉田 成一、山元 昭二、高須賀 信夫、堀 優作、若林 敬二：アモサイトとクロシドライトのマウス肺への影響, 第49回大気環境学会年会, 金沢, 2008. 9

梅野 貴恵：看護教育方法（母性）演習, 平成20年度大分県看護教育養成講習会, 大分市, 2008. 10

伴 信彦、柿沼 志津子、大町 康、甲斐 倫明：放射線照射マウスの造血細胞における白血病特異的遺伝子変異の検出, 日本放射線影響学会第51回大会, 北九州市, 2008. 11

伴 信彦、甲斐 倫明：放射線照射マウスの白血病発症過程における造血細胞動態のモデル解析, 日本保健物理学会第42回研究発表会, 宜野湾市, 2008. 6

福田 広美、桜井 礼子、鄭 佳紅、上泉 和子、内布 敦子、坂下 玲子、栗屋 典子：Web版「看護ケアの質評価総合システム」における患者満足度評価と構造・過程評価の関連, 看護管理学会, 東京, 2008. 8

福田 広美：平成20年度訪問看護研修ステップ2「呼吸管理」, 大分県看護協会, 大分県, 2008. 8

平野 互：『生存権』と『人間の尊厳』～障害者自立支援法から見えてきたこと～, 第25回西日本生命倫理研究会, 福岡市, 2009. 2

平野 互：自立ってほんとはどんな意味なんだろう～障害者自立支援法の問題を考える, NPO法人患者の権利オンブズマン 医療・福祉ユーザーのための「市民大学」, 福岡市, 2008. 4

平野 互：発達障がい児の特性と学童期の課題への対応 ―子どもの生きる力を育てるために―, 大分県立白杵養護学校 教育研修会, 白杵市, 2008. 7

平野 互：発達障がい児の特性と学童期の課題への対応 ―子どもの生きる力を育てるために―, 大分県立庄内養護学校 校内支援研修会, 由布市, 2008. 7

平野 互：発達障がい児の特性と学童期の課題への対応 ―子どもの生きる力を育てるために―, 大分県立新生養護学校 教育研修会, 大分市, 2008. 8

平野 互：福祉における権利擁護 ―権利としての自立, 大分県社会福祉介護研修センター 県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市, 2008. 5

柳沢 利枝、高野 裕久、水島 かつら、井上 健一郎、小池 英子、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一：アレルゲン存在下、非依存下におけるディーゼル排気微粒子（DEP）の経気道曝露が肺局所の遺伝子発現変動に与える影響に関するDNAマイクロアレイ解析，第49回大気環境学会年会，金沢，2008. 9

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、小池 英子、定金 香里、市瀬 孝道：Latex nanoparticlesが皮膚のバリア機能破綻時に皮膚炎に及ぼす影響，第15回日本免疫毒性学会学術大会，東京，2008. 9

学術講演等

吉村 匠平：絵本を用いたサイコエデュケーション，学校心理士会 大分支部 第1回研修会，大分市，2008. 5

吉村 匠平：心理士よ相談室の外に出よう，発達臨床心理士 九州・沖縄ブロック 研修会，宮崎市，2008. 5

吉田 成一：粒子状物質による雄性生殖系への影響～環境中および産業由来の粒子の影響，RMB研究会，東京都，2008. 7

伴 信彦：放射線による白血病の発症機構 -マウス骨髄性白血病を中心に-，第13回大分最小侵襲治療法研究会，大分市，2008. 10

影山 隆之：大分県の自殺関連調査から～であ、想像力、共有，日本精神衛生学会第24回大会大会長講演，別府市，2008. 11

S. W. Lee：Psychiatric Mental Health Nursing: principle and theory, international trends and issues, 鹿児島大学医学部保健学科講演会，鹿児島市，2009. 1

10 地域貢献

講演等

- 安部 眞佐子 保育所における食物アレルギーの対応について，大分県保育所給食担当者研修会，別府市子育て世代の食事の悩み，平成20年度大分県立看護科学大学公開講座，大分市
- 稲垣 敦 介護予防運動指導，人生いきいきはつらつスクール，大分市
運動指導・体力テスト，大分丘の上病院スポーツデー，大分市
介護予防運動指導，トリニータ介護予防事業，大分市
介護予防運動指導，藤原南部げんきクラブ研修会，日出町
介護予防運動指導，竹田市ヘルスサポーター養成講座，竹田市
介護予防運動指導，大分県介護予防ボランティア育成事業，九重町
介護予防運動指導，大分県介護予防ボランティア育成事業，佐伯市
介護予防運動指導，ふれあいいきいきサロン研修会（1），大分市
介護予防運動指導，ふれあいいきいきサロン研修会（2），大分市
地域連携研究コンソーシアム大分への期待と我が大学の特色，産学官連携戦略展開事業シンポジウム，大分市
健康チェック，ふじみん里まつり，大分市
介護予防運動指導，トリニータ介護予防事業，大分市
フィジカル・フィットネスの考え方，大分県老人福祉施設協議会デイサービスセンター職員研修会，大分市
体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，大分市
健康チェック，第34回富士見が丘団地運動会，大分市
- 岩崎 香子 つくってみよう！かんたんな理科実験，大分県立看護科学大学ミニ公開講座，大分市
- 梅野 貴恵 看護大学で学ぶこと，大分県立雄城台高校出前講義，大分市
いのちの教育「第二次性徴と赤ちゃん誕生」，大分市立三佐小学校「いのちの教育」，大分市
- 江藤 真紀 在宅看護論演習／看護教育方法演習／専門領域別演習，大分県看護教員養成講習会，大分市
- 大賀 淳子 体力テストおよび運動指導，大分丘の上病院スポーツデー，大分丘の上病院メンタルヘルス講座，平成20年度リーダー&コーディネーター研修，大分県共同庁舎メンタルヘルス講座，平成20年度準採用職員2年目研修，大分市職員研修所
看護研究の進め方，鶴見病院看護部研修会，厚生連鶴見病院
看護記録の基本的知識，佐伯保養院看護部研修会，佐伯保養院
養護学校で行う医療的ケア，新生養護学校職員研修会，大分市新生養護学校
看護研究の進め方，日本精神科看護技術協会大分県支部研修会，大分県立看護科学大学看護研究交流センター
臨床で行う看護研究，仲宗根病院看護部研修会，大分市仲宗根病院
うつに対する理解及びその対応方法，平成20年度九重・玖珠地区看護職員研修会，玖珠町
- 岡崎 寿子 つくってみよう！かんたんな理科実験，大分県立看護科学大学ミニ公開講座，大分市
- 小野 さと子 排尿に関するケア，訪問看護研修ステップ1，大分県看護研修センター

小野 美喜	<p>看護の対象の理解，看護力再開発，大分市 実習指導計画案の作成，実習指導者養成講習会，大分市 看護倫理，看護教員養成研修，大分市 事例のまとめ方，竹田地域看護職員研修，竹田市</p>
甲斐 倫明	<p>体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，九州石油ドーム 放射線の人体への影響，豊前築上医師会学術講演会，豊前築上医師会館 放射線と人間，おおい町生涯学習推進委員会・名田庄多聞の会，福井県おおい町</p>
影山 隆之	<p>働く人のメンタルヘルスー異動・配転で折れないために，大分県行政事務能力向上研修 (前期)メンタルヘルス，大分市 職場のメンタルヘルスー管理監督者の役割，大分県平成20年度マネジメント研修，大分市 メンタルヘルスと企業の対応について，大分県経営者協会労働問題研究会平成20年度総 会，大分市 メンタルヘルス，大分県市町村職員研修運営協議会・新任課長級研修，大分市 睡眠と健康，大分産業保健推進センター・平成20年度産業医研修会，別府市 心の健康のための職場環境づくり，大分市役所平成20年度管理職員メンタルヘルス研修， 大分市 働く人のメンタルヘルス，大分県西部保健所平成20年度自殺・うつ対策研修会，九重町 福祉職員の心の健康づくり，福利厚生センターソウェルクラブメンタルヘルス講習会，別 府 睡眠と健康，富士見が丘はつらつサロン，大分市 働く人の心の健康づくり，そして快眠，大分県技術士会平成20年度第3回CPD研修会，大分 市 地域の心の健康づくりについて，平成20年度大分県自殺・うつ対策研修会（民生委員）， 玖珠町 働く人のメンタルヘルス，平成20年度大分県自殺・うつ対策研修会（事業所），玖珠町 病院職員のためのストレスマネジメント，国東市民病院教育委員会研修会，国東市 自殺と「うつ」状態からいのちとくらしをまもるために，日田市介護支援専門員研修会， 日田市 地域の心の健康づくりについて，平成20年度大分県自殺・うつ対策研修会（民生委員）， 九重町 自殺は減らせる死：地域で始める自殺予防，豊肥地域自殺対策研修会：メンタルサポート 研修（豊後大野市），豊後大野市 自殺は減らせる死：地域で始める自殺予防，豊肥地域自殺対策研修会：豊後大野市メンタ ルヘルス研修，豊後大野市 産業保健概論，産業医学振興財団 精神科医等のための産業保健研修会，大分市</p>
神取 美恵子	<p>フィジカルアセスメント1，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストI，大分 市</p>
河野 梢子	<p>元気な夏の過ごし方，介護予防デイサービス団体 健康教室，野津原 元気な夏の過ごし方，小屋鶴地区老人会 健康教室，野津原 フィジカルアセスメント1，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストI，大分 市 フィジカルアセスメント2，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストI，大分 市</p>
木下 結加里	<p>体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，九州石油ドーム</p>

後藤 愛	体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，九州石油ドーム
佐藤 みつよ	つくってみよう！かんたんな理科実験，大分県立看護科学大学ミニ公開講座，大分市
桜井 礼子	体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，九州石油ドーム
品川 佳満	看護研究の基礎，西別府病院 看護部看護研究研修，別府市 データ解析入門，西別府病院 看護部看護研究研修，別府市
関根 剛	面接技術，大分県看護協会訪問看護研修ステップⅠ，大分市 相談員のこころの健康と癒しについて考える，いのちの電話大分大会分科会，大分市 対話の基本、コミュニケーションスキルの基礎，大分県警察，大分市 カウンセリングの原理と実際（１），大分県看護協会，大分市 カウンセリングの原理と実際（２），大分県看護協会，大分市 事件・事故後の心のケア，平成20年度大分県中・高等学校教育相談担当者等連絡会議，大分市 カウンセリングの理論と実際Ⅰ，大分いのちの電話自己成長のためのカウンセリング公開講座，大分市 被害者支援の歴史、基本法、被害者の権利，紀の国被害者支援センター被害者支援ボランティア養成講座，和歌山市 人を援助するというこゝろ，紀の国被害者支援センター被害者支援ボランティア養成講座，和歌山市 被害者に提供するサービス，紀の国被害者支援センター被害者支援ボランティア養成講座，和歌山市 支援者のストレスとサポート，ハートラインやまぐち被害者支援員養成講座，山口市 カウンセリングスキルの基礎，ハートラインやまぐち被害者支援員養成講座，山口市 つぐないの気持ちをはぐくむ指導，人吉農芸学園（少年院），人吉市 つぐないの気持ちをはぐくむ指導，人吉農芸学園（少年院），人吉市 つぐないの気持ちをはぐくむ指導，人吉農芸学園（少年院），人吉市 つぐないの気持ちをはぐくむ指導，大分少年院，豊後大野市 被害者支援のためのロールプレイ，社団法人大分被害者支援センター，大分市 被害者支援のためのロールプレイ，社団法人大分被害者支援センター，大分市 被害者支援のためのロールプレイ，社団法人大分被害者支援センター，大分市 スクールセクハラの影響と具体的な事例への対応，大分県教育庁人権・同和教育課 スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修，大分市 スクール・セクハラの影響と具体的な事例への対応，大分県教育庁人権・同和教育課 スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修，中津市 スクール・セクハラの影響と具体的な事例への対応，大分県教育庁人権・同和教育課 スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修，大分市 アサーショントレーニングの講義・演習，大分市中学校教育研究会養護部会，大分市 同行支援プランの作成，全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄ブロック研修会，大分市 同行支援プランの検討，全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄ブロック研修会，大分市 ナントカしたいけど、ドウニモならない、をドウニカしよう，公立学校共済組合大分支部 健康増進セミナー，豊後大野市 ナントカしたいけど、ドウニモならない、をドウニカしよう，公立学校共済組合大分支部 健康増進セミナー，大分市 ナントカしたいけど、ドウニモならない、をドウニカしよう，公立学校共済組合大分支部 健康増進セミナー，大分市

ナントカしたいけど、ドウニモならない、をドウニカしよう、公立学校共済組合大分支部健康増進セミナー、中津市

ナントカしたいけど、ドウニモならない、をドウニカしよう、公立学校共済組合大分支部健康増進セミナー、大分市

スクール・セクハラ防止及びその対応について、熊本市人権教育セミナー及びセクハラ相談員研修会、熊本市

行動計画策定、大分県こころの緊急支援(CRT)活動実践研修、大分市

カウンセリングスキル(一泊研修)、和歌山いのちの電話相談員養成講座、和歌山県美里町

楽な気分で子供と関わる方法、佐伯市佐伯城南中学校講演会、佐伯市

あん人は、なんで、ああなんか?—ストレスをためな、落ち込まない方法、大分県計量協会後援会、大分市

支援員養成に関する状況、紀の国被害者支援センター直接支援員養成研修、和歌山市

社会資源の活用、紀の国被害者支援センター直接支援員養成研修、和歌山市

犯罪被害者への治療、紀の国被害者支援センター直接支援員養成研修、和歌山市

ロールプレイ、紀の国被害者支援センター直接支援員養成研修、和歌山市

自分に気づく、紀の国被害者支援センター直接支援員養成研修、和歌山市

患者からの苦情をどう聞か—怒り・傷つきのケア—、市民のための患者塾講演会、大分市

覚せい剤事犯者処遇プログラムケース指導、大分保護観察所保護観察官・社会復帰調整課等研修、大分市

覚せい剤事犯者処遇プログラムケース指導、大分保護観察所保護観察官・社会復帰調整課等研修、大分市

教育相談の必要性、竹田市生徒指導研究協議会講演会、竹田市

管理職として適切なコミュニケーション～部下や同僚への接し方～、警察幹部職員研修コミュニケーション研修、大分市

職場や教育場でちょっと役立つコミュニケーション、全日本民医連九州沖縄地方協議会看護主任研修会、別府市

被害者等への対応について、大分家庭裁判所・裁判所書記官および家庭裁判所調査官(補)研修、大分市

電話相談ロールプレイ、全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄ブロック研修会、大分市

直接支援の検討、全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄ブロック研修会、大分市

犯罪被害者を取り巻く現状、大分被害者支援センター犯罪被害者支援ボランティア養成講座、大分市

支援者の倫理と研修体系等、大分被害者支援センター犯罪被害者支援ボランティア養成講座、大分市

自分を表現するためのコミュニケーション技法、大分県豊肥保健所アルコール関連問題教室コミュニケーション講座、豊後大野市

ロールプレイ、社団法人かごしま被害者支援センター継続研修会、鹿児島市

被害者や遺族が感じていること、大分刑務所 被害者の心情に関するゲストスピーカー講話、大分市

再犯を起ささないために、大分刑務所 被害者の心情に関するゲストスピーカー講話、大分市

被害者や遺族が感じていること、大分刑務所 被害者の心情に関するゲストスピーカー講話、大分市

あなたの被害者に何が起きたか、大分刑務所 被害者の心情に関するゲストスピーカー講話、大分市

再犯を起ささないために、大分刑務所 被害者の心情に関するゲストスピーカー講話、大分市

高波 利恵

量的研究の方法、大分県看護協会—看護研究の基礎Ⅰ—、大分市
第18回研究発表会 講評、別府市看護職研修会、別府市

- 高野 政子** 高齢化社会における小児医療と看護の重要性，大学等模擬授業（大分県立竹田高等学校），竹田市
アレルギーについて－疾患の理解と看護対処法－，大分県立聾学校，大分市
たんの吸引の基礎、経管栄養の基礎，大分県主催 平成20年度第2回医療的ケア研修，大分市
医療的ケア－呼吸と吸引の実際，大分県立別府養護学校教員研修会，別府市
医療的ケア－重症心身障がい児の障がい・疾病と健康管理－，大分県立大分養護学校教員研修会，大分市
実習指導の実際－小児看護－，実習指導者講習会，大分市
「たんの吸引の基礎」「たんの吸引の実際」，第2回医療的ケア研修，大分市
「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」，第3回医療的ケア研修，大分市
- 田中 美樹** 「たんの吸引の基礎」「たんの吸引の実際」，第2回医療的ケア研修，大分市
「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」，第3回医療的ケア研修，大分市
- 藤内 美保** 体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，九州石油ドーム
フィジカルアセスメントⅠ，大分県看護協会 第1回訪問看護研修ステップⅠ，大分市
フィジカルアセスメントⅡ，大分県看護協会 第1回訪問看護研修ステップⅠ，大分市
実習指導計画・指導案，大分県看護協会 実習指導者講習会，大分市
フィジカルアセスメント，大分赤十字病院中堅看護師研修，大分市
呼吸器系のフィジカルアセスメント，大分医療センター看護師教育研修，大分市
循環器系のフィジカルアセスメント，大分医療センター看護師教育研修，大分市
フィジカルアセスメント，社会福祉センター，大分市
消化器系のフィジカルアセスメント，大分医師会立アルメイダ病院看護師研修，大分市
チーム医療，認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程，広島市
看護過程と看護記録，大分県看護協会看護力再開発研修会，大分市
呼吸器系のフィジカルアセスメント，大分医師会立アルメイダ病院看護師研修，大分市
臨地実習における学生へのフィジカルアセスメントの指導，国立病院機構別府医療センター実習指導者研修会，別府市
呼吸器系のフィジカルアセスメント，大分医師会立アルメイダ病院看護師研修，大分市
グラウンデッド・セオリー，広島大学大学院，広島市
フィジカルアセスメント，湯布院厚生年金病院看護師研修会，由布市
フィジカルアセスメント1，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストⅠ，大分市
フィジカルアセスメント2，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストⅠ，大分市
- 濱田 佳代子** フィジカルアセスメント1，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストⅠ，大分市
「呼吸管理」 実習Ⅰ，平成20年度訪問看護研修ステップ2，大分市
看護の技を学ぼう－包帯法－，大学による出張講義（大分県立日田高等学校），日田市
看護記録の基本について，平成20年度豊後大野地域看護職員研修会，豊後大野市
看護職員に必要な検査の知識，平成20年度看護力再開発講習会，大分市
フィジカルアセスメント2，平成20年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストⅠ，大分市
- 林 猪都子** 助産師教育課程，平成20年度大分県看護協会実習指導者講習会，大分市
助産師教育の変遷と助産師教育制度，平成20年度大分県看護教員養成講習会，大分市
看護教育方法（母性）演習，平成20年度大分県看護教員養成講習会，大分市
専門領域別研究（母性）演習，平成20年度大分県看護教員養成講習会，大分市
臨床現場での看護研究の取り組み，アルメイダ病院，大分市

体力テスト・体力相談，トリニータ健康づくりプログラム，九州石油ドーム
 放射線の影響と防護 -最近の動向から-，大分大学医学部平成20年度放射線業務従事者教育訓練講習会，由布市
 放射線の影響と防護 -基礎と最近の動向-，大分赤十字病院放射線業務従事者教育訓練，大分市
 インターネットジャーナル 看護科学研究，日本看護図書館協会第38回研究会，久留米市
 小論文の書き方，大分県看護協会平成20年度准看護師研修会，大分市
 医療被ばくに関するリスク評価，2008年放射線影響協会講演会「放射線の影響とリスクコミュニケーション」，東京都
 最適化の考え方（保健物理の専門家の立場から），第6回規制科学ダイアログセミナー「医療被ばくの最適化を考える」，千葉市
 医療被ばくに関するリスク評価，平成20年度放射線安全管理研修会，大阪市

患者の権利～医療をめぐる人権問題，大分県教育庁 人権教育専門講座，大分市
 広汎性発達障がい児の生きる力を育てるために，大分市教育委員会 特別支援教育コーディネーター研修会，大分市
 医療倫理と患者の権利，大分ゆふみ病院 職員研修会，大分市
 発達障がい児の未来のために ～専門職に寄せる親の願い～，大分県 発達障がい者療育専門員養成研修，大分市
 安全教育とリスク・マネジメント，大分県看護協会 実習指導者講習会，大分市
 発達障がい児・者の「自立」を考える，九州・山口自閉症施設連絡協議会 職員研修会，豊後大野市
 広汎性発達障がい児の生きる力を育てるために，大分市立松岡小学校 特別支援教育研修会，大分市
 福祉サービス利用者の権利と権利擁護としての苦情解決，大分県社会福祉協議会 平成20年度福祉サービス事業者研修会，大分市
 住民による地域活動と健康づくり，大分市健康推進員研修会，大分市
 苦情調査事例から『人間の尊厳』を学ぶ，NPO法人患者の権利オンブズマン 患者（利用者）アドボカシー研修講座，福岡市
 「医療倫理」1・2，大分県看護教員養成講習会，大分市
 医療をめぐる人権，大分県 人権に向き合うための啓発リーダー養成講座，大分市
 訪問看護における患者の権利と意思決定の支援，大分県看護協会訪問看護基礎研修（短期），大分市
 わかってほしい わかりたい コミュニケーションの苦手な子のこと，由布市立川西小学校PTA研修会，由布市
 権利としての自立 -障害者自立支援法の問題点，津久見市身体障害者福祉協議会「障害者のつどい」，津久見市
 ほんとうの共生社会をめざして，大分県教育庁「共生社会をめざした学校・地域づくり」フォーラム，臼杵市
 医療における人権 ～納得のいく医療を受けるために，大分市わさだ公民館「老人大学」，大分市
 子どもたちの生きる力を育てるために ～発達障がい児の特性と学童期の課題への対応，平成20年度由布市学校保健安全研究大会，由布市
 患者の意思決定と最善の利益 ～患者が治療を拒否するとき～，大分健生病院倫理講演会，大分市
 メタボリックシンドローム、その意味と対策，大分県立芸術文化短期大学職員健康づくり研修会，大分市
 発達障がい児の特性と課題への対応 -保護者の立場から，平成20年度第3回高等学校特別支援教育コーディネーター研修会，大分市
 親の立場から見えてきたこと ～専門職に寄せる親の思い～，平成20年度児童デイサービス事業療育担当職員等研修会，大分市

福祉サービス第三者評価と利用者の権利擁護，平成20年度大分県福祉サービス第三者評価セミナー，大分市

宮崎 文子

母性看護学・助産学実習指導の基本的考え方，熊本県看護教員研修会，熊本市
新カリキュラム改正について一特に助産師教育を中心にして，大分県看護協会通常総会助産師職脳集会，大分市
中央アジア・ウズベキスタン共和国の母子保健体制と助産師活動，平成20年度全国助産師教育協議会九州・沖縄地区研修会，大分市
助産師教育制度と改正カリキュラム，大分県看護教員養成講習会，大分市
母性看護の構成の基本的考え方，大分県看護教員養成講習会，大分市
母性看護の教育方法，大分県看護教員養成講習会，大分市
母性看護の授業展開例，大分県看護教員養成講習会，大分市
看護教育方法演習96時間，大分県看護教員養成講習会，大分市
専門領域（母性看護）の課題研究指導90時間，大分県看護教員養成講習会，大分市
女性のライフサイクルにおける性教育，杵築市生涯教育研修会，杵築市
母性看護教育の構成と内容，JICAウズベキスタン国看護教育改善プロジェクト，大分市

吉村 匠平

組織内の対人関係を目的とした構成的エンカウンターグループ体験，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市
新人職員対象の早期バーンアウト予防講座，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市
保育所保育指針 第6章 保護者に対する支援，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園、別府保育園職員研修，福岡市
新人職員教育担当職員対象の早期バーンアウト予防講座，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市
職員対象の研修ガイダンス，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市
医療モデルから解決志向モデルへ，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市
積極的な傾聴の実技練習，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市
積極的傾聴とコンプリメント，社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修，福岡市

研究指導

大分県立病院	小野 美喜、関根 剛
大分赤十字病院	福田 広美、伴 信彦
国立病院機構 大分医療センター	高野 政子、吉田 成一
国立病院機構 別府医療センター	梅野 貴恵、小嶋 光明
国立病院機構 西別府病院	江藤 真紀、品川 佳満
大分市医師会立アルメイダ病院	林 猪都子、中山 晃志

学会その他の役員等

伊東 朋子

平成20年度大分県准看師試験委員会
日本ALS協会大分県支部運営委員
JICAウズベキスタン看護教育改善プロジェクト基礎看護領域

- 市瀬 孝道
大分県環境審議会委員
環境省黄砂問題検討会委員
大気環境学会九州支部会役員
独立行政法人・国立環境研究所、病態生理研究チーム：客員研究員
地域連携研究コンソーシアム大分コーディネイター
- 稲垣 敦
日本体育測定評価学会 副理事長・将来検討委員長・研究助成委員
体育学研究 編集委員
Physical Performance Measurement 編集委員
体育測定評価研究 編集委員
看護科学研究 編集幹事
大分県運動機能向上専門部会委員
Nスポーツ 顧問
熊本大学 非常勤講師
大分大学 非常勤講師
別府溝部学園短期大学 非常勤講師
地域連携研究コンソーシアム大分サブコーディネーター
- 乾 つぶら
全国助産師教育協議会九州ブロック研修会実行委員
日本助産師会大分県支部教育委員
第5回大分県母性衛生学会学術集会実行委員
- 梅野 貴恵
大分県母性衛生学会理事（事務局会計）
平成20年度全国助産師教育協議会九州沖縄地区研修会実行委員
第10回日本災害看護学会実行委員
第5回大分県母性衛生学会総会・学術集会実行委員
- 江藤 真紀
大分県看護協会教育委員
第10回日本災害看護学会実行委員
大分市地域包括支援センター運営協議会委員
大分市高齢者福祉計画及び第4期大分市介護保険事業計画策定委員
- 岡崎 寿子
別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
- 小嶋 光明
放射線影響学会幹事
- 大賀 淳子
大分県障害児適正就学指導委員
大分県医療的ケア運営協議会委員
大分県看護協会学会委員
- 小野 美喜
第10回日本災害看護学会年次大会企画委員
大分県脳卒中懇話会世話人

- 甲斐 倫明
 日本歯科放射線学会防護委員会委員
 独立行政法人日本原子力研究開発機構 原子力基礎工学研究・評価委員会 委員
 原子力安全研究協会原子力安全に係る放射線防護の基本的考え方に関する調査専門委員会
 経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会臨時委員
 日本医学放射線学会放射線防護委員会委員
 国連科学委員会国内対応委員会委員
 日本リスク研究学会常任理事・編集委員長
 国際放射線防護委員会（ICRP）第4専門委員会委員
 日本放射線影響学会幹事
 内閣府原子力安全委員会専門委員
 九州大学非常勤講師
 放送大学客員教授
 財団法人放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会委員
- 河野 梢子
 ななせ生きがいクラブアドバイザー
- 佐伯 圭一郎
 日本民族衛生学会評議員
 生涯健康県おおいた21推進協議会幹事
 大分市健康づくり対策小委員会委員
- 桜井 礼子
 大分県福祉審議会民生委員審査専門分科会委員
 大分市建築審査会委員
 大分市食育推進計画策定委員会副委員長
 大分地方労働審議会委員
 大分市学校給食西部共同調理場新築設計業務委託・公募型プロポーザル委員
 日本災害看護学会第10回年次大会企画委員会副委員長
 大分県看護協会 セカンドレベル準備委員会委員
 熊本保健医療大学認定看護師教育課程入試委員会委員
 JICA技術協力「ウズベキスタン看護教育改善」プロジェクトカリキュラム委員会委員
- 定金 香里
 大分県理科・化学懇談会 幹事
 大気環境学会誌 編集委員
- 品川 佳満
 別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
- 関根 剛
 「民間被害者支援団体における支援者の育成に関する調査研究（内閣府委託事業）」委員
 消防庁緊急時メンタルサポートチーム
 大分県こころの緊急支援体制整備連絡協議会委員
 大分市男女共同参画審議会会長
 全国被害者支援ネットワーク研修検討委員会副委員長
 社団法人大分被害者支援センター理事・研修委員長
 大分いのちの電話協会スーパーバイザー
 大分県臨床心理士会広報担当理事
 日本パーソナリティ心理学会パーソナリティ研究編集委員
 日本精神衛生学会大分大会事務局長
- 関屋 伸子
 大分県母性衛生学会理事

- 高野 政子 大分県小児保健協会副会長 理事
九州小児看護教育研究会
JICAウズベキスタン看護教育改善プロジェクトカリキュラム委員（小児看護）
- 藤内 美保 大分県医療費適正化推進協議会委員
大分県地域ケア体制整備構想策定協議会委員
JICA ウズベキスタン看護教育改善プロジェクトワーキンググループ
第10回日本災害看護学会企画委員
ウズベキスタン共和国ベッド100台寄贈実行委員
- 林 猪都子 大分県母性衛生学会 理事
全国助産師教育協議会 九州・沖縄地区研修会 実行委員
日本災害看護学会学術集会 第10回年次大会 実行委員
第5回 大分県母性衛生学会学術集会 実行委員
ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト 母性WG
- 伴 信彦 放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会専門委員（IAEA/RASSC担当）
国連科学委員会国内対応委員会委員
日本保健物理学学会企画委員
日本保健物理学学会第42回研究発表会実行委員
日本放射線影響学会第51回大会実行委員
日本災害看護学会第10回年次大会企画委員
厚生労働省 疾病・障害認定審査会臨時委員
- 平野 互 福岡大学法科大学院非常勤講師
医療事故防止・患者安全推進学会 理事
大分県発達障がい研究会 理事
大分県人権尊重社会づくり推進審議会 副会長
大分県地域・職域連携推進部会 委員
大分県特別支援連携協議会 委員
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 発達障がい者療育専門員養成研修運営委員会委員
大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会 委員
大分健生病院 倫理委員会 委員
九州大学病院 心臓移植外部評価委員
別府発達医療センター 安全対策等審議委員会 委員
- 福田 広美 平成20年度大分県看護教員養成講習会 専門領域別研究演習
大分赤十字病院研修会講師
- 松尾 恭子 平成20年度大分県准看護師試験作成委員
平成20年度実習指導者講習会 看護過程 講師
キャリア教育 「大学模擬講義」 講師

宮崎 文子

全国助産師教育協議会常任理事
第33回全国助産師教育協議会研修会副会長
全国助産師教育協議会九州・沖縄地区研修会責任者
日本助産学会評議員
大分県母性衛生学会副会長兼事務局長
大分県看護協会第3副会長
大分県看護協会会館建設委員
大分県男女共同参画審議会委員
大分県地域保健協議会母子保健小委員
平成20年度産科診療所における助産師確保事業検討委員会
JICAウズベキスタン国看護教育改善プロジェクト カリキュラム委員、母性看護責任者

吉田 成一

日本アンドロロジー学会 評議員
環境省大気汚染物質等文献レビューワーキンググループ委員
東京理科大学薬学部客員研究員

吉村 匠平

発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業に関わる専門家チーム委員
大学コンソーシアムおおいた 運営委員
チャレンジ！おおいた大会 選手団担当ボランティア養成協力校連絡会議委員
平成20年度学習障がい児等支援体制整備事業に係る専門家チーム委員

11 助成研究

井伊 暢美

認知症者への構造化に着目した環境調整に関するケアモデルの検討
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B) (2年予定の1年目)

市瀬 孝道

ヒトがん発生に関わる環境要因及び感受性要因に関する研究
国立がんセンター研究所 (厚生労働省がん研究助成金 19指-1)

市瀬 孝道

化学物質リスク研究推進事業「ナノマテリアルの遺伝毒性及び発がん性に関する研究」
国立がんセンター研究所 (厚生労働省がん研究助成金)

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

中国大陸から風送された汚染黄砂による呼吸器疾患の増悪と日本におけるその疫学調査
日本科学振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

日産産ユズの免疫抑制成分を活用したアレルギー低減飲料の開発
経済産業省 平成20年度地域資源活用型研究開発事業

岩崎 香子

腎性骨症における骨・ミネラル代謝への終末糖化産物の関与
(財) 日本腎臓財団

岩崎 香子

透析患者の食事摂取状況と骨ミネラル代謝の関連
ROD21研究会 研究グラント

定金 香里

カビの吸入と接触によるアトピー性皮膚炎増悪作用に関する研究
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2年予定の2年目)

高波 利恵

小規模事業所労働者に対する集団的健康増進活動の支援方法の検討とその評価
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B)

藤内 美保、市瀬 孝道、吉田 成一、伊藤 正美、吉田 泰造

マイクロバブル装置により細菌繁殖を防止する足浴器の開発に関する研究
地域連携研究コンソーシアム大分共同研究

藤内 美保、伊藤 正美、市瀬 孝道、板橋 昭英、三浦 毅

点滴お知らせセンサーの開発と看護現場における業務軽減効果に関する実証的研究
地域連携研究コンソーシアム大分共同研究

中山 晃志

生物統計学における因果推論に関する手法の改善
統計数理研究所

平野 亙

PDDによる生活障害評価尺度の開発に関する研究
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

福田 広美

Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた看護の質評価に関する研究
分担：日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)

宮崎 文子

望まない妊娠を防止するための受胎調節実地指導員活動の活性化のためのリカレント教育
分担：日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

吉田 成一

大気中の微小粒子 (CAPs) による次世代雄性生殖系への影響
財団法人住友財団環境研究助成

12 各種研究・研修派遣

高波 利恵

派遣先 フィンランド共和国 クオピオ市（クオピオ大学、フィンランド産業保健研究所、クオピオ市役所）

研修期間：平成20年7月30日～8月29日

産業看護の先進国であるフィンランドの中小規模事業所を対象にした産業看護職の活動実態と市におけるヘルスプロモーションの取組について観察、インタビュー、文献を用いた調査等を行った。その内容については3月23日に学内の報告会で報告した。

田中 美樹

派遣先 シドニー（オーストラリア）
(The Children's Hospital at Westmead, Bear cottage)

研修期間：平成21年3月2日～3月13日

The Children's Hospital at Westmeadでは、急性期および慢性期の子どもの痛みに対するケアや取り組み、子どもの緩和ケアや家族への働きかけ、退院時ケアや地域看護師への教育システムなどを学んだ。また、Bear cottageでは、子どものホスピスケアに関する概要を学んだ後、実際のケアを見学した。今回の研修報告は、3月23日に行った。

小嶋 光明

派遣先 UCLA（アメリカ合衆国 ロサンゼルス）

派遣期間：平成21年3月21日～4月15日

Radiation oncologyのMcBride博士の研究室を訪問し、放射線に被ばくした細胞の細胞動態変化およびシグナル伝達の視点から、放射線発がん誘導メカニズムに関する知見を学んだ。

大下 敏子

派遣先 韓国ソウル

研修期間：平成20年9月16日～9月23日

韓国のソウル市内でNPおよび保健診療員の活動に関する視察・研修を行った。保健所およびコミュニティヘルスクリニック（5ヶ所）、家庭訪問2世帯、国立ソウル大学病院、ソウル看護大学、および総合病院（2ヶ所）の視察をした。

NPは主に包括的フィジカルアセスメントを行い、外来や病棟で活動していた。NPの教育は認定試験で知識や臨床技術、問題解決力を評価するものであった。保健診療員は24時間オープンなクリニックを運営し、慢性疾患の管理、疾病予防、健康増進のための活動を行っている。処方できる薬剤も厚生省より104種類認められている。保健診療員の活動により、地域住民のQOLが向上し、健康に関する関心が高まったとの報告がある。

李 笑雨

派遣先 韓国ソウル

研修期間：平成20年9月16日～9月23日

韓国のソウル市内でNPおよび保健診療員の活動に関する視察・研修を行った。保健所およびコミュニティヘルスクリニック（5ヶ所）、家庭訪問2世帯、国立ソウル大学病院、ソウル看護大学、および総合病院（2ヶ所）の視察をした。

NPは主に包括的フィジカルアセスメントを行い、外来や病棟で活動していた。NPの教育は認定試験で知識や臨床技術、問題解決力を評価するものであった。保健診療員は24時間オープンクリニックを運営し、慢性疾患の管理、疾病予防、健康増進のための活動を行っている。処方できる薬剤も厚生省より104種類認められている。保健診療員の活動により、地域住民のQOLが向上し、健康に関する関心が高まったとの報告がある。

松尾 恭子

派遣先 医療法人 碩済会 訪問看護ステーション 夕映え

研修期間：平成20年8月4日～8月8日

認定看護師（訪問看護）コースの教育を実施するために訪問看護の実際を学び、在宅における感染管理の問題について知り、その問題の対処法を知ることが目的に研修を行った。在宅療養中に発症する疾患は感染症が最も多く、呼吸器感染症、尿路感染症、褥創が多い。それぞれに在宅における現状と問題点がある。また、医療衛生材料はすべて患者の自己負担となるため経済面での配慮が欠かせない。個人個人に合わせた対処法が実践されていることを学び、在宅での感染対策に対する難しさを感じると共に、原点となる基礎基本の大切さをも感じる機会となった。今回の研修報告は、3月23日に行った。

高野 政子

派遣先 国立成育医療センター

研修期間：平成21年2月2日～2月6日

わが国の小児の成長発達と医療・研究の基幹センターにおいて、1) 組織、看護部における卒後教育・継続教育の実際を学ぶ、2) 最近の小児看護の中でも、がん看護、NICU看護における患児と家族への関わりを学ぶ、3) 外来の継続看護、小児専門看護師等の実際の活動を理解するという目的で研修した。今回の研修では、看護部で実施している継続教育の説明を受けたほか、NICU、6階東、7階西、9階東病棟と、呼吸器外来などで実習を行い、前述の目的を達成するような活動を行うことができた。今回の研修報告は、3月23日に行った。

乾 つぶら

派遣先 特別・特定医療法人愛仁会千船病院

研修期間：平成21年2月16日～2月20日

助産師外来・院内助産所の活動について見学及び実践を行った。今回の研修報告は、3月23日に行った。

濱田 佳代子

派遣先 独立行政法人国立病院機構災害医療センター

研修期間：平成20年12月1日～12月5日

医療現場におけるフィジカルアセスメントの実際を学び、看護アセスメント能力を高めるための教育方法の検討に資することを主な目的とした。医師による基本的診察技法（視診・触診・打診・聴診）の活用場面を中心に見学した。多種多様な患者の訴えの中から、病態の判断（診断）につながるデータ抽出を短時間で的確に行うためには、疾患特有の症状や徴候などを把握しておくと同時に、そうした指標となるデータと患者のデータとを照合し、科学的思考に基づいて問題を追究する学習体験の積み重ねが重要であることを学んだ。以上の研修内容については、3月23日に学内の報告会で報告した。

大賀 淳子

派遣先 東京都板橋区サン・マリーナ（精神障害者ソーシャルハウス）

研修期間：平成21年1月26日～2月6日

わが国における精神障害者社会復帰施設の先進的役割をはたしている同施設における活動を体験し、クラブハウスモデル（相互支援システム）の有効性について、同施設メンバーおよびスタッフとの交流を通して考察を深めた。また、地域で暮らす精神障害者が看護職に求めることについてインタビューを行った。これらの結果を、今後の教育研究活動に生かす予定である。今回の研修報告は、3月23日に行った。

津隈 亜弥子

派遣先 医療法人コミュニテ虹と風 のぞえ総合心療病院

研修期間：平成21年3月2日～3月13日

治療共同体の実際を知り、精神科医療、特に入院医療から社会復帰への支援を学ぶことを目的とした。病棟や社会復帰施設において、各種ミーティングへの参加、社会復帰を目指す方々や治療者との交流、意見交換などを行い、治療共同体の相互作用が治療効果を高めると同時に、種々の連携や信頼関係に結びついていることを実感した。これらの学びは、今後の教育活動に活かせるものだと確信している。今回の研修報告は、3月23日に行った。

13 学外研究者の受入

本学教員 甲斐 倫明

受入者 小野 孝二

所属：大分県立三重病院 放射線科

研究テーマ：文科省科研費「日本人ボクセルファントムによるCT診断時の臓器線量計算とWEBシステムの開発」

受入期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入者 和泉 志津恵

所属：大分大学工学部知能情報システム工学科 准教授

研究テーマ：低線量放射線の生体影響に関する実験データへの統計的手法の研究

受入期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

本学教員 市瀬 孝道

受入者 賀 森

所属：中国医科大学大学院博士課程

研究テーマ：環境中の様々なダストやナノ粒子の生体影響

受入期間：平成20年11月1日～平成21年3月31日

14 職員名簿

1 専任教員

生体科学	教授	菅野 公浩	H20. 4. 1 採用
	准教授	安部 眞佐子	
	助教	岩崎 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	准教授	吉田 成一	
	助教	定金 香里	
健康運動学	教授	稲垣 敦	
	助教	吉武 康栄	H20.10.31 退職
人間関係学	准教授	吉村 匠平	
	准教授	関根 剛	
	助手	佐藤 みつよ	H21.3.31 退職
環境保健学	教授	甲斐 倫明	
	准教授	伴 信彦	
	助教	小嶋 光明	
健康情報学	教授	佐伯 圭一郎	
	講師	品川 佳満	
	助教	中山 晃志	H21.3.31 退職
	教授	G. T. Shirley	
言語学	講師	宮内 信治	
	助手	岡崎 寿子	H21.3.31 退職
	准教授	伊東 朋子	
	講師	松尾 恭子	H21.3.31 退職
	助手	小野 さと子	
基礎看護学	助手	吉田 智子	H21.3.31 退職
	助手	佐藤 由香理	H21.3.30 退職
	准教授	藤内 美保	
	講師	濱田 佳代子	
	助手	河野 梢子	
	助手	神取 美恵子	
	助手	甲斐 令子	H20. 9. 1 採用
			H21.2.28 退職
成人・老年看護学	教授	大下 敏子	H20. 4. 1 採用
			H21. 3. 31 退職
	講師	小野 美喜	
	講師	福田 広美	
	助手	井伊 暢美	
	助手	江月 優子	

	助手	津留 英里佳	H20. 4. 1 採用
小児看護学	教授	高野 政子	
	講師	田中 美樹	
	助手	後藤 愛	H21.3.30 退職
母性看護学・助産学	教授	宮崎 文子	H21. 3. 31 退職
	准教授	林 猪都子	
	講師	関屋 伸子	
	講師	梅野 貴恵	
	助手	石岡 洋子	H20. 4. 1 採用
	助手	軽部 薫	H20. 4. 1 採用
	助手	乾 つぶら	H20. 4. 1 採用
精神看護学	教授	影山 隆之	
	講師	大賀 淳子	
	助手	津隈 亜弥子	H20. 4. 1 採用
保健管理学	教授	草間 朋子	
	教授	桜井 礼子	
	准教授	平野 互	
	助教	高波 利恵	
	助手	溝口 (朝見) 和佳	H21. 3. 31 退職
地域看護学	准教授	工藤 節美	H20. 8. 31 退職
	准教授	江藤 真紀	
	助手	木下 結加里	H21. 3. 31 退職
	助手	杉山 玲子	H21.3.30 退職
	助手	佐藤 貞子	H20.11.30 退職
国際看護学	教授	李 笑雨	
	助手	平田 美和	H20. 7. 25 退職
看護研究交流センター事務局			
	助手	小野 朱美	H20. 4. 1 採用
	助手	寺嶋 和子	H21. 2. 28 退職
	事務職員	岡本 香代	H20. 4. 1 採用

2 非常勤講師

大杉 至	人間と社会
西 英久	哲学入門
日高 貢一郎	言語表現法
足立 恵理	文化人類学入門
西園 晃	生体微生物反応論
栗屋 典子	看護情報学概論
宮本 修	音楽とこころ
澤田 佳孝	美術とこころ

吉河 康二	看護と遺伝
吉良 國光	大分の歴史と文化
堀永 孚郎	母性病態論
肥田木 孜	母性病態論
宇都宮 隆史	母性病態論
谷口 一郎	母性病態論
上野 桂子	母性病態論
戸高 佐枝子	母性看護援助論 I, II
劉 美貞	韓国語
福元 満治	保健医療ボランティア論

3 事務職員

○事務局

事務局長	石川 誠	H20. 4. 1 採用 H21. 3. 31 退職
統括部長	後藤 一昭	
・経営企画グループ		
課長補佐	安部 正雄	H21. 3. 31 転出
主任	森 清	H21. 3. 31 転出
主任	神崎 正太	H20. 4. 1 採用
事務職員	平川 昌子	H21. 3. 30 退職
・財務グループ		
主幹	高橋 秀也	H20. 4. 1 転入
主任	伊藤 慎太郎	H21. 3. 31 転出
事務職員	石井 健治	H21. 3. 31 退職
事務職員	釘宮 裕和	H20. 10. 1 採用
事務職員	池邊 尚美	
事務職員	大島 紅	H20. 6. 11 採用
・教務学生グループ		
主幹	佐藤 俊実	H21. 3. 31 転出
副主幹	佐藤 恭子	
副主幹	梅木 満長	
保健師	原田 幸代	H21. 3. 31 退職
事務職員	神崎 純子	H21. 3. 30 退職
・図書館管理グループ		
主査	小野 永子	
司書	牛島 聡子	
司書	中野 美佐子	H21. 3. 31 退職